新釋
近松傑作全集 一
挿圖

明治
43. 6. 17
内交

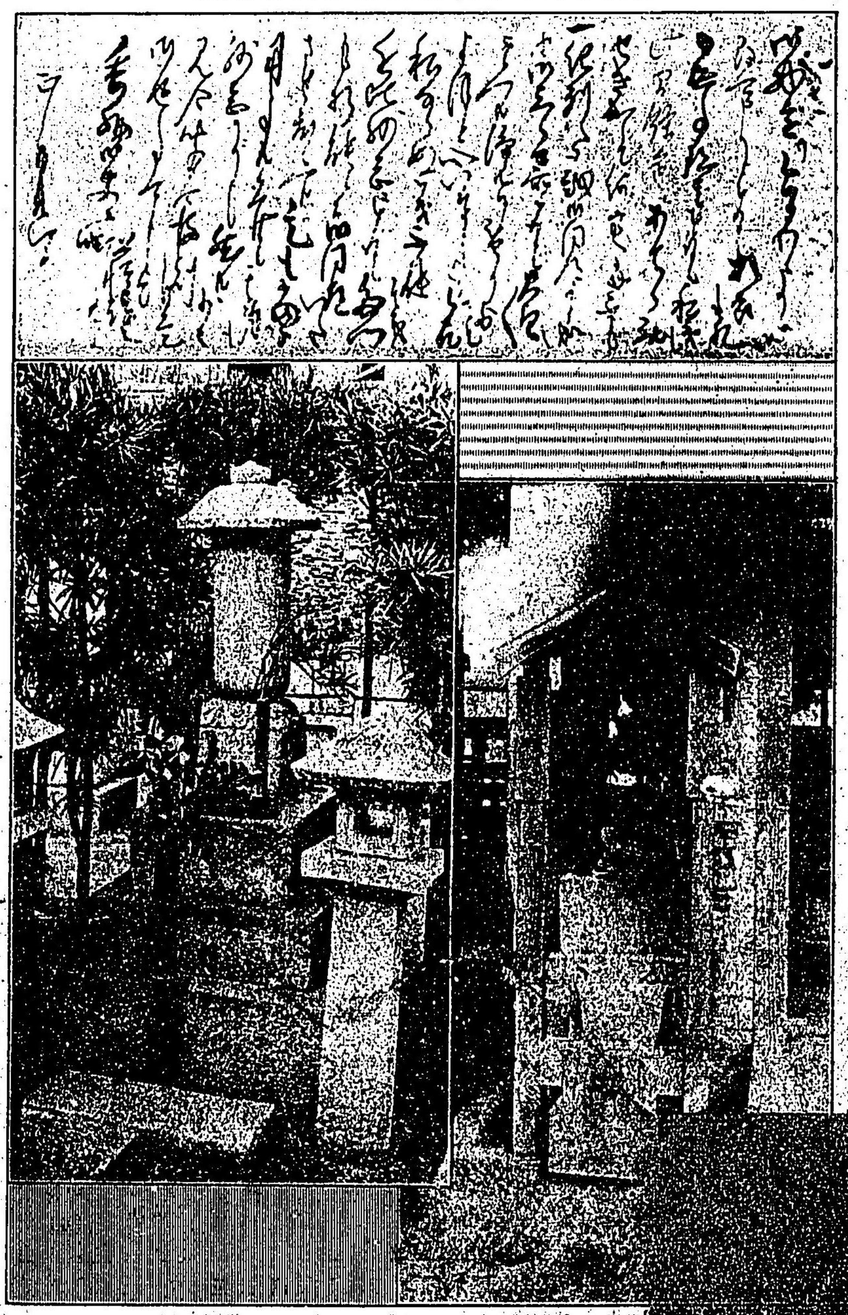
坪内逍遙
饗庭篁村
幸田露伴
島村抱月
水谷不倒

（共選序論）

水谷不倒校訂註釋

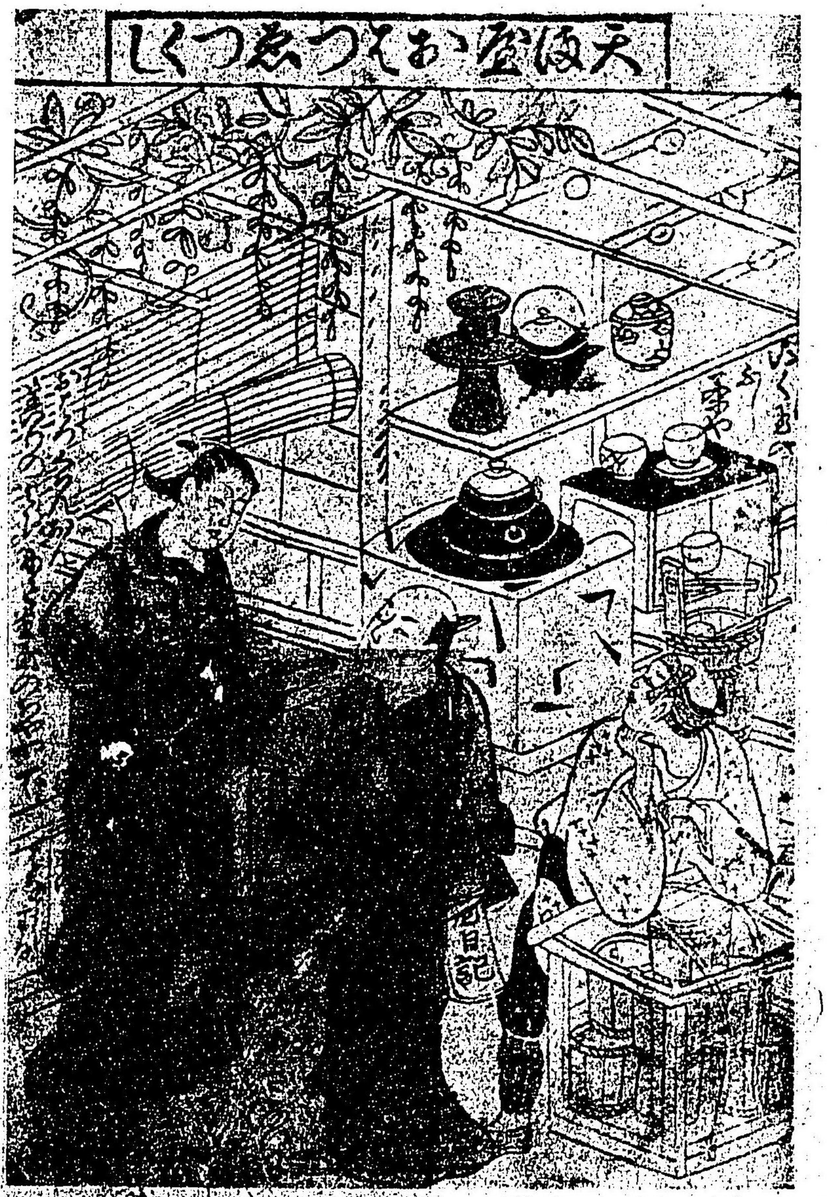
近松門左衛門肖像（睡餘小錄所載）

紀州行脚りの文（竹本播津大掾所蔵）

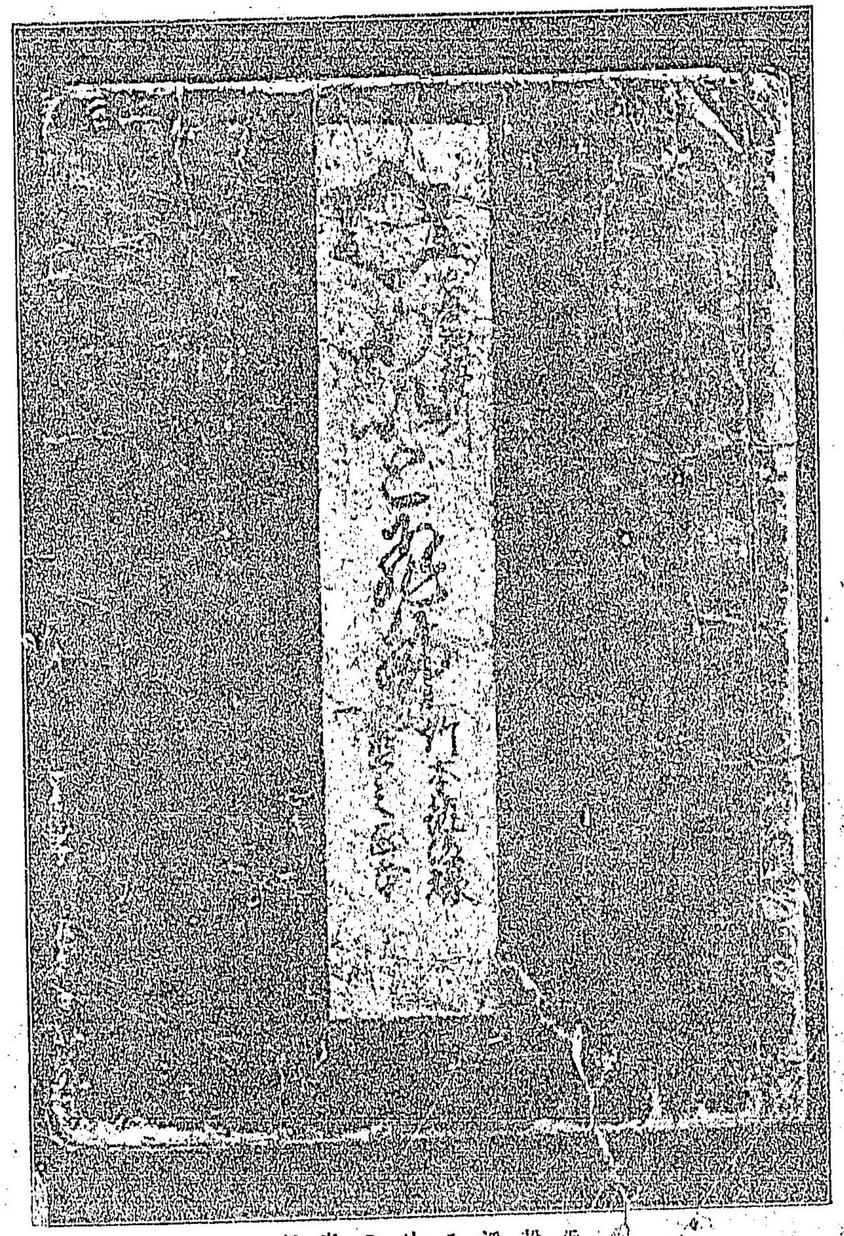


（木崎好尚氏撮影）

大阪下寺町浄國寺眼屋夕霧の墓　　寺紙治小春の墓



（安田松廼舎氏蔵本）



近松浄るりの表紙

九行本の書出し

右此本者依為懇望
文句音節亦悉校合
加秘蜜令開版者也

京　正本屋　竹本筑後掾
　　谷村清兵衛板

近松淨るり集附の二

發行の要旨

一、文藝發展上の一大關典

最近に於ける我國文藝の發展は實に驚くべきものありて、之が研究の方法も、漸く備はれるに近し。然れども其備はれるは、主として外國文藝、乃至上古中古の國文方面の事にして、我文藝の復興期とも稱すべき元祿時代以後の文藝が、殆ど全く忘却せられ、精確に之を保存するの道さへも講ぜられざるは、明治昭代の一大闕典なりと謂はざるべからず。

二、文藝の價値

抑、文藝の物たる、善く事物の實情を寫し、人情の機微を穿ち、觀る者をして、宛然活事物に接觸するの感を湧起せしめ、其作中に恍

惚自失せしむるを以て、其上乘と爲さゞるはなし。故に善く之を味ふるものは、坐ながらにして社會の實情を知り、人情の秘奥に通じ、依て以て處世の活指南を得べきのみならず、又、之に依て情操を養ひ嗜好を高め、知らず識らずの間に、其人格をして高雅圓滿ならしむべきなり。文藝が處世上、教育上、極めて重要なる、何ぞ多言を要せん。之を以て、娯樂以外、何等益する所なしとするは齊東野人の陋見のみ。

三、泰西に於ける文藝の地位

故に泰西諸國に在りては、殊に文藝の普及に重きを置き、詩歌音樂は固より、最近作家の筆に成れる脚本小説に至るまで、其優秀なるものを選びて學校の教科用と爲し、孜々として趣味教育の徹底を圖らざる無し。故に其紳士淑女は、單に自國に於ける文藝

上の大作に通ずるのみならず、諸外國の大作にも大略通曉せざるは無きなり。若し夫れ英人にしてシェークスピヤの何人なるかを問はれ、若しくは其傑作の梗概を問はれて、之に答ふる能はずんば、之を以て大なる恥辱と爲すべし。文藝の重んぜらるゝこと斯の如し。是れ其競爭激甚なる渦中に在るにも拘らず、善く高雅の品位を保ち、文質彬々の美を致せる所以なり。

四、本邦に於ける文藝の冷遇

然るに我國に於ては、古來文藝を疎外して、戯作俗文と爲したる陋習の、今尚、脱せざるもの有るを以て、近來、文藝の價値の、漸く識者間に認められたるに拘らず、所謂雅文に屬する者の外は、曾て學校の教科として用ひられたる事なく、近代文藝は殆ど全く教育圏外に放棄せられたるの情態に在り。故に元祿文學復興の呼

聲の十幾年前に高かりしに拘らず、近松西鶴等の大作に對する世間一般の智識は、今尚、甚だ微弱零碎にして亂雜不秩序を極め、紳士淑女を以て自ら居る者と雖も、概して近松西鶴等の大作を知らず、又、之を知らざるを以て些の恥辱とも爲すこと無きなり。英人がシェークスピヤの作を知らざるを以て大恥となせるものと好箇の對照なりと謂はざるべからず。

五、 本書發行の已み難き所以

本邦に於て、近世文藝の冷遇せらるゝは、畢竟、之を研究する方法の備はらざるが爲なり、之を厚遇せしむるの道を講ぜざるが爲なり。嚮に元祿文學の呼聲の高かりしに當り、若干の書籍の發行せられざるにはあらず、而かも是等は校合杜撰譌誤充溢の文集、若しくは斷片的の研究に過ぎざれば、之を以て、元祿文學研究の

津梁と爲すべからざるは固より論なき也。故に其の研究に意ある者は、勢、古版本に依らざるを得ずと雖も、是等の版本は概ね散佚して、唯僅に珍藏諸家の筐底に秘せらるゝのみなれば、之を一瞥せんことも容易ならず、況んや之を研究することをや。是れ文藝發展のため、本書發行の已むべからざる所以なり。

六、 本書の選者

是に於て本部は、文壇の泰斗として令名嘖々たる逍遙、篁村、露伴、抱月、不倒の諸氏に懇囑して近松傑作全集を選定し、且つ之を校訂詳解せんことを求めて、本書發行の企劃を立てたり。諸氏が近松文學精通のオーソリチーたるは、茲に之を言ふを要せず、不倒氏が夙に意を近松研究に注ぎ、其嘗て淨瑠璃の本場所たる大坂に在りて毎日新聞の文藝を擔任するや、鋭意近松の作品を求め、

親しく其作中の古跡を探り、又同時代に於ける地理、風俗、若くは狹斜に關する圖書を蒐集し、其研鑽到らざる無かりし事も、茲に之を叙々するを要せざるべし。諸氏は本部の懇囑を入れて凝議百端、各、其擔任方面を分ち、多年を費して茲に本書を大成したり。思ふに本書の如きは、近松物の出版に於て、單に空前の大著たるのみならず、又、今後に於ても容易に企劃せられざる大出版たるべし。

七、選定せる傑作の大要

近松の作品は無慮二百餘篇と稱せらる。然れども其作の疑しきものあり、近松作としては觀るに足らざるものあり。故に本書に於ては幾多の研究討議を經て、精を拔き粹をあつめ、左記四十餘篇を選定したり。是等諸作の中には、非凡の傑作なるに拘らず、全く後世に忘れられ、其版本の如きも、殆ど全く湮滅して、僅に一本を傳へたる珍品も尠しと爲さざるなり。本書中に虫喰の字數を數へて□□を印せる個所の如きは、之を幾多の近松通に圖り、之を幾多の藏書家に尋ねて、有ゆる手段を盡したるに拘らず、遂に對照すべき他本を發見せざるものとす。されば本書に就きて近松を研究する者は、其各時期に通ずる構想筆力の進化變遷を討尋すべきのみならず、歌舞伎狂言、時代淨瑠璃、世話淨瑠璃、諸作に亘りて、其精華を窺ふことを得べし。左に作名の一斑を錄す。

第一、歌舞伎狂言本　左の諸作は都萬太夫座にて當時の名優坂田藤十郎、水木辰之助等の演じたるものにして、近松が脚本の標本と爲すべきものなり。

傾城佛の原　壬生大念佛　一心二河白道

第二、初期の時代淨瑠璃本　近松が初期の作は、尙、古淨瑠璃の臭味を脫する能

はざるのみならず、元祿以前の諸作にありては類型のもの多ければ其標本として左の二篇を掲ぐ。

三世相　出世景清

第三、成熟期の時代淨瑠璃本　左の諸作は元祿期に成れる成熟の作とす。

蟬丸　孕常盤　源氏冷泉節　松風村雨束帶鑑　等

第四、圓熟期の時代淨瑠璃本　左の諸作は寶永正德年間に成れる最も圓熟の作にして、何れも人口に膾炙せるものとす。

用明天皇職人鑑　傾城反魂香　兼好法師物見車　碁盤太平記

國性爺合戰

第五、晩年の時代淨瑠璃本　左の二作は近松が最後の作品とす。

曾我會稻山　傾城酒天童子

第六、世話淨瑠璃本　世話物は近松作品中の精華と稱せらるゝものなれば其全部を網羅す。即ち

曾根崎心中（源五兵衛）　薩摩歌（おまん）　心中重井筒　心中二枚繪草紙

長町女腹切　淀鯉出世瀧徳　大經師昔暦　堀川波の鼓　ひぢりめん卯月の紅葉（あとな）　卯月の潤色（ひ心中）　丹波與作　心中萬年草

（おなつ）清十郎五十年忌歌念佛　今宮心中　心中刄は氷の剱日　夕霧阿波鳴渡　（忠兵衛）梅川冥途の飛脚　生玉心中　鑓の權三重帷子　山崎與次兵衛壽の門松

地獄　心中宵庚申　博多小女郎波枕　心中天の網島　女殺油

八、本書の價値

本書は近松の傑作を選出して綿密なる校訂を加へ、讀み難き假名書の個處には適當なる漢字を塡充して原本に據れる傍訓を施したるのみならず、近松研究者をして毫末の遺憾なからしめんが爲に、一篇毎に其作の材源、及び由來等を詳說したる解題を掲げ、又、作中に於ける歷史上の人物、事件、故事、難句、及び言語風俗等の疑點は悉く之を鼇頭に詳解し、且つ其說明を助けんが爲に

は特に圖畫を挿入したり。

抑、註釋の事たる、一見容易なるが如くにして、其實は大に然らざるものあり。上中古の國文學の如く、既に先人の註釋あるものに於て、尚且然り。況や近松の淨瑠璃狂言の如く俗語狹斜語等、典據の徵すべからざる幾多の難語難句を交へ、先人の未だ嘗て筆を染めざるものに於てをや。思ふに我國に於て組織的に近松を研究したるは、明治二十三年の冬、坪内逍遙氏等數名の篤志家が會合して、評論對究したるを以て初とす。而して本書の註釋者たる不倒氏は當時其研究會の中堅として深く近松に意を注ぎ、爾來二十餘年、常に其研鑽を怠らず、近松通を以て一世に推さるゝものたり。然るに本書を註釋するに當りては、山積の材料を友とし、坪内、饗庭、幸田、島村諸氏の熱心なる助力ありたるに拘らず、尚且、

五ケ年の長日月を費したり。以て本書註釋の容易ならざるを知るべし。

且又、本書は近松に關する有らゆる智識を與へんとするものなれば、共選者多年の研究に成れる長篇の論文を、序論として掲ぐるのみならず、多費を厭はずして、多數の圖畫を挿入したり。左に其大要を示す。

第一、近松の遺物――遺跡、肖像、消息文等を鮮明なる寫眞版となす。

第二、淨瑠璃本中、原形の完全なるもの數種につき、表紙の模樣、外題、並に奥附の體裁、丸本と繪入本との異點等を、是亦、寫眞版に製して原本の體裁を一目瞭然たらしむ。

第三、歌舞伎狂言本、及び淨瑠璃本に挿繪あるものは、出來得る限り之を收め、原圖と殆と異ならざる精巧の木版に彫刻して要所〳〵に挿入す、

第四、歌舞伎、又は淨瑠璃に演ぜられたる、近松の作にして、或は評判記に、或は繪

番附等に出でたる圖畫は參考として之を加ふ。

第五、元祿時代の風俗を說明するに當り、今日にては殆ど廢れて、其用途は勿論其形狀すらも判然せざる器物等尠しとなさず。是等は成るべく當時の刊行書中に其圖畫を求め、且つ其時代の風尙を失はざらしめんが爲に、原本の儘を縮寫して昔の俤を存す。

以上記す所は僅に本書の一斑のみ、而かも之に依て其價値の如何を推すべきなり。本書が校訂綿密なる近松全集の嚆矢として、又、空前の大註釋書として、其研究者に至大の惠澤を與ふべきは、殆ど疑を容れざるなり。

明治四十三年六月

早稻田大學出版部

緒言

明治二十三年の秋、坪內氏の邸に同人相會し、近松の世話淨瑠璃を論評したる事あり。これ予が近松に入るの始めにして、爾來其の作を讀む毎に不審あれば之を記して解說を求めたり。其の後予大坂に遊び、彼地にあること六年、暇あれば巢林子の遺跡を訪ね、或は淨瑠璃に現はれたる地理、人情、風俗等を探りて積年の疑ひを解けるもの尠からず。三十八年東京に歸るに及び、其の稿を纏めて一書を編し、予と同好の人に分ち、近松研究者の參考に資せんと欲したり。されど予が此の稿は原來予の物數寄に成りたるものなれば、好む所に偏し、或點には詳細を盡せども或點には全く解說を脫したるもあり。且其の種類も世話物に限られ、一も

時代物に及ばず、近松の解説としては素より不備の書なりき。寧ろ之を基礎として近松の作全體の中より傑出せるものを選び、何人の疑ひをも解き得る如く、難解の語句を註釋して之を公にせば、世を裨益する所あるべし、との先輩の忠告もありたれば、茲に本書の編輯方針を改め、先づ坪内、饗庭、幸田、島村諸氏の賛助を仰ぎ、時代物中より十餘種を拔き、約四十種の名作を選定し、更に新註釋の業に服し、爾來五年の歳月を費して、こゝに漸く本書の完成を見るに至りぬ。即ち題して新釋近松傑作全集といふ。然れども予淺學、巣林子心血の大作を能く悉く解説したりといはんや。要は多年研究したる所を世に發表して、讀者と與に此の大文豪を知るの階梯とならば足れり。不備にして盡さゞる所は大方識者の是正を俟たんのみ。今本書を刊行するに當り、聊か本書の成れる由來を書して卷首に附す。

明治四十三年初夏

水谷不倒

凡例

一近松の作と稱するもの百餘種あり。今茲に收むる所は其の半ばに過ぎざれども、近松の精華と稱せらるゝ世話物の全部、時代物中の佳作、歌舞妓狂言本及び各時期における代表作を網羅したれば、本書を通讀すれば近松の全豹を窺ふ事を得べし。

一是迄世に出たる近松の飜刻書には、原文の儘を一字一句改めざるものあり、又原文の假名多きは、漢字に改めたるあり、聊かにても原文の趣を知らんとする研究者には前者を可とし、普通の讀者には後者の讀易きを勝れりとすべし。本書もと近松の作を洽く世間に推薦するにあれば、後者の方法に從ひ假名書きの所は所々漢字に改め、之に總傍訓を施し、何人にも讀易からしむるにつとめたり。然れども漢字に改むるが爲めに、原文の妙を失ふ虞あるもの、或は讀下しに少しも差支へなきもの等は、之を改めざるも多し。

一近松の註釋書にて既に世に出たるものを見るに、著者の見解にて繁簡精粗の別

ありと雖ども、近松は世を隔つること未だ遠からず、之を竹取源氏等の古文學に比するに、言語其のものが今人に解し難き程難解のものにあらず、唯近松を解するの困難なるは、古文學は既に幾多の註釋書あるに、近松には師表と仰ぐべき先覺の解說なきと、俗語、狹斜語、俚諺、小唄等殆ど典籍の據るべきものなき等にあり。殊に小唄に至りては、當時の流行唄を入れたるもあり、近松自ら作りたるもあり、其の文句は讀みて妙味を感じながら、意義の漠然として捕捉し難きものあり、是等は解說せんとするも得ず、單へに識者の敎を俟つにあるのみ。又引掛け詞、何々盡しとて物の名寄めきたるもの等に至りては、語呂口合口を衝いで出で、所謂咳唾玉をなせども、其の意義に至りては、本文と何等の關聯せざるもの少なからず、これらは其の煩を避けてわざと註釋を省きたるもあり。

一器物又は衣服等は、詳しく說くも能く解しがたきものあり。斯の如き場合に、もし圖畫を示す事を得ば一目瞭然たり。本文中挿入したる圖畫は、必ずしも此の意義によりて用ひたるものゝみにあらずと雖ども、要するに註釋を簡明ならしむるにあり。されば何人も知るもの、例へば三味線の如きおのづから明白なるものは、

淨瑠璃に密接の關係あるも之を示さず、之に反して紡車の如き、早晩吾人の記憶より忘失せられんとするもの、或は比翼の鳥の如き相像畫も、時に之を挿入するあり。蓋し今人の思想には、興味を以て迎へらるればなり。而してこれらの圖畫は、概ね當時の古板本中にこれを求め、成べく原圖の趣を失はざるやう彫刻して、其の時代を表明するの一助とせり。

一淨瑠璃の正本には、精細なる節付あり。これを活版にて傳ふることは爲し能ざる所なれば、概ね省けり。然れども文字の記號にて、讀下しの助けとなるべきものは行間へ六號活字もて挿入せり。例へばヲクリ、三重、地、フシ、詞等の如き、曲節の變化、段切れを知るもの或は謠、說經、祭文、歌等の引用句、即ちサワリの記號等是なり。

一既刊近松註釋書は、櫻庭笠村氏の『巢林子撰註』に、曾根崎心中、長町女腹切、出世景清、蟬丸、傾城反魂香、及び『近松研究』中に丹波與作六編あり、藤井紫影氏の『巢林子評釋』に曾根崎心中、冥途の飛脚の二編あり、高野辰之氏の『近松世話淨瑠璃詳解』に重井筒、淀鯉出世瀧德、夕霧阿波鳴渡の三編あり、佐々醒雪氏の天網島ありて近松作の註釋せられしもの實に十一種に及べり。本書の註釋中諸氏の說を引用せるもの

少なからず。饗庭氏の說は〔饗註〕藤井氏のは〔藤註〕高野氏は〔高註〕の略符を以て之を標示す。

一同一語にて屢繰返さるゝ事あるものは、其の語を上欄に擧げ、下に※印を附したり。即ち※印あるものは既に一度註したる事のある語と知るべし。かゝる場合には最終の卷に索引を見るべきなり。

一本書には別に引用書目を掲げず、されど註釋の所にて、其の說の出所を明示する必要あるものは、一々引用の書目及び板行の年月等を記入したり。

一本書の註釋には、永田有翠、伊原青々園兩氏の藏書に負ふところ少なからず。又本書に對し間接直接に援助を與へられたる人頗る多し。今一々其の芳名を掲げずといへども、こゝに一言諸氏の厚意を深謝するものなり。

新釋挿圖

近松傑作全集第一卷目次

一、序論

近松門左衛門傳（附年表）……（水谷不倒述）……一

近松作の取題材料および近松作が後におよぼせし影響……（饗庭篁村述）……七九

古曲の新釋につき……（幸田露伴述）……八四

近松の藝術及人生……（島村抱月述）……九〇

近松とシェークスピヤ……（坪內逍遙述）……一〇四

一、傾城佛の原……一一七

一、長町女腹切……一七五

一、淀鯉出世瀧德……二三九

一、曾根崎心中……三〇五

一、心中重井筒……三六三
一、心中二枚繪草紙……四一七
一、丹波與作……四六七
一、おうめ　粂之助　高野萬年草……五四五
一、夕霧阿波鳴渡……五九七
一、山崎與次兵衛　壽門松……六五七
一、博多小女郎波枕……七二五

（近松傑作全集第一卷目次了）

序論

近松門左衛門傳

水谷不倒

近松の產地は如何

巢林子の事蹟を繹ぬるもの、第一に逢着すべき疑問は、彼の產地の所々にありて一定せざること、及び近松門左衛門の名の起りに就て二說あること是なり。是迄世に近松の事蹟として傳へられたるものは、いづれも德川時代に於ける諸家の隨筆に據りしものにて、是等は深く事實の穿鑿を遂げたるものは甚だ少なし。普通近松傳の本說といふは、近松は長州萩の產にして、弱冠の時肥前唐津の近松寺に遊學し、中頃悟るところありて俗に還り、衆生濟度の爲に、歌舞伎又は淨瑠璃作者となりたるにて、其の以前近松寺の徒弟たりし緣故を以て、作名を近松門左衛門と名乘れりといふにあり。又一說としては、近松門左衛門の名に就て、若し巢林子が弱冠

の頃、近松寺に遊學せし因緣ありて其の名を附けたりとすれば、そは近江國三井の近松寺なるべしといへり。又其の產地に就ては、京都といひ、近江といひ、三河、越前、出雲等の數說あり。而して長州萩の產といふことゝ、肥前唐津の近松寺といふことは、地理上密接の關係を有すればにや、異說を挿みたるもの少なけれど、其の他は京都より唐津に趣きたりといひ、或は三井にありきといひ、區々にして一定したる說なく、三河、出雲、越前等の說の如きは素より根底なく、取るに足らざるものとするも、京都の產にして三井の近松寺に在りきといふ說は、近來近松研究者間に重きをおかるゝに至り、今や近松傳の疑問は、長州萩說(甲說)と京都說(乙說)との二點に歸着し、其の孰れに解決すべきかにあり。

さはれ、斯の如く種々の異說を生じたる理由は、素よりこれを知るに由なしといへども、巢林子は生前既に多くの知己を有し、高貴の御方には靈元上皇のおはしますあり、學者には穗積以貫、荻生徂徠等の頻りに其の文才を歎賞するなど、知るも知らぬも一般に門左衛門の偉なることを認めたり。されば常々彼れが淨瑠璃の文句に隨喜したるものは、其の作者の爲人に想到して崇拜の念禁ずる能はず、其の結果

は近松を擔ぎ廻り、振り舞してあらぬ說をさへ流布し、遂には皆自家の近松門左衛門たらしめんと欲し、長門、肥前、越前、三河、出雲など各自欲する所の說を主張し却て近松の產地をして不明の中に埋めたる概なき能はず。これ併しながら巢林子の偉なる所以にして、近松宗のいかに廣く、且つ其の信徒のいかに多かりしかを知るに足るべし。斯くして年月を經るに從ひ、傳へ〳〵て虛實を混同し、かゝる偉人にふさはしく面白く且道理あるらしき說に左袒するに至り、甲說の如き世人の信を博するに至りしものなるべし。予は先づこゝに、兩說の因つて來る所を辿り、事實の本源を探究せんとす。

長州萩の產といふ說の起り

『聲曲類纂』は弘化三年の著にして、近松の事を記したる書にては、德川時代最も年代新しきものゝ一なり。著書の性質上、多くの說を網羅したるに過ぎざれども、なほ甲說を本傳に立て、其の餘は異說として僅に參考に資したるのみ。之を見ても當時既に甲說の世間に勢力ありしことを知るべく、而して當時の學者また其の說を信ずるに至りしは、一は事實の興味あるにもよるべけれど、一は馬琴、南畝等の大家

が、大いに此の說を主唱したるに據らずんばあらず。馬琴は享和元年京阪に漫遊を試み、『簑笠雨談』を著はしたるが、彼れは近松の墓にも詣でたるか、そは詳ならざれども、同書には左の如く記しあり。

近松門左衛門、姓は杉森、名に信盛、平安堂巢林子と號す、越前の人(一說に三州の人)、少して肥前唐津近松寺に遊學し、後洛に住す、京師の學醫岡本一抱子の兄也、年耳順を過ぎて、享保九年十一月廿二日歿す、墳墓しれず、攝州久々智神崎の隣村也)の廣濟寺、過去帳に法名あり、阿耨院穩矣日一具足居士といふ。

馬琴はなほ此の末に「予浪花に遊びし時、歌舞伎狂言作者並木正三を訪ひて、その筆錄する所の戲財錄を一覽して、近松が事跡をしれり」と記したり。

されど全く同書に據りしとも思はれず、又同書は正三の著にはあらず、並木五瓶の著なること人の知るところなるが、『戲財錄』には近松が本姓並びに產地を記さず。越前の人一說に三州の人とするは、むしろ濱松歌國が『南水漫遊』に據りしが如し。

同書「平安堂近松氏之傳」に曰く、

淨瑠璃の作文歌舞伎狂言作者名人と世に聞えたる近松門左衛門姓は杉森名は

信盛平安堂巢林子と號す越前の人(一說に三州の人とも云)壯年にして肥前唐津近松禪寺に遊學し義門と改僧侶を數多門人となせしが所詮一寺の主と成てはふ大儒の醫師ありけり是に寄宿して還俗なし堂上方へ勤仕の間有職を記憶し衆生化度の利益薄しと大悟を開き雲水に出しが肉緣の舍弟に岡本一抱子といふ大儒の醫師ありけり是に寄宿して還俗なし堂上方へ勤仕の間有職を記憶し其頃京師都萬太夫の歌舞伎芝居または淨瑠璃芝居云々。

本姓及び產地の外悉く『戲財錄』とほゞ同文なれば、「南水漫遊」は『戲財錄』により增補したるものなるべく、これよりして『戲財錄』は當時近松の事を記したる一の材源と見ることを得べきが如し。

『戲財錄』予の見たる二種の本とも、近松傳中產地を記さず、其の餘は『南水漫遊』の前半(後半は增補なるべし)と同文なれば、或は『戲財錄』の異本に、『南水漫遊』の如く、產地を記入したるものあるやも知れず。

次には南畝の說なり。南畝は寬政十年官用を帶びて、大阪に在勤せしことあり。翁のことなれば公務の餘暇は風流韻事に耽りしこと論なく、殊に近松の皷吹者として種々の事蹟を存す。其の一例として梅園主人(野里氏「梅園奇賞」の著者なるべ

し)の爲めに、近松の碑文を撰したる事は、其の著『假名世說』に載せたり。此の碑文碑石に刻まるゝとなくして草稿のまゝ、同地中村氏の家に遺りしを見るに左の如し。

平安堂近松翁墓碣

平安堂近松翁。以善戲文聞爾海內。後之作者學其體裁以爲師法。蓋此方李笠翁也。其墓併其配在浪華谷町法妙寺。今爲斷碑。梅園主人新建一碣。使予記焉。按翁本姓杉森。諱信盛。字平馬。長門萩人。父諱某。母某氏。以慶安四年辛卯生。翁享保九年甲辰十一月廿一日歿。歲七十四。伯出家爲相國寺宗長老。仲善醫稱岡本一抱子。叔爲翁。季女錦江俳諧師。各擅其名。翁幼遊學唐津近松寺入京事一縉紳家爲雜掌。後辭仕居浪華。變姓名稱近松門左衛門。號平安堂。巢林子。爲宇治加賀掾作戲文。曰團扇曾我。其文大行。演劇百日。改題百日曾我。實元錄十二年也。又作國姓爺回演之三年至。膾炙人口。翁於事情無所不盡。宛然口氣。感動人意。其孝悌忠臣禮義廉耻之風。使人之喚起。其功偉矣。唯曾根崎一劇。匹夫匹婦之諒矢死俱斃。名曰心中。此風大行。可謂功不掩罪矣。然薮園夫子一見此文。至其夫婦趣死也。曰一步霜消一步霜。五更三點唯餘一。喟然嘆曰。彼妙處在一阿堵中。然一功一罪在善聽之者。於翁何焉。

文政四年辛巳仲冬

江戸　蜀山　人撰

浪華　梅園主人建

此の碑銘の文意は南畝が隨筆中にも現はれたり。長州萩の產にして肥前唐津の近松寺に遊ぶの說は、馬琴よりも寧ろ南畝の說なり。南畝の說は恐らく、梅園の說なるべく、梅園は浪華にて、蒹葭堂と並び稱せられたる好事家なり。饗庭篁村、櫻井成明二氏の秘藏にかゝる近松の遺墨「平家女護島」の草稿二片に「梅園」の藏印あるは、恐らく此の野里氏なるべく、其の遺墨を所有し、其の碑を建設せんとするほどの篤志家なれば、近松の事蹟に就ても、野里氏は何等か得たる所ありしならん。若し此の梅園主人にして、近松の事を記する所の書ありとすれば、そは長州萩說の出所として、有力の證據とするに足るべし。されど未だこれを見ざるを憾みとす。即ち南畝は此の梅園等の說によりて、碑銘を撰し、又著書にも其說を公にしたるなるべし。而して南畝は當時の文壇に重きを措れたる人として、彼れの說は世人の深く信ずるところとなりたるなり。たとへ其の記實は存せざるも、南畝の說は假りに梅

園の説とすれば、梅園の説の出所知らまほしく、恐らく假空の談にはあらざるべし。當時大阪には既に流布したる傳説ありしこと、これより以前に編せられたる『戲財錄』あるを見ても明なり、馬琴は南畝と殆ど同時に大阪に遊びて『戲財錄』によりてこれを世に紹介し、南畝もまた梅園の説を公にして、こゝにいよ〳〵近松傳の本説を形成したるものゝ如く、而も世人は其の産地には馬琴の説を採用せずして、全然南畝の説を以て近松の正傳と認むるに至りしが、唐津近松寺に遊學したる説は、馬琴南畝ともに一致して、何人も殆ど疑ふものなかりき。

京都の産といふ説

然るに『戲財錄』及び梅園主人の説よりも、古き書には餘り甲説(長州萩の産にして、肥前唐津の近松寺に學びきといふこと)を記したるもの稀なり、却て乙説(京都の人にして近江三井近松寺にありきといふ説)に傾けるが如し。『音曲道知論』(明和頃の著)の内には左の一節あり。

天和の頃近松門左衛門といひし人出たり此人始は堂上方に仕官して其後近江の近松寺に遊ぶ故に此苗字を呼けり

文頗る簡なれども、近松門左衛門が京都の産なることも言外に現れ、近江國三井の近松寺にありしに因り、近松門左衛門と名乘りし事を説けり。又『茶話雜談』といふ寫本あり、著者は櫻里散人といへど何人なるかを詳にせず。但し其の書き風にて京都の人なることを知る。年代も詳ならざれど、是又其の頃の編述なるべし、其のうちにも近松の一節あり。

淨瑠璃文作者近松門左衛門これは杉森氏にて京都阿野家に仕へ雜掌たり元祿初の年京都萬太夫歌舞伎芝居狂言の作者たり其の後大阪へ下り竹本の淨るり作者となり平安堂菓林子と號す七十五歳にして享保九年に死す

とあり。之は單に近松が阿野家の雜掌たりし事をのみ記せども、京都の出生なることは想像するに足る。然れども菓林子の菓を菓と誤り、(諸書此の誤あり)『竹豐故事』(亦然り)年齡の七十五歳も相違しをれど、此の書の著者を京都の人とすれば、近松の事實に就ては多少信を措くべきものあり。殊に都萬太夫の作者より、淨瑠璃作者となりし事の如きは、事實を得たるものといふべし。又南畝が大阪に在勤中、手に入たりといふ『淨瑠璃譜』即ち原名『諸事聞書往來』は、書中の記事明和元年頃まで

ありて其の後の事を記さゞる所より推せば、これも其の頃の著書なる事いふまでもなし。同書に曰く、

名人の作者近松門左衛門、出生は近江國高觀音近松御坊にて出家をきらひ、京都にくらし居られしを、竹本筑後椽云々、

こは出生を近江として、後に京住せしものゝ如く傳へたり。更に『竹豐故事』を見れば、

淨瑠璃作者(中略)を產業となせる人は近松門左衛門に始る此人博學碩才にしてしかも當世の人氣を察し世間の世話を能呑込て百餘番の淨るりを作られたり其文句言妙不思議を綴る元來は京都の產にて去る堂上の御家に仕へ本姓は杉森氏にして由緒正しき人成しが故有て浪人と成云々

此の書は寶曆六年、浪花散人一樂の著しゝところなり。一樂は又別に『今昔操淨瑠璃外題年鑑』の著ありて、其の序文には寶曆七年八十翁一樂とあり。一樂は何人なるかを詳にせざれど、一風の隨筆中に同書は自家の藏版なる事を記せば、恐らく祖西澤一風の子、若しくは弟にて一の字を號とせるものゝ如く、寶曆七年八十歳とすれば元

祿初年の生れにして、壯時近松が全盛期に遭遇し、恐らく近松とも親交あり其の事實も詳しく知りたる人なるべし。されば京都の產にして由緒正しき人にて浪人たるまで簡なれども近松が前半生のことを記し、其の言には一層重きを置くべき價値あり。

是等の諸說を總合すれば、甲說、即ち近松は長州萩の產にして肥前唐津の近松寺に遊學したりといふは、寬政以後、並木五瓶、野里梅園等の說より流布し、其の以前の書には乙說、即ち近松は京都の人にして近江三井の近松寺に在りし事をいへり。即ち乙說は古く甲說は後の說といふことを知るべし。但し近松と同時代にして豐竹座の軍師たり、兼ねては作者として、其の事情を詳にせる西澤一風が、其の著『今昔操年代記』に、「近松は作者の氏神なり」と稱へながら、其の出生遊學の事を記さず、『難波土產』の著者穗積以貫もまた近松の文を贊し、劇作に關する批評をなしながら、遂に一言其の履歷に及ばざりしは、頗る惜むべし。されど此の二家が言はざるは、却て近松の生涯に、甲說の如き傳奇的の趣味ある事實なきことを證するものとも見るを得べし。

維新後に現はれたる一說

維新後に至り、又別に一說を生じたり。そは明治二十一年、近松門左衛門の遠孫と名乘り、佐々原作五郎といふ人、近松の總家と稱する山口縣士族にして相杜（すはのもり）親介外二人と連署して、京橋區役所へ、近松門左衛門の絶家再興屆を出したるが、當時區役所へ提出したる由緒書に認めたる所を見るに、近松門左衛門信盛は、長門國大津郡深川村（萩より八九里の所）相杜主殿助三善廣品の男にして、信盛の弟に三原正伯なる人あり、佐々原某は此の正伯三女の血緣のものなれば、今回近松の絶家を相續せんといふにありき。又同二十八年頃、大阪四天王寺字一ッ家の邊に建設されたる巢林子の碑銘には、近松門左衛門信盛は、三善廣品の男にして、遠祖は三善清行なり、清行十世の孫に太田信濃守時直、周防國玖珂郡相杜鄕蓮華山城に居り、其の地名を取りて姓となし、爾來相杜氏を冐すに至れり。後相杜氏は大内氏毛利氏等に屬し信盛が父の代となりぬ。信盛は承應二年癸巳を以て長門國豐浦郡内日村に生れ、後大津郡深川村に移れる由を記せり。此の建碑發起人は小室某といふものにして、佐々原某等とは別人なれども、其の碑銘は同一出所のものにして、前の由緒書を

敷衍したるものらしく、其の產地の長州なる事は從來の說の如けれど、萩といはずして大津郡深川村といへる點頗る耳新しく覺えたるが、そも〳〵此の說の流布せられる當時の情況について一言すれば、近松版權興行事務所といふもの諸所に設置せられ、近松作の版權を彼等の手に收め、若し歌舞伎芝居等に之を演ずるものある時は、興行稅を取得せんと企畫したるものゝ如く、同時に彼等の手によりて、近松祭、又は紀念碑を建設せんとして、歌舞伎幾太夫等の藝人社會を勸誘して寄附金の募集をなしたる事實あり。大阪一つ家の建碑の如きは、恐らく其の成功したるものゝ一にして、唐津近松寺の建碑の如きは遂に成らずして終りたり。而して近松總家と稱する相杜親介といふは、「近松版權興行事務所第三支部員」の肩書を有する人なる事を知る時は、佐々原某の近松絶家相續の件の如き、又紀念碑建設の擧の如きはたま〳〵或目的の手段に使はれたるものなる事を發見するに難からず。唐津近松寺にて土中より發掘せりといふ碑文にも、長門深川の人とあれば是又同時頃何人かによりて作爲せられたるものなるべく、是等維新後に現はれたる新事實は、殆ど取るに足らざるものゝみにして、爰に論ずるは寧ろ大人氣なしとの譏を免

れずと雖ども、世間の廣き往々にして是等の說に惑はさるゝものなきを保せざれば、こゝに一言辨じをくのみ。（なほ此の事は予先年『德川三百年史』中の近松傳において詳しく論じをきたり。）

京都說は殆ど確實なり

以上述べたる所によれば、長州萩說には、原來確かなる根底なし。然らば京都說は如何といふに、近松が京都の人なることを確むるには、俳書『寶藏』の追加に載せたる杉森一家の俳句こそ、能く其の事情を盡したるものといふべきなれ。即ち『寶藏』の序文によれば、著者山岡元隣は豫て萬句興行を思ひ立ち、知人より句を募りたるところ、未だ其の數に充つるに及ばざるうちに、病に罹り、或は遂に起たず、其の志を成す能はざるを察し、當時其の集まれる句のみを板行して之を『寶藏』の卷尾に附したり。これ實に寬文十一年の事に屬す。元隣は斯くて其の翌寬文十二年に歿したるが、此の集れる句のうちに、杉森氏一家の俳句あり。今同句集より杉森氏の句を順次に拔き左に揭ぐべし。

かへるにも時正たがへぬ雁字かな　杉森信親

しら雲やはななき山の瓔かくし　同　信盛

花をさかせ又ちらするは異風かな　同　信義

花にいやな風は空ふけ月の雲　杉森五郎助十一歳　信秀

糸さくらながめことじにかは哉　杉森信義

あふひかつらかくるゝ宮居はかもし哉　同　信義

稻の露はまづそのまゝのほたる哉　同　信義

あした見ば月もや不足けふの月　同　信義

さかりいかにちるはもてなす雪の花　同　信義

これを見れば、信親、信盛、信義、信秀、喜里の五人皆杉森氏の一家にして、信盛の門左衛門とは、父子兄弟の關係ありし人々なること、杉森氏は季吟門にて元隣とは俳諧の友なりしか、然らざれば元隣に就て學びしものなることを知るべし。又其の順序によりて判すれば、信親は父もしくは兄なるべく、信義は弟なるべし。殊に十一歳の五郎助は弟なるといふまでもなく、喜里といふは女らしく恐らくは妹なるべし。而して門左衛門の信盛は此の時實に十九歳の少年なり。是より推す時は、寬文に

は彼れはなほ京都にありて、一家團欒の中に、俳句などを口吟み、樂しく暮しゐたることを知るべく、父子兄弟五人まで俳句を嗜むなど、都育ちの優長にかてゝ加へて文學の嗜ありしを思ひやられ、長州萩邊りの草深く、磯臭き所に成長せし人にあらざることを證すべし。殊に最初は都萬太夫座の狂言を書きしといふ事實は、近松の生涯の一班を窺はしむるに足るべし。

『翁草』には、近松が若き頃、正親町家に仕へたる事をいひ、正親町從一位殿は名におふ狂歌の達人にして、又若かりし頃は、戯に宇治加太夫が新淨瑠璃を作られしことありて近松は其使をなし、加太夫方へ往返し、其身も筆才有るに任せて、此の作の事を手傳ひ、次第に是に遊んで加太夫が高弟義太夫をそゝのかして、新たに義太夫節といふ一流を語り出させ、己れ其の作者になりたりといふ事を記せり。

又貞享四年の評判記『野郎立役舞臺大鏡』の一節に、近松は「萬太夫座の道具直しにも出たまひ、堺の夷子島で桑宅と組でつれ〴〵の講釋も致されけるなり」とあり。これらを合せ見れば、近松が作者道に入るの道行もほゝ窺はるべし。即ち彼れは弱冠の頃、阿野家の雜掌たりきといひ又正親町從一位ともいひて一定はせざるも、兎

に角某公家に仕へたること、又當時宇治淨瑠璃には、正親町從一位の如き隠れたる新作者ありしことを知れるのみならず、近松はそれらの關係より芝居へ入込み、又或時は堺の夷子島邊りに、講筵を開き、桑宅とは何人なるかを詳にせざれど、其の名によりて似而非法師なる事窺はるゝが、これら長袖者流と組合ひ、『徒然草』の講釋などをして、國學者ぶりたることもあれば、其の他隠れたる種々の事にも手を出したるべく、其のいづれもが成功せざりしは、通人の本性を表して遺憾なし。而も其の通人たることはむしろ時代の風潮にして、獨り近松のみ然るにはあらざるべきも、これやがて近松が長州萩邊りの田舍漢といふ事を非認し、都育ちの彼れも亦遊蕩子なる事を證し由緒ある地位も打忘れ、歌舞伎芝居へ入込み、木を打ち道具を直し、今の狂言方の所爲に毫も異ならず、粹が身を喰ふ譬に洩れず、遂に作者道へ流れ込みたるものなるべし。近松が京都の產なる事は、是等の諸說を總合すれば殆ど動かすべからざるが如し。彼れが別號を平安堂といふも亦京都の產なる事を表白する一證なり。

三井の近松寺と蟬丸宮

既に京都の産なる事を證し、弱冠の時某公家に仕へたりとすれば、最早深く近松寺に遊學したる事を穿鑿するの要なきに似たれども、其大略を述べんに近松は、寛文十一年十九歳の時京都に在り、又都萬太夫の狂言を作りしは、延寶五年「藤壺の怨靈」を仕組みしを始とするに似たれども、これ近松が狂言作者たることの書冊に見えたる始めにて、此の時始めて芝居に關係したりとは受取れず、其の以前より關係を有しをること勿論なれば、二十歳の頃より既に關係しゐたるなるべく、然る時は十九歳以後には近松寺に遊學すべき機會は殆どなき者の如し。強ひて其の時期を求むるに、十九歳以前のとならざるべからず。然れば近松がまだ小僧の時なり。もし其の頃三井の近松寺に、暫時たりとも遊學し、其の由緒にて巢林子自ら、我はもと近松寺に遊學せしものなれば、近松門左衛門と名乘るなど云ひし事ありて後に傳はれりとすれば、彼の近松寺には、淨瑠璃に關したる多少緣故なきにあらず。そも〳〵三井の近松寺（こゝは近松寺と讀む、唐津のは近松寺なり）といふは、三井寺の南方に接したる高觀音と稱する山上の勝地なり。風景眺望最も佳、それに隣りて關寺、近松御坊、關明神蟬丸祠など、名所舊跡甚だ多し。而してこゝ一帶の地を近

松谷と稱へ、又近松御坊といふは近松山顯證寺にして、西本願寺派に屬す。近松寺といふは高觀音の方にて此寺が淨瑠璃に關係ありといふは次の如し。即ち「淨瑠璃太夫口宣」といふ寫本に、說經節繼目の事を記し、

說經者由緒

關清水大明神蟬丸宮　別當　近松寺

山城國愛宕郡日暮小太夫名跡　唯重

右以唯重依願繼目所補太夫號仍而如仰

正德二壬辰九月廿八日　正滿講師

淨密講師

淨榮講師

說教者

日暮小太夫唯重

とあり、これによりて見れば、高觀音の近松寺は、蟬丸祠の別當を勤め居たること、及び說經太夫の口宣は蟬丸祠より出しことを知るべし。說經節はまた「蟬丸宮勸進」の名義にて、諸國を巡行したる事實もあり、說教節が、此の蟬丸祠を氏の神とすると古來よりの風習となりたるは、そも〳〵蟬丸は、生前に於て管絃を嗜み其の中にも最も琵琶に長じたる人なれば、ひと勸說經節に限らず、琴三味線凡て音曲の祖神と崇められたるにて、一方淨瑠璃節は平家琵琶より出たりといひ習はせしより、太夫三味線引等が此の神を尊信すること深く、現に竹本義太夫が、元祿十四年、筑後掾と受領せし時の如き、其の名披露の興行に『蟬丸』を出しゝは、意味あることにて、作者は實に近松門左衛門なりき。近松は此の古實及び由緒を正して、筑後が前途の祝福を音曲の祖神に祈りしなり。蟬丸祠は、かゝる由緒の神にして、近松がもし其の別當たる近松寺にありきとすれば、淨瑠璃作者の名を附するに、唐津近松寺の衆生濟度の說よりも、遙に意義あり又事實らしく思はるれど、予は强ひて此の說に附會せんとするものにあらず。

唐津近松寺の遺跡といふもの

轉じて肥前唐津近松寺は、近松門左衛門といかなる關係を有するかといふに、殆ど捕捉すべき證跡を認めがたし。大阪の人にして五六年前世を去りし岡本撫山氏の著(書名を忘れたり)稿本に近松門左衛門の事あり、『諸事聞書往來』の說を擧げたる後、肥前唐津近松寺の事に及びて左の如き記事あり。

肥前唐津近松寺

肥前國松浦郡唐津の有志者は今回近松門左衛門が遺骸を葬りしといふ同地の近松の墓所を穿ち其眞僞を確めし處地伏石にて左の如き文鐫附ありしといふ(明治二十四年七月六日大阪每日新聞)

印(同書には印を卯に記すも原文に就て訂正せり)海祖門上座者、長門深川人也、從當山第四世遠室禪師、而授業得度、學識共卓絕、後遊京師變姓名稱近松門左衛門、以著作淨瑠璃爲業、享保九年甲辰年十一月二十三日、卒於浪華、以遺言歸葬於寺墓地

享保十年乙巳六月二十二日

當山六世現住　　鏡堂識之

本文の記事ありしを以て七月八日近松寺に照會して其虚實を問ひしに同月十一日附を以て回答あり碑文は相違なし卯海の卯は印の誤りなりと該寺舊記には四世遠室禪師の法弟にして名は祖門古澗と號し道學兼備に因り遂に禪師の法席を續ぎしが延寶六年京阪地方を遊訪し淨瑠璃著作をなせし也とは一々明了記載せりと義門は祖門の誤りなるべしと。

寛文十一年は近松京師に在りしと前に述べたる如し。又都萬太夫座の狂言作者たるとも、延寶六年前既に證あり。而して岡本氏は篤實の學者にして、右の筆記に私見を挿むが如き事は萬なき人なれば、當時氏の問に對し、唐津近松寺の住職より返答せし所は右に記したる所と一字一句相違なかるべく、果して此の記事の如しとすれば事實に反する所少なからず。然れどもこれに據りて肥前唐津の近松寺は唯近松が弱冠の時遊學せしといふ事のみに止まらず、翁の墳墓あり、碑銘あり、寺の舊記には近松が遊學の事、京師に赴き淨瑠璃作者になりし事まで明に記しある事は始めて聞くを得たり。されど予が明治三十九年七月九日同寺に就て、親しく其の遺跡記錄等を尋ねたる時には舊記といふものなく、住僧の答へも先きに岡本

氏が受取りたる者とは全く異なれり。即ち當時予が見聞したる所は次の如し。

近松寺は唐津西寺町にあり、臨濟宗の名刹にして、舊唐津藩主小笠原家に由緒ある寺にて、寺内には近松の墓あり。又其墓より發掘したりといふ碑文あり(前の岡本氏稿本に載せたるもの)といへども、其の碑文は後人の作爲せしものなるべく、墓石また何等の記文なければ、これを近松の墓といひ得ると同時に、また他の者の墓ともいひ得べく、所詮是等を以て近松の遺跡たる事を證據立るには足らざるなり。

此の事は予去る三十九年六月の『早稲田文學』に詳しく論じおきたり。

されば同寺には、近松の遺物は勿論、これに關する記錄(前の岡本氏の質問せし時には、ありと答へたる)も存せず、たまゝあるものは、いかゞはしきものゝみにて、近松が曾て遊學せしといふ事實には何等有利なる事を證明せず。其の碑文といふものに、長門深川の産とあるを見れば、是又前の近松の遠孫と稱するものゝ作爲せし系圖及び大阪四天王寺畔に建設されたる碑銘にあるものと一致しをれば、之を刻したる時代及び其の人を物色する事强ちに難からず、所詮唐津の近松寺には、近松の遺跡も遺物も何も無き事を斷言するに憚らず。予等も亦始めより斯の如き遺

物の同寺に存在する事は期待せざりし所なり。

三ヶ所の墳墓

巣林子の墳墓は、肥前唐津近松寺にもありとすれば、摂州河邊郡久々智村廣濟寺、大阪谷町寺町法妙寺と都合三ヶ所にあり。これら三ヶ所の墓所のうち何れを以て、巣林子の遺骸を納めたる所なりとするかといふに、唐津近松寺の墳墓は、其の墓石に刻める碑文によれば、巣林子の遺言に依り、一旦久々智の廣濟寺に葬りしを、翌享保十年に改葬したるものゝやうに聞ゆれど、前述の如く此の碑文といふものに信を措き難しとすれば、同寺における近松の墓は、深く探究するの價値なしとして、殘るは跡二ヶ所即ち法妙寺と廣濟寺との墓についてなり。此の墓所のことは、去る三十四年の八月『小天地』第一卷第十號に論じたることありしも、未だ盡さゞるところありき。當時予が兩寺の墓石を見て、青き自然石の殆ど同形なるより疑を生じ、こは恐らく何れかの形を一方が摸したるものなるべしと思ひ、其の時は廣濟寺の墓を以て元の墓石となし、法妙寺のを摸しとしたるが、これも相違しをりて、兩寺とも同時に殆んど同じ形の石を以て、改築したるものなることを、後に至りて發見し

たり。即ち巣林子の墓石は、兩所とも寛政頃一旦廢壞せしを修築したるものゝ如し。南畝の『假名世說』に、大阪谷町法妙寺に近松の墓あるも、墓碑の裏かけて僅に殘る所「辰年十一月廿一日」と見ゆるのみなること、及び其墓碑の石摺を所持しをることを記したり。南畝が大阪に在勤せしは寛政十年頃なれば、當時法妙寺の墓は破壞して碑文は僅に石摺に殘れるのみ、殆ど其の形を留めざりしことを知るべし。これに依りて考ふるに、梅園主人が、墓碑の撰文を南畝に依頼せしも、此の法妙寺の墳墓を改修せんと欲したるによるなるべし。然るに如何なる故か梅園主人の手にては改修せられず、其の撰文は南畝が草稿の儘、中村氏の手に遺りて、巣林子の墓所は、其後他の人によりて修築せられたり。又馬琴の『簑笠雨談』には「享保九年十一月廿二日歿、墳墓しれず、攝州久々智の廣濟寺過去帳に法名あり」とあり。之によれば馬琴が西遊の折（享和元年）は廣濟寺にも近松の墓とては存せざりしに似たり。尤も馬琴は廣濟寺に自ら筇を曳きしか、あらぬか其の邊は知るべからず。兎に角其頃久々智の墓も廢壞して不明となりをりし事を窺ふべし。而して今廣濟寺及び法妙寺にある墓石は、弘化四年に修築せられし事實他の記事によりて證據立て

られたり。そは自ら近松門左衛門の曾孫と名乗り、狂言堂近松門三郎、一名春の家纖月といふ人の手によりて改築せられたるなり。此の人は當時狂言作者又は淨瑠璃作者中にも名を列ねたる人なるが、巢林子の曾孫なりと稱し、弘化四年二月翁の百五十回忌を營み、自ら近松門左衛門の名を襲ぎ、披露の刷物を配りたることありて、其の刷物に廣濟寺及び法妙寺にて佛事を營み、兩所の古塚を修復したる由を記しぬ。これと前述の馬琴、南畝の記事とを對照すれば、今の墓石はこの門三郎の改築せしものなること明なり。而して碑面に鐫れる文字は、凡て廣濟寺に存する所の過去帳によりて刻めるものなるべし。されば其の墓石を見ては、未だいつれを翁の眠れる所なるかを確むること能はずと雖も、廣濟寺には右の過去帳あるの外、巢林子の位牌あり。其の他同寺には、寺記中に近松門左衛門及び其の俗縁の人々の名を記したるものありて、杉森氏の菩提所として、比較的信を置くに足るべきものあり。

然るに法妙寺には、其の墓石は廣濟寺と同形のものあれど、其の他には何物をも存せず。寺僧は過去帳に其の名ある由をいへど、曾て秘して之を示さゝれば證とす

るに足らず。然らば法妙寺の墓は何の爲に建てたるかといふに、近松半二をはじめ近松の姓を冒すもの淨瑠璃作者に東南、景鯉、やなぎ、湖水軒、門三郎等數多あり。狂言作者には近松德三あり。其の他近松の姓を名乘らざるものも、西澤一風が所謂近松は「作者の氏神」なれば、以下狂言、淨瑠璃の作者と、假りにも名乘る輩は悉く近松が氏子にして、太夫三味線また近松の德を慕ふもの擧げて數ふべからず。元文五年其の十七回忌には、竹本座にて『戀八卦柱暦』を出し、翁が追善を營み、文政年中には京邦及び江戸にて百回忌を營み、天保十四年七月及び弘化四年二月には大阪にて追善を營み、斯の如きことは屢々行はれ、其の墓參りをなすもの常に絶えず、されど久々智の廣濟寺にては路遠く不便なるより、大阪の信者は其の石碑を法妙寺にも建て、翁が第二の墳墓として參拜したるものなるべし。墓所は三ヶ所にありながら、種々の點より近松の遺骸を納めたる所は、久々智の廣濟寺より外に求むべからず。廣濟寺は斯の如き由緒ある寺なれども、昔し流行し妙見も今は廢れ、寺内は荒れて寫眞に示せる如く、翁が墳墓の玉垣は、あまたの古き卒塔婆もて圍らされ、それすら今は朽果て一圍ばかりの椆の木がおのづからなる屋根となりて、此の翁の

眠れる上に、雨露を凌げるのみなりき。（因みに久々智村にては、近頃近松會なるものの設立せられ、翁の墓も修繕されたりと。）

これを要するに、巢林子の事蹟については、後人の作爲せしもの頗る多く、中には奇怪なる說さへ交へられて、殆ど其の判斷に苦めども、以上の論證によりて、長州萩の人にして肥前唐津の近松寺に遊學せりといふ事實には何等據る所なく、唯京都の人といふ事を知るのみ。

狂言及び淨瑠璃作者

近松門左衛門が歌舞伎狂言の作に從事したるは何年頃なるか、京都萬太夫芝居へ『藤壺の怨靈』を脚色し、藤の花が大蛇となる趣向にて名を揚げしといふ事は、延寶五年にして實に彼れが二十五歲の時なり。されど此の事實は門左衛門が狂言作者として始めて世に認められたる時とすべく、彼れが此の時はじめて芝居に携はりしものとはいふべからず。十九歲の時、元隣の萬句中に名を列ねし杉森信盛は、其の後幾何もなく、近松門左衛門と名乘りて作者の群に入りしなるべし。

同六年には、坂田藤十郎の當り藝として有名なる『夕霧名殘の正月』あり、此の狂言は

傳本なく、其の實作者も何人なるかを知らざれど、種々の理由にて門左衛門の作なるべしと推定せらる。然れば門左衛門は『藤壺の怨靈』に名を揚げて引續き歌舞伎狂言を脚色し、年々其の作を上場せしものあるべけれども、今日世に傳ふるものは元祿以後のもの多く、延寶の頃のものは極めて稀なれば、之を詳にすること能はざるのみ。蓋し當時は狂言本に限らず淨瑠璃本にても、作者の名を記さゞる慣例なれば、たとへ門左衛門の作は傳はれるも、彼れの作と斷定する由なきなり。當時近松の先輩にして狂言作者の有名なる者は富永平兵衛なり。彼れは延寶八年の顏見世に、はじめて狂言作者の名を出して物議を惹起し、賈名の業なりとて非難を受けたるが、是によりて作者の名を出さゞる習慣は打破せられ、近松も亦先例に習ひて其の名を公表することゝなりしなるべし。されどまだ三十に足らぬ彼れが、作名を揭ぐるは、世人より生意氣と認めたること疑ひなし。貞享四年の評判記『野郎立役舞臺大鑑』といふに、大和屋甚兵衛坂田藤十郎等の評ありて、若衆方唐松歌仙に移り、ものは附を添えたるが、其の文句に、

京より大阪へ出して見たいものは、ゑんぐの談義と歌仙の振出し

大阪より京へ出して見たいものは、庚申の出見世と嵐の出見世

おかしいものは　南京あやつりと近松の作

とあり。更に同書は門左衛門を評して左の如くいへり。

或人曰くよい事がましう淨瑠璃本に作者と書くさへ褒められぬ事ぢやに此頃は狂言までに作者を書き剩へ芝居看板辻々の札にも作者近松と書記すはいかい自慢と見へたり此人歌書か物語を作らば外題を近松作者物語となん書たまふべきや、答て曰、御不審尤もに候へども兎角みすぎが大事にて候いにしへならば何とて淺々しく作者近松などゝ書たまふべきや時業に及びたるゆゑ芝居事で朽果べき覺悟のうへなり然らばととてものことに人に知られた事がよい筈ぢや夫ゆゑをし出して萬太夫座の道具直しにも出たまひ堺の夷子島で桑宅と組でつれ〳〵の講釋も致されけるなり双方和睦の評に曰く此人の作られける近代の淨瑠璃詞花言葉として内典外典軍書等に通達したる廣才のほど明らけし其德惜むべきは此人とほうびあまつて今茲に云々

これを見るに、近松門左衛門の名は淨瑠璃に先づ出で、次に狂言に出しものゝ如し。

一方には非難の聲高く、一方には其の作の既に他に勝れたる事を認むるものあり、て、毀譽褒貶の交々に至るは、やがて門左衛門の地位の漸くに高きを知るべし。

歌舞伎狂言の作は、前にいへるが如く、延寶五年を起點とすれど、淨瑠璃の方は知るべからず、然れども狂言の作とほゞ同年か、或はそれよりも以前なるべし。そは門左衛門の作と稱せらるゝ『徒然草』は延寶八年の版本ありて、これより以前既に作ある事は疑ひを容れざればなり。されど宇治嘉太夫の旗揚は延寶三年にして、加賀掾と受領したるが同五年なれば、近松が彼れと關係せしも此の時期なるべし。而して門左衛門加賀掾と結び付きし事については、前にも述べたるが『翁草』に左の一節あり。

近松が素性は、岡本以筑にて其頃名有る町醫の弟にて、若き時正親町家に仕へぬ、正親町一位殿は、名におふ狂歌の達人なるが(中略)彼卿若冠の頃戯に宇治加太夫が新淨瑠璃を作られしを、近松其使をして加太夫方へ常に往反して、其身も筆才有に任せて、此作の事を手傳ひ、次第に是に遊て、加太夫が高弟義太夫をそゝのかして、新に義太夫節といふ一流を語り出させ、己も竟に其作者とは成ぬ、

此の記事簡なれども、能く近松が作者道に入るの由來を說明せるものといふべく、門左衛門が辭世の「三槐九卿に仕へ」の詞にも應じたり。

竹本座との關係

斯の如く、近松門左衛門は、暫くの間は嘉太夫と萬太夫との爲に、淨瑠璃と狂言とを作りゐたりしうち、計らずも斯界の新勢力と結び付くの機會を得たり。新勢力とは誰ぞ、別人ならず元祖竹本義太夫なり。

是より先き道頓堀に櫓を揚げ、久しく名聲を博したるは井上播磨掾なりき。彼れは寛文の初年より貞享に至る、約二十年間京坂における、淨瑠璃節の覇權を握り、當時名ある太夫は概ね其の門下より出でぬ。宇治嘉太夫も其の一人なり。播磨の直參には清水理兵衛、井上市郎兵衛、竹澤權右衛門等ありしが、就中清水理兵衛最も名人として聞え、師匠の歿後今播磨と稱せられり。此の清水理兵衛の弟子に天王寺村の農五郎兵衛といふものあり。五郎兵衛は生得聲量に富み、甲乙地合自然に具はり、末頼しき若者なりしが、延寶の始道頓堀虎屋源太夫座に出しを初陣として諸所の芝居へ出勤し清水理太夫と名乘りぬ。彼れ一年京都に赴き、嘉太夫節を聞

きて感歎し、其の長を取り自流播磨風の短を補はんと欲し、遂に嘉太夫の弟子となりて修業をしたり。嘉太夫は又理太夫の非凡なる聲に驚き、拔擇してワキに抱へ、折ふし「西行物語」を語りければ、二段目藤澤入道夜盜の修羅を語せたるに、修羅は播磨節の得意とする所、忽ちにして若者の名は揚りぬ。

門左衛門と義太夫との交歡せしは恐らく此の時なるべく、門左衛門は斯の如き太夫を得てはじめて我作に生命を與ふべく、義太夫はまた門左衛門の如き作者を得て、我淨瑠璃の發展すべきを思ひ、互ひに將來を誓ひしなるべし。

宇治座にて「西行物語」を語りしは、延寶五年正月の出し物なり然れども義太夫が藤澤入道夜盜の修羅を語りしといふは二度目の時なるやもしれず。

是等の消息は一も傳はらざれども、此の後程なく清水理太夫を宇治座より誘出して、宮島興行に赴きたる竹屋庄兵衛といふ金主も或は同盟の一人なりしなるべし。やがて理太夫は宮島より歸り、大阪道頓堀に芝居を建て、竹本義太夫と改名したるは實に貞享二年二月なりき。

義太夫が最初の語り物は、近松の作ながら宇治の古淨るり「世繼曾我」にて、それより

二三回宇治井上の古物を語りしが、創業の際とて未だはか〳〵しからず、加賀掾は義太夫の獨立を企てたりと聞き、貞享二年九月一門を率ひて道頓堀に出場し、西鶴の『暦』を語りぬ。加賀掾が此の興行は、思ふに義太夫に對する示威運動なりしなるべし。蓋し加賀掾は、義太夫を弟子のつもりにて重く用ひたり、然るに義太夫は京都にて高評を博するや、宮島興行を名として我座を去り、殊に其の謀主たる竹屋庄兵衛は、宇治座の金主たりし關係等ありて、義太夫の擧は足下から鳥の起つ感なき能はず、されば此の行、敵の陣營を亂さんとの企なりしなるべし。されど火災の爲めに潰走して、却て竹本座の基礎を固む、義太夫はまことに幸運兒なりき。

此の一戰に老將加賀掾を追拂ひたる義太夫は破竹の勢を以て一座を組成しぬ。其の顏ぶれは義太夫のワキに竹本頼母、多川源太夫、人形に吉田三郎兵衛、辰松八郎兵衛、三味線に竹澤權右衛門等の名人揃ひなりき。即ち翌三年二月竹本座旗揚げの興行をなす、此の時の淨瑠璃は『出世景清』にて、これぞ門左衛門が竹本座における新作の嚆矢なりき。其の外題に出世の二字を冠したるは、門左衛門が義太夫の花々しき今回の首途を祝したるなり。同七年には『佐々木先陣』、九月には『多田滿仲

記』を作り、これを端緒として竹本座の淨瑠璃は、年々歳々門左衛門の新作を迎ふることゝなりぬ。是迄京都に花を咲せたる彼れの作は、此の時より道頓堀に移し植られて、義太夫節の大繁昌とはなれり。

紀海音との對立

『聲曲類纂』其の他の書に、元祿三年庚午正月近松は京都より浪花に下りし由を記せど、こは事實と認めがたし。蓋し元祿年中は坂田藤十郎の全盛期にして、近松は彼れが爲めに興行毎に狂言を脚色したる事實あり、未だ容易に京都を去るの遑なかりしが如し。然るに近松をして遂に大阪に轉住を餘儀なくせしは、道頓堀における淨瑠璃界の漸く多端に赴きたること其の主因なるべし。義太夫は貞享二年に竹本座を設立してより約十五年、内は播磨の殘黨を收め、自家の門弟を修養し、外は京都の加賀掾に當り一意門戸を張るに忙しき間は、内は却て泰平無事の觀ありしが、やがて義太夫節の全盛期となり、向ふ所前なく、門下の俊才綺羅星の如く、名人上手雲の如く集るに及んで、内寇は漸く萠しぬ。蓋し多くの秀才を悉く網羅せんには、竹本一座にては稍狹きの憾ありて、他派に投ずるもの、又は別に一座を設立せん

とする野心家をさへ出しにけり。是等鬱勃たる野心の一團は、豐竹若太夫によりて代表せられたり。

そも〳〵豐竹若太夫といふは、大阪南船場の產にして、後ち長堀橋筋周防町に住し、河内屋勘右衛門といべり。竹本義太夫の門人となりて始め竹本采女と稱し、元祿八年正月二日竹本座にて、『齋藤別當實盛』を語りしが、初陣なり。此の時若太夫は十八歲、彼れは多くの門人中、器量殊に勝れ、音聲の美なるを以て人心を收めたるが、また家富みて資力ありしかば、自立の志あり、即ち師匠筑後掾に請ひて其の許しを得、元祿十二年三月、道頓堀に芝居を興行して、豐竹若太夫と名乘り、宇治の古淨瑠璃『東山殿子日遊』を語りたり。これ豐竹座の反旗を飜したる時なりき。

義太夫の音聲は圓滿にして、いかなる聲も彼れの聲量に蓄へられざるはなく、其の門下に秀才を出すこと多かりし中最も其の聲の美しき點を代表したるは若太夫なりき。されば其の語り口いかにも花やかにして、年は廿二の若盛りなりしかば、滿都の人氣を一身に集め、さながら旭日昇天の勢ありき。されど師匠義太夫は、此の後元祿十四年受領して竹本筑後掾藤原博敎（ひろのり）と稱し、其の名披露の興行には、門左

衛門音曲の祖神なる『蟬丸』を新作して、竹本座の成功を祝し、義太夫の名聲赫々たる時なれば、此の時において豐竹座を經營する者は、對竹本策を以て第一義とせざるべからず。例へば、後に、竹本座にて『曾根崎心中』を出し大入りを取れば、豐竹座にては『泪の玉の井』を出して之に當り、西においておやま人形辰松八郎兵衛にて好評を博すれば、彼れを拔いて東に移す等經營慘憺たる跡、歷々として見るべし。殊に豐竹座が創業に際し最も困難を感じたるは、作者を得る一事なりき。恐らく近松門左衛門を我座に取らんとの策をも運らしたるべし。されど門左衛門の應せざりしのみならず、近松作の淨瑠璃は、豐竹座にて使用することをさへ禁じたれば、豐竹座が竹本の壓迫を蒙れること知るべし。依て東にては、紀海音に新作を請ひ、元祿十五年正月の興行には『傾城懷子』の新淨瑠璃を出して花々しく開場したり。海音は今日より作者として門左衛門の好敵手にはあらずといへど、當時にありては彼れは大阪に文名を走せたる狂歌師油煙齋貞柳の實弟にして、貞峨と稱して狂俳を善くし、曾て和州柿本寺に入つて僧となり、高節と號し、後ち還俗して醫を業とし、契冲阿闍梨の門人となりて國學を修めたる經歷あり。竹本座の近松門左衛門に對して

少しも遜色なき人なれば、豐竹座にては彼れを作者に推し立てたるは、出來得る限りの最善を盡したるものといはざるべからず。されば竹本座も、高枕安臥すべきにあらずと、其の翌年近松門左衛門を京都より招きて、大阪に永住せしめ、竹本座附の作者に抱へたるにて、近松の大阪に轉居したるは實に此の時なり。『牟藝古雅志』に載せたる『曾根崎心中』の辰松八郎兵衛の口上の詞に曰く、

此度仕りますそねざきしん中の義は京近松門左衛門あとの月ふつと御當地へくだりあはせましてかやうのとござりましたを承り云々

此の淨瑠璃は元祿十六年五月七日初日なれば、跡の月といへばその四月なり。「くだりあはせまして」の詞或は大阪へ遊びに來りしやうにも思はるれど、「京近松門左衛門」とある所を見れば是まで京都にありし事は疑ひなく、而して口上の詞は少しく明瞭を缺けど、是より心中世話物の流行を來し、近松が新作の上に著しき繁忙を來し、是より兩座の競爭は激甚となり、見連にも西最負東最負の二派に分れて互ひに鎬を削りぬ。されど此の競爭は義太夫節の發達、殊に新作淨瑠璃の上に著しき影響を與へたり。

作の上の變化

元祿十六年五月『曾根崎心中』を新作せしは、門左衛門が作の上の一大發展にして、一般新作淨瑠璃にも大變化を與へたり。蓋し是より先き阪田藤十郎の藝風は京阪を風靡し、歌舞伎狂言に濡事の流行すると同時に、一方には西鶴が浮世草紙歌祭文等大いに行はれ、其の影響は淨瑠璃の上に勃發したるなり。恰も琵琶法師の語りはじめし淨瑠璃十二段が、説經節を加味して佛菩薩の威德を稱へたる本地物を出し、舞曲謠曲等を鹽梅して、舞曲謠曲の改作多きが如く、是迄は今日謂ふ所の時代物の範圍を脱せざりしもの、此の時に當り社會の風潮に促されて、遂に淨瑠璃に心中物を產み、こゝに世話淨瑠璃流行の端を開きしなり。而して此の流行の先驅たりしもの、元祿十五年における『雁金文七』及び此の『曾根崎心中』なり。されど『雁金文七』は聞えず、ひとり『曾根崎心中』の評判高く、世話淨るりの流行を作りしは、近松の作を筑後掾が語り、お山人形辰松八郎兵衛がお初の人形を遣ひ、三拍子揃ひしが、人氣となりしなり。（詳しくは『曾根崎心中』の解題に述べたり）。

義太夫節は大繁昌はなしゝも、竹本座の經營はなか〳〵に困難なれば、借金等あま

た出で來しを『曾根崎心中』の大當りにて皆濟せりといふ。されど筑後掾自ら座元にては、情實繼綿到底收支相償ふこと能はざりしなるべし、翌寶永元年の秋筑後掾の病氣に罹りしを好機會として、其の座元を道頓堀竹田芝居の座主竹田出雲掾清定に讓り、自分は座頭として出勤するに止め、全く興行の煩累を避くることゝなれり。此の座元の交代は竹本座の舞臺面に改良を加へ、道具衣裳等凡て舊來の面目を一新したるが、其の時の淨瑠璃は『用明天皇職人鑑』にて「傾城鐘入の段」には、筑後掾出語り辰松八郎兵衛の出遣ひにて、舞臺には、大道具水機關（みづからくり）を使用しければ大當りを取りぬ。然るに筑後掾は、正德四年九月、六十四歳にて歿し、其の後二三の興行はありしも、兎角一座の人心定まらず、竹本座の繼續もいかゞあらんと危ぶまれしかば、座元出雲は安からぬ事に思ひ、門左衛門とも協議し、何か此の際新奇の趣向を立てゝ人心を收攬せんとの希望に、門左衛門肝膽を碎き、やがて『國姓爺合戰』を作り與へたり。今當時の役割を『諸事聞書往來』に記する所に據れば左の如し。

座本　竹田出雲掾

●國性爺合戰役割

作者　近松門左衛門

初段
序　竹本頼母
中　竹本浪花
切　竹本文太夫

二段目
貝盡し（ツレ）　竹本頼母　豐竹萬太夫
口　竹本頼母
切　竹本浪花

三段目
口　内匠理太夫
切　竹本政太夫

道行（ワキ）　竹本文太夫　竹本浪花

四段目
口　豐竹萬太夫

久仙山長寿　竹本頼母　ワキ　内匠理太夫

五段目　竹本政太夫

たやま人形　辰松八郎兵衛

立役人形　津山助十郎

同　金七

右の通りにて蓋を開けし所、日本支那を舞臺とし、大立物が彼れの父と我れの母との雜種兒にして、明の天子へ忠義の爲め韃靼の兵と奮闘するといふ破天荒の名趣向なれば、見るもの驚喜せざるはなく、前代未聞の大當り、三年越十七ヶ月打續け、翌年の五月人形、團扇の繪等國姓爺〳〵と國姓爺ならでは夜も明けぬ大繁昌大流行を來したり。

これ必竟門左衛門が名作の致すところなれども、なほ此の大作を、師匠の後を受けて、能く語り活し、竹本の名を揚げしは、義太夫門に名人のありしにて、即ち頼母、政太

夫等の功も沒すべからず、殊に政太夫の語り口は、男女老幼貴賤の人情性格を表すに妙を得、淨瑠璃節に劇的表情の新生面を開きし事も與つて力あり。蓋し政太夫は原來聲量の乏しき人にて、曾て師より芝居出場を許されざりし程なるが、其の後工夫鍛錬の功を積み、聲は生得にて如何ともすべからざるも、是迄何人も餘り意を用ひざりし詞の語りやうに發明する所あり、名聲大いに揚がりしかば、筑後掾も我を折り、晩年適當なる相續者なきを見て、政太夫を後繼に擬したるは其の進歩の著しきを證するものにて、師匠世を去りし後は、同門に推されて竹本二代の盟主と仰がれ、義太夫の名を襲ぎ、後受領して竹本播磨少掾藤原喜敎と稱す。竹本座における門左衛門の生涯は、前半は元祖義太夫、後半は此の政太夫を立物として新作したるなり。門左衛門の晩年の作に、人情義理の細微を寫せるもの多きは、必竟門左衛門の筆の老熟圓滿の境に達せるにもよるべけれど、一方には政太夫の曲節に斟酌したる所もあり。

近松の家族につきて

是より先き坂田藤十郎は寶永六年に歿し、宇治加賀掾も同八年に歿して、門左衛門

の故舊みな世を去りぬ。彼れひとり竹本座に在りて、二代の太夫を交へ、前後通じて百十數番の淨瑠璃を作りたれども、彼れも亦多くの跡を追ひて享保九年十一月廿二日を以て、遂に永眠せり。時に享年七十二歳。辭世の詞に曰く、

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九卿につかへ咫尺し奉りて寸爵なく市井に漂て商賈知らず隱に似て隱にあらず賢に似て賢ならずもの知りに似て何も知らず世のまかひもの唐の大和のをしへある道々伎能雜藝滑稽の類まで知らぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ一生を囀りちらし今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は一字半句もなき倒惑こゝろに心の耻をおほひて七十餘りの光陰おもへばおぼつかなき我世經畢。もし辭世はととふ人あらば

それぞ辭世去ほどに扨もその後に殘る櫻の花しにほはゝ

享保九年中冬上旬

入寂名阿耨院穆矣日一具足居士　　不俟終焉期豫自記春秋七十二歳

のこれとは思ふもおろかうつみ火のけぬまあたなるくち木かきして

「不俟終焉期豫自記」とあれば、病に罹り再び起つべからざるを知るや、此の文を草し

辭世に充てたるものなるべし。或は此の辭世は數年前に準備せられ、年齡などを其の期に及びて書入るやうにしたるものなるべし。そは正德二年版『傾城盃軍談』の序にも「散人不移子具足居士」とありて、此の外に具足居士の號を用ひたるものを多く見ざるより考ふるに、「阿耨院穆矣日一具足居士」の如きも、或は正德頃既に定めありしやも知るべからざればなり。

さて門左衛門の畧傳をかい摘んで叙すれば、本姓は杉森信盛、平安堂、巢林子、不移散人等の號あり。『寶藏』に名を列ねたる信親は父或は兄なるべく、信義、信秀は弟なるべく、喜里は妹なるべき歟。門左衛門に兄弟あること他の書にも見えたるが、兄に相國寺宗長老弟に岡本一抱子（或は兄とも云）妹に錦江といふ俳人ある事を記せど、岡本一抱子の外其の存在詳ならざれども、兎に角兄弟及び妹のありし事を證すべし。妻女の名詳ならず、久々智廣濟寺門左衛門の墓に、其の戒名と並びて「一珠院妙中日事信女」とあるはそれなるべし。夫婦の間に子はなかりしか、平瀨氏藏「葛の消息」中「女も多門何も無事」と認めあり、女といふは我女房をさせる事、近松作中に其の例あり、多門は恐らく子なるべし。萬象亭の『反故袋』といふ隨筆に左の一節あり。

（前に門左衛門の事をいひ）大兄は岡本一抱子なる事は諸書にあり、次の兄の都一中なる事は漏せり、西の座竹本座より一年の給金五十兩なり、益して百兩にせん事を云ければ、辭して曰く、我生涯は五十兩づゝにて足ぬ、死後に及びて其益金五十兩を悴悴は醫師にて馬鹿なり名不知へ合力して給はるべしと云ける故、約束の如く殁して後竹本座より悴へ一年五十兩づゝ送りしは父巢林子の餘澤なりと吉田鬼眼語りき、

十二月の手鞠歌といふ物あり、翁の戯作なる由是も同人の咄なり、

鬼眼は寶暦頃の人形遣にして、淨瑠璃作者をもかねたる人なれば、竹本座の事情は能く知りつらん、此の話も悉くは事實と信ずべからず、都一中が門左衛門の兄といふは、唯珍說といふのみ。馬鹿の悴が醫者になりしといふも聞えず、竹本座より門左衛門に一年の給金五十兩は事實なるべき歟。死後の事は覺來なし、されど是によりて門左衛門に男子ありし事は確實となれり、名は知れずとあるも多門なるを疑ひを容れず。

巢林子の遺物について

巢林子遺愛の硯を、近松半二傳へて珍重せしことは『卯花園漫錄』に見えたり。其の

硯の蓋に「事取凡近而義發勸懲」と記しありしといふ。此の外、今世に傳ふる巢林子の遺墨數多あり、然れども此の遺墨なるものは、彼れの逸話のそれの如く、中には信を措き難きもあり。或は甲の認めて眞蹟とするものも、乙の見て然らずといひ、乙の見て善しとするも丙は却て之を難ずる等、多少議論あるものは姑く措き、何人も異議を挾まざるものといへば、僅に左の四點あるのみ。依て此の遺墨全文を擧げて一二附言する所あるべし。

妹春海苦の消息（東京松山氏藏）

尙々海苦我等好物と申

當月十八日之御連筒相屆忝拜見仕候如仰先頃者思召寄珍敷預御芳尋始而得貴慮本懷此事御座候愈以御兩所樣御勇健御勤仕之旨珍重目出度奉存候野生等家內等相替義無御座候皆々堅固に罷有候間乍慮外御心安思召可被下候先以御約束之妹背海苦澤山に被懸御意被入御念候程之印見え候て色合各別之義匂など也

又和歌之浦之名物人のもてなし彼是秘藏仕候事

に御座候重而御出坂之節必御立寄所希御座候

も懸隔成事御座候一昨日相屆申候故いまだ風味不仕先傍友にも見せ候て見はやし申候定以無御失念被掛御心候段不淺辱奉存候

以上

山川をへだてゝかよふ御音信いもせの道のりをしれとて
と存候如被仰下今に國性爺繁昌仕候五月菖蒲之甲のぼり圍之繪野も山もこく
せんや〳〵にて御座候如何樣盆之比は新淨るり替可申候間其節被得御隙御見
物御上り奉待候其御地幸田傳次左衛門殿國性爺に御由緒有之由貴面之比御咄
にて御座候未得貴意候へ共若不苦候はゞ可然御意得被成可被下候猶期後蒙之
時候恐惶謹言

卯月晦日　　近松門左衛門　花押

此の消息宛名なければ何人に送りし書簡なるを詳にせず、但し今に「國性爺繁昌」の
詞ありて四月晦日附なれば、享保元年なるべし。如何となれば『國性爺合戰』は正德
五年十一月より三年越十七月といへば、打上げは享保二年三月なればなり。次は、

紀州行斷りの文（大坂二見氏藏）

御物遠け今日あたりは御尋可申かと奉存候折節貴札御無事珍重奉存候私義此
間餘寒にあてられせき出候て何方へも出不申候
一紀州へ御越御同道可被成之由御しらせ忝奉存候大望〳〵に候へ共淨るり替

り前にてよほど心いそがしく候故私ならぬ義不能其義候近比殘念に奉存候多
門も折能候者御同道いたさせ度候へ共是も當分用事共御座候其身も殘念がり
申候然共少々見合聞合後刻自是御返事可申上候　　恐惶謹言
委細御使に咄し置申候

正月廿八日　　近松門左衛門

いせ屋清三郎樣

何年か詳ならず、次は

葛粉の消息（大坂平瀨氏藏）

存之外永々之御逗留もし御病氣もやと盆前はよほど無心元御宿所へ尋候へば
一段御堅固少御用にて御逗留之由清三樣より被仰聞安堵仕候けしからぬ殘暑
ふらぬ事たまるものにてはなく候彌御無事御宿所何茂御替りなく珍重奉存候
（此所數字意義不明）
世上病人多く御座候處此中にのがれ候事佛神の擁護難有事に御座候拙老氣分
も何のかわる事もなく其中次第によはり申候西行法師がおなじくは花のもと
にて春死なんそのぎさらきの望月の比とかね〳〵詠をかれ候に不違二月十五

日に終焉之本懷遂られ候と申候我等も西行程はなく共同じくは來月十五日名月に終をとり申度とあまりくるしき時分は存候然る處に此四五日我等工夫又醫心有友と相談仕醫者をのけ我等手合之藥四五服人參少づゝ入給申めつきりと心能く土用八專暦いらず之老人今度の八專にのみあたらず今日は庚申當なればあゝすう申居申に見事此文も書申候

一先日は天狗石二御のぼせ被下先々見かけも珍しくさて燧之そばへ寄候へは早うたぬさきに火出たがり申候石燧揃名物秘藏此事に御座候

一近々やかましき用事共もはや致遠慮と存候へ共□□より便之勝手能可有かと存申進候便宜之勝手惡敷候はゞ大阪へ御歸り候ても不苦候我等病中の給物に葛餅其外葛は藥にて候當地天滿にて上々とて求候ても色黑味にかみ有惡敷候八百屋にて吉野とて申候は色は白く候へ共ねばり候て餅米のまじり有樣に候前方八百屋干物問屋いたし候仁の物がたりとかく山ざらしと申が上々にて候丹波四國方々より出候大分之事之中吉野第一能候由にて候去年か去々年か帶刀樣衆より少もらひ候各別に被存候是からが御無心之段清印公へ被仰遣上々

を吟味被成三升程御調へ被下候樣に奉願候五升もほしく候へ共定而高直に可有候葛粉より命がさきに皆に成候ては無益候三升御のぼせ被下候樣に奉願候此便其元より勝手能可有と存申進候勝手あしくは大阪御歸り候て成共御了簡次第其中はやくほしく御座候女も多門何も無事御言傳申入候由能々申樣にと申候清藏樣へも御參會之節宜御心得可被下候且那御機嫌能候哉又少大阪もすてぬ中によいかげんに御のぼり可被成候御なつかしく存候猶期後蒙之時候

七月十九日　　恐惶謹言

近松平安　花押

和田忍笑樣

參る

尙々ねていて書申無正體候葛之事奉願候

いつの間に天滿は秋の風吹て味のわるいぞうらみ葛の粉

大阪から直にたのむが吉野なりこゝにもあれどあしきよりくず

宛名は和田忍笑、老病の苦を述べて知己に吉野葛を請ふの文、七月十九日は巢林子

が歿する享保九年の事なるか、享保八年も『大塔宮曦鎧』の添削の一作なれば、此の年も既に病中にありしとすれば、八年の事かも知れず、冬に至りていくらか快氣に趣きたれば『關八州繋馬』を新作して、翌九年の正月に出し其の後作なし、兎に角此の和田忍笑といふ人は、近松の知己なり。但し何處の人なるかを詳にせず、近頃幸田成友氏が奈良市橋井善次郎氏藏の門左衛門が遺墨を見て、和田忍笑と伊勢屋清三郎とは同家なること、及び忍笑は同地方の町人なり、近松の遺墨として今世に傳ふるものは、皆此の人の手によりて保存せられしものなる事を語られたり。其の文は次の如し。

尼崎延引の文（奈良橋井民藏）

如仰昨夕は得貴意忝奉存候天氣相之事此方も御同然とくと見合道も少かたまり候はゞと奉存候扨又今日之尼崎私も幸くゝちと申尼崎近所へも參度候へ共替り淨るり之相談御座候故乍存心叶不申候まゝ御同道仕ましく候近比殘念殘念明日にも紀州へ極り候はゞ今日之尼崎御延引あれかしと奉存候猶期貴面候

恐惶謹言

二月朔日

今日之御祝儀目出度奉存候貴樣御家内よゝい(?)今日元日御祝可被成候

近松門左衛門

伊勢屋清三郎樣

右の消息文軸の表紙見返しに、左の書入あり。

近松が名のみ殘りたる手跡御所望に付進上仕候へ共下拙こそ念頃に語りければ甘心仕候へ他仁は苑も角もあれかし

いせや忍笑

との書添あり、文中くゝちとあるは、巢林子が墳墓のある久々智廣濟寺にて、同寺の住職とは親しく往來せしこと屢々なりきといふ。是によりて考ふるに、忍笑といふ人は、非常なる近松信仰にして近松の爲めには何物をも惜まず、萬事に助力を與へたる恩人なるが如し。「葛の消息」中に「清三樣より被仰聞」の語あるより考ふるに、忍笑は伊勢屋の隱居、當主は清三郎にて父子ともに大の近松崇拜家たることを知るべし。なほ「妹脊海苦」の消息も亦忍笑へ宛たるものなるべし。此の外、近松の著

作については、次に掲げたる年表に之を示し、又其の作の由來、興行についての逸事等はみな解題に讓る。（完）

近松門左衛門年表

●印、浮瑠璃本▲印、推定本（近松作と判然せざるもの）○印、狂舞伎狂言本
●著作表中竹本座以外の作は一々書入あり
これなきものは悉く竹本座正本なり

年次	社會及び文藝に關する事	演藝及び興行に關する事	近松著作表
承應二年（西暦一六五三年）癸巳	●後光明天皇御宇。 ●德川家綱治世。	●物眞似狂言盛許さる。 是より先き若衆歌舞伎禁止せられたるが今年物眞似狂言盛の名稱の下に許可せられたり。 ●此の前年杉山丹後京へ上り口宣を拜して天下一杉山丹後掾藤原清澄と稱す。	●近松門左衛門生る。 生國詳ならず或は長州萩といひ或は三河越前等の說あるも確說なし通稱杉森信盛、號平安堂、不移散人。
三年甲午		●虎屋源太夫の門人伊勢島宮内上京。	●二歳
明暦元年乙未	●後西院天皇。		●三歳

二年 丙申	●菅木鶴水生る。		
三年 丁酉	●江戸大火 正月十八日より十九日に亘り、燒死人十萬七千四十六人に及ぶ。これを明暦の大火といふ。 ●林道春卒す。	●此の頃柴垣といふ小唄はやる ●虎屋藤太夫受領して上總掾藤原正信と稱す。 ●此の頃岡島吉左衛門も近江大掾と受領す。	●五歳
萬治元年 戊戌	●明の忠臣國姓爺鄭成功我國へ援兵を請ふ。 鄭成功名は芝龍又森官といふ。此の年三十九歳。寛文二年卒す。 ●淺井了意の『東海道名所記』成る。寛文中板行。 ●增穗殘口生る。		●六歳
二年 己亥	●朱舜水明末の亂を避けて我國へ歸化す。		●七歳

三年 庚子	●大阪城雷火。	●元祖市川團十郎生る。	●八歳
寛文元年 辛丑	●內裏炎上。 ●伊丹鬼貫生る。 ●姬路にてお夏清十郎心中。	●京都女形玉川千之丞江戸に下り猿若座にて「高安通ひ」を演じて興行二年間續く。 ●虎屋源太夫上京。	●九歳
二年 壬寅		●竹田近江掾清直大阪道頓堀にからくり芝居を興行す。	●十歳
三年 癸卯	●靈元天皇。 ●紀海音生る。 ●薩摩源五兵衛おまん心中。	●江戸歌舞伎作者都傳內「今川忍び車」といふ狂言を作る。 ●薩摩の正本「和田酒盛」板行。	●十一歳
四年 甲辰	●『糸竹初心集』板行。		●十二歳

五年 乙巳	●今年勅して洛陽三十三所の觀音を定む。 ●大阪三十三所も此の頃の設定なるべし。 ●西澤一風生る。 正本屋九左衛門のこと。	●七月結城孫三郎葺屋町に人形芝居を許さる。	●十三歳
六年 丙午	●荻生徂徠生る。 ●八文字屋自笑生る。	●江戸肥前掾葺屋町に操芝居設立。	●十四歳
七年 丁未	●江島屋其磧生る。	●京都歌舞伎許さる。 萬治二年橋本金作一件にて停止されたる京都の歌舞伎芝居今年十三年目村山又兵衛の歎願により解禁三月朔日より再興の初日を出す。狂言は傾城事、暫く中絶せし事として見物群集せり。	●十五歳
八年 戊申			●十六歳
九年 己酉		●說經節天滿八太夫堺町に操芝居興行。	●十七歳

十年 庚戌		●井上市郎兵衛道頓堀にて操芝居興行。後井上播磨掾藤原要榮と稱す。	●十八歳
十一年 辛亥	●山岡元隣の『寶藏』板行。	●和泉太夫堺町に操芝居興行 ●說經節江戸孫三郎堺町に芝居興行。	●十九歳 「寶藏」追加の俳句中杉森一家の俳句を載す、名を列れしもの杉森信親、信盛、信義、信秀、喜里の五人なり。
十二年 壬子	●山岡元隣歿す。		●二十歳
延寶元年 癸丑	●京都大火。	●片岡仁左衛門生る。 ●芳澤あやめ生る。 ●水木辰之助生る。	●二十一歳
二年 甲寅	●狩野探幽歿す。		●二十二歳

年		
三年 乙卯	●西鶴沾信生る。	
四年 丙辰		
五年 丁巳 (西暦一六七七年)	●大阪高津新地九丁南瓦屋町人家建。	
六	●石清水放生會再興。 ●畠山箕山の『色道大鑑』成る。	
	●宇治嘉太夫京都に上り伊勢島宮内の名代にて操芝居を興行。此の時自作の「大磯虎遁世記」といふ淨るりを語る。	●二十三歳 此の頃正親町從一位に仕ふ。或は阿野家の雜掌なりしともいふ。
	●山本角太夫土佐掾と受領、角太夫節とて流行す。 ●宇治嘉太夫加賀掾と受領。 此の時「西行物語」を語る。 ワキ五郎兵衛「藤澤入道夜盜の修羅」評判高し、五郎兵衛は義太夫の名なり。此の頃より淨るりに新作多し	●二十四歳
	●二月三日より大阪荒木與次兵衛芝居にて坂田藤十郎「夕霧名殘の正月」を演ず。	●二十五歳 此の年都萬太夫座の爲に「藤壺の怨靈」といふ狂言を仕組み藤の花が大蛇となる趣向評判高し。 ●二十六歳 ▲夕霧名殘の正月

年		
七年 己未		
八年 庚申		
天和元年 辛酉	●綱吉將軍。	
年 戊午	●正月六日新町遊女扇屋夕霧歿す。	
	●嵐三右衛門京四條北側芝居にて「丹波與作」を演ず。	此の時藤十郎は藤屋伊左衛門に扮し、傾城買の狂言大當り、生涯同じ狂言を繰返すこと十八度に及ぶ。作者知れず但し近松門左衛門なるべし。
		●二十七歳
		●二十八歳 ●富永平兵衛顏見世番附にはじめて「狂言作り」と名を出す。平兵衛は此の頃流行の狂言作者なり。
		●二十九歳 ▲徒然草 宇治加賀掾正本

二年 壬戌	●諸職人淨瑠璃語り等天下一と號することを禁ず。 ●井原西鶴の『好色一代男』板行。 ●山崎闇齋、西山宗因歿す。 ●八百屋お七火刑。			●三十歳
三年 癸亥	●おさん茂兵衛處刑。			●三十一歳
貞享元年 甲子	●舊暦を止め新暦を頒つこれを貞享暦といふ。 ●金平本の盛時。 岡清兵衛、四宮彌四郎等其の作者なり。	●二月朔日竹本義太夫道頓堀に芝居を設く、竹本座是なり。道頓堀の西端にあるを以て世人大西と稱す。 ●井上播磨歿す。	●三十二歳 ○百夜小町 切狂言『夕霧七年忌』。	
二年 乙丑	●津打治兵衛生る。		●三十三歳 二月 ●世繼曾我 七月 ●いろは物語 ▲一心五戒魂 いづれも宇治の古淨瑠璃を今年義太夫語る。	

三年 丙寅	●西鶴の『好色五人女』板行。 西鶴の作大いに行はる。	●二月竹本座の旗揚に義太夫始めて近松の新作「出世景清」を語る。是より年々近松の新作出づ。 ●宇治加賀掾大阪に下り道頓堀にて義太夫と對抗す。 此の時加賀掾は四鶴の作(?)「暦」を語り、義太夫は「賢女手習新暦」を語り競爭甚だ激し。但し加賀掾芝居火災ありて京都に歸る。	●三十四歳 正月二日 ◉賴朝七騎落 井上播磨古淨るり。 二月四日 ◉出世景清 これ義太夫の爲に新作せる始めなり。 七月十五日 ◉佐々木先陣 佐々木大鑑と同じ。 九月十三日 ◉多田滿仲記 五月 ◉三世相 「遊君三世相」と同本、『外題鑑』に宇治淨瑠璃とあるも、貞享三年板に義太夫の正本あり。	
四	●東山天皇。 ●四月二日より南都大佛殿手傳始。 ●此の頃大坂堂島に在家建つ。	●三月より竹本座中國に赴く	●三十五歳 此の年板行の『野郎立役舞臺大鑑』といふ評判記に近松門左衛門が狂	

年			
丁卯	●『女用訓蒙圖彙』『男色大鑑』板行。 ●岡清兵衛歿。 ○竹田出雲生る。		言淨るりに名を著くことを非難す又同書に門左衛門が榮宅といふものと堺の夷子島に徒然草の講釋をなしたる事を記す。
元禄元年 戊辰	●二月朔日より四天王寺聖德太子御影開帳。	●夏竹本座江州大津より伊勢に赴く。 ●都萬太夫座にて「傾城玉手箱」坂田藤十郎岩井半四郎大當り。	●三十六歳 正月二日 ◎源氏冷泉節 ○今源氏六十帖 後に「四季御所樫」と改題、此の時水木辰之助始めて猫の所作を演ず
二年 己巳		●夏竹本座泉州堺より紀州へ行く、冬は京都北野にて興行。 ●道頓堀岩井半四郎座にて「藤原春姫」といふ狂言大當	●三十七歳 三月三日 ◎天智天皇
三年 庚午		●夏より秋へかけて竹本座和州へ行く。 ●初代嵐三右衛門歿す。	●三十八歳 ◎源氏十二段 ○水木辰之助餞振舞（たちぶるまひ） 此の時辰之助は有馬お藤、藤十郎は和歌浦光右衛門に扮す。

年			
四年 辛未	●湯島聖堂建つ。 ●熊澤蕃山卒す。 ●土佐光起卒す。	●坂田藤十郎大阪角芝居にて「堺大寺」大當り。	●三十九歳
五年 壬申		●秋冬竹本座西國中國へ赴く ●水木辰之助の槍踊所作はやる。	●四十歳 四月八日 ◎日本西王母
六年 癸酉	●大阪天神橋難波橋架替へ。 ●『雨夜三杯機嫌』板行。 ●淺井了意歿す。 ●井原西鶴歿す。	●秋より冬竹本座和州より濃尾へ行く。	●四十一歳 五月六日 ◎新本領曾我
七年 甲戌	●江戸大火。 ●松尾桃青浪花の客舍に歿す。	●岡本文彌歿。 山本土佐掾の門人にて一流を語り出し文彌節とて行はる。	●四十二歳 三月三日 ◎松風村雨束帯鑑
八年 乙亥	●元字金銀鑄造。 ●十一月綱吉殺生を禁じ養狗の制を立つ、世に犬公方と稱す。 ●三勝半七心中。	●竹本座堺奈良へ行く。 ●竹本座にて采女はじめて「齋藤別當」を語る、采女は豐竹若太夫なり。	●四十三歳 四月八日 ◎釋迦如來誕生會 ◎鎌田兵衛名所盃

九年 丙子		●岩井半四郎座にて「三勝心中」の狂言大當り、百五十日間興行。	●四十四歳	
十年 丁丑	●關東地震。	●中村七三郎京四條山下半左衞門座へ上る。	●四十五歳 七月十五日 ◉賴朝七騎落 十月十三日 ◉百日曾我 此の淨瑠璃宇治加賀掾にては「關原曾我」林和泉太夫にては「關東曾我」の外題にて大當り。	
十一年 戊寅		●秋竹本座伏見中書島より伊勢へ行く。 ●京布袋屋座にて中村七三郎の「傾城淺間嶽」の狂言大當り百二十日間興行。これが爲都萬太夫座不入り。 ●岩井半四郎歿す。	●四十六歳 二月十四日 ◉今樣小栗判官 加賀正本「當流小栗判官」と同じ。 ○傾城江戸櫻 都萬太夫座不入り。	
十	●八文字屋より『役者口三味線』『名古屋山三』等の評判	●布袋屋座にて中村七三郎の「名古屋山三」大當り。	●四十七歳 正月二日	

二年 己卯	記板行。	●都萬太夫座にて坂田藤十郎の「傾城佛の原」大當り、近松作なり。 ●三月豐竹若太夫獨立して宇治古淨るり「東山殿子日遊」を語る。 ●八月紀海音若太夫の爲に「傾城懷子」を新作す。 ●錦文流竹本座の爲に「東海道虎が石」を新作す。	◉源氏烏帽子折 山本土佐掾古淨るり ○傾城佛の原 ○同後日龍女淵 ○同三の後日	
十三年 庚辰	●西澤一風の『御前義經記』板行。 ●川村瑞見卒す 貞享年中より大坂安治川其の他諸川の治水に功あり。		●夏竹本座堺奈良秋京へ行く ●水木辰之助江戸に下り山村長太夫芝居にて七變化の所作をはじむ。	●四十八歳 正月六日 ◉浦島年代記 ◉長町女腹切 正德二年の作こゝに紛れ入る ◉淀鯉出世瀧德 これも更に後の作なり ○壬生大念佛 ○其後日○三の後日

十四年 辛巳	●淺野内匠頭殿中に於て吉良上野介を刃傷に及び切腹。 ●四珠庵契沖卒す。	●四十九歳 五月六日 ◉蟬丸 九月九日 ◉十二段長生島臺 ◉大掛物十幅一對 十一月朔日 ◉曾我五人兄弟
十五年 壬午	●菅公八百年祭。 ●十二月十四日淺野内匠頭遺臣大石良雄等四十七士吉良上野介を討ち讎を復す。 ●雖波五人男龜金文七、按の平兵衛、布袋の市左衛門、雷庄九郎、極印仙右衛門等處刑。	●五十歳 正月二日 ◉豐年富貴曾我 五月二十八日 ◉大磯虎稚物語 七月十五日 ◉加古敎心七墓巡 ◉新一心五戒魂
十六年 癸未	●大阪玉造伏見阪町四丁目を千日寺前へ引く。 ●二月四日大石良雄等四十七士切腹。 ●四月七日お初徳兵衛曾根崎の森にて心中。 ●『松の葉』、『絲竹大全』、『諸藝太平記』板行。	●五十一歳 ●四月近松門左衛門京都より大阪に移る。 三月四日 ◉最明寺殿百人上臈 五月七日 ◉曾根崎心中　○ これ世話淨るりの嚆矢なり
寶永元年 甲申	●寶字銀を鑄る。 ●柳澤吉保甲府城主となる。 ●『松の落葉』板行。 ●『心中大鑑』板行。 ●島山筑山歿す。	●竹本筑後掾病により座元を退く。 ●豐竹座にて「八百屋お七」を出す。 ●元祖市川團十郎横死。 ●此の頃一中節流行す、一中節は山本角太夫の門人都太夫一中の語り出しゝ淨るりなり。	●五十二歳 正月十五日 ◉源五兵衛（おまん）薩摩歌 四月十六日 ▲甲賀三郎 ◉（おふさ）徳兵衛心中重井筒

二年 乙丙

- 春伊勢太神宮抜け參り流行。
- 奈良大佛殿棟上。
- 淀屋辰五郎闕所。
- 伊藤仁齋、北村季吟卒す。

- 竹田出雲掾筑後掾に代りて竹本座の座元となる。
  出雲は道頓堀竹田芝居の座主なり此の時舞臺大道具人形衣裳等改良せらる。「用明天皇職人鑑」傾城鏡入の段出語り出遊び大評判。

- 五十三歳
  三月二日 ◉用明天皇職人鑑
  七月十四日 ◉雪女五枚羽子板
  八月十五日 ◉傾城反魂香

三年 丙戌

- 寶永錢を鑄る。
- 大阪眞田山稻荷繁昌。
- 錦文流著『熊谷女編笠』板行。
- 小唄『若みどり』板行。
- 野郎若衆女裝にて屋敷方へ出入すること を禁ず。
  この事は生島新五郎の弟大吉といふもの尾州侯の後室に愛せられ長持の中に入りて閨房へ出入せしこと露顯に及び大吉及抱主中村勘三郎等罪を得たるに因る。

- 豐竹座にて錦文流の「男色加茂侍」出づ。

- 五十四歳
  正月廿五日 ◉義經將棊經
  三月廿七日 ◉本領曾我
  ◉心中二枚繪双紙
  五月五日 ◉兼好法師物見車
  六月朔日 ◉棊盤太平記
  赤穗義士討入のことを仕組みたる淨るりの嚆矢なり。
  七月十五日 ◉曾我扇八景
  九月廿一日 ◉おさん茂兵衛大經師昔暦

四年 丁亥

- 十一月四日五畿内大地震。
- 十一月廿三日富士山噴火。
- 浮世草子大いに行はる。
- 榎本其角歿す。

- 五十五歳
  正月二十日 ◉吉野忠信
  二月十五日 ◉堀川波の鼓
  四月廿一日 ◉おかめ與兵衛卯月の紅葉
  六月朔日 ◉根元曾我
  ◉卯月の潤色
  六月二十四日 ◉丹波與作待夜の小室節
  九月九日 ◉酒呑童子枕言葉

五年 戊子

- 三月八日京都大火。
- 十二月廿九日三十日大阪大火船場上町の過半燒失。

- 竹本座奈良、伊勢及び中國へ行く。
- 中村七三郎歿す。

- 五十六歳
  ◉おむめ彖之助心中萬年草

六年己丑	●家宣將軍。	
七年庚寅	●中御門天皇。 ●五月金銀鑄造。 ●「御入部伽羅女」板行。 ●「増補松の落葉」板行。 ●十二月藝屋忠兵衛處刑。	

	●夏竹本座伊勢へ行く。 ●坂田藤十郎歿す。	
	●五十七歳 正月二日 ◎清十郎五十年忌歌念佛 九月九日 ◎紅葉狩劍本地 十月三日 ◎赤染衛門榮花物語 但し字治古淨るり豐竹座へ出づ。	
	●五十八歳 正月二日 ◎曾我虎が磨 同 二十三日 ◎治郎兵衛今宮心中 三月四日 ◎大原問答青葉笛 五月六日 ◎百合若大臣野守鏡 六月十六日 ◎心中刀は氷の朔日 七月二十八日 ◎夕霧阿波の鳴戸 ○御曹司初寅詣	

正德元年辛卯		
二年壬辰		
三年癸巳	●家繼將軍。	

	●豐竹座にて海音作の「椀久末の松山」「油屋お染袂白絞」を語る。 ●宇治加賀掾歿す。	
	●豐竹座にて海音作の「傾城國性爺」を出す。 但し此の作は近松の「國姓爺」の後に出たるものなるべし。	

	●五十九歳 正月九日 ◎新いろは物語 三月五日 ◎忠兵衛梅川冥途の飛脚 ◎吉野都女楠	
	●六十歳 五月五日 ◎弘徽殿鵜羽產家 七月十五日 ◎五百番の内嫗山姥 十一月二日 ◎傾城吉岡染	
	●六十一歳 二月廿五日 ◎天神記 七月六日 ◎孕常盤 十一月朔日 ◎新撰大職冠	

四年 甲午	五年 乙未	享保元年 丙申
●菱川師宣歿す。		●吉宗將軍。 ●緒方光淋歿す。
●江戸山村長太夫座生島新五郎江島一件に座せられて斷絶。 ◎竹本筑後掾歿す。		
●春竹本座伊勢へ行く。 ●十一月竹本座「國性爺合戰」三年越十七ヶ月古今の大當り。		●都萬太夫座にて「國性爺」の狂言大當り。 和藤内 神山小四郎 母 芳澤あやめ 甘輝 柴崎林左衛門 錦祥女 山本かもん
●六十二歳 四月八日 ◎相模入道千匹犬 八月朔日 ◎瀧口横笛 娥歌加留多 十月十五日 ◎嵯峨天皇甘露雨	●六十三歳 正月二日 ◎粲部（さんにん）胎内裾 八月朔日 ◎持統天皇歌軍法 ◎嘉平次（おさか）生玉心中 十一月朔日 ◎父は唐土 母は日本 國性爺合戰	●六十四歳 ●今年竹本座「國性爺」の打續きにて新作なし。「國性爺」歌舞伎にも大流行。

二年 丁酉	三年 戊戌
●江戸大火。 ●七月十七日高麗橋女敵討。	●一風著「亂脛三本槍」板行。
●今年大阪の三芝居いづれも「國性爺」の狂言にて和藤内には二世竹島幸左衛門、櫻山四郎三郎、姉川新四郎等なり。 ●江戸にても三芝居「國性爺」和藤内には二世團十郎、大谷廣次、松本幸四郎等なり	●豐竹座紀海音作「鎌倉三代記」。 ●竹本座「博多小女郎波枕」の時國太夫始めて出座、後宮右路豐後太夫。 ●十一月竹本座「善光寺御堂供養」近松添削なり。
●六十五歳 二月十五日 ◎穢は日本 產は唐土 國性爺後日合戰 八月廿二日 ◎槍權三重帷子 十一月十六日 ◎聖德太子繪傳記	●六十六歳 正月二日 ◎山崎與次兵衛 壽門松 二月廿二日 ◎日本振袖始 七月十五日 ◎曾我會稽山 十月十二日 ◎日蓮上人記 十月二十五日 ◎傾城酒呑童子 十一月二十日 ◎博多小女郎浪枕

四年 己亥	五年 庚子	六年 辛丑
●中村座にて團十郎「曾根崎心中」を演す。	●五月竹本座にて「國性爺」二度目興行。	●森田座にて團十郎「心中天網島」を演す。
●六十七歳 二月十五日 ◎本朝三國誌 八月十二日 ◎平家女護島（俊寛・牛若） 十一月六日 ◎島原蛙合戰	●六十八歳 三月三日 ◎河内通（井筒・樂平） 八月三日 ◎雙生隅田川 十一月四日 ◎日本武尊吾妻鑑 十二月六日 ◎心中天網島（小はる・治兵衛）	●六十九歳 二月十七日 ◎攝津國夫婦池 七月十五日 ◎女殺油地獄 八月三日 ◎信州川中島合戰

七年 壬寅	八年 癸卯	九年 甲辰（西暦一七二四年）
		●三月廿一日大阪大火、古來よりの版木此の時燒失するもの多し。 ●英一蝶歿す
●四月六日より豐竹座お千代半兵衛の淨るり、海音の作「心中二ツ腹帶」大當り。 ●九月竹本座「祇王祇女佛御前扇車」松田和吉（文耕堂）新作なり。	●竹本座「大塔宮曦鎧」竹田出雲松田和吉作にて近松添削 ●十一月豐竹座「日本五山建仁寺供養」西澤一風田中千柳作なり。 ●十一月竹本座「お吉空月櫻町名花昔」竹田出雲作なり。	●三月廿一日の大火に竹本豐竹兩座燒失す ●十一月竹本座「右大將鎌倉日記」竹田出雲作なり。
●七十歳 正月二日 ◎唐船噺今國性爺 四月廿六日 ◎心中宵庚申（お千代半兵衛の淨るり）	●七十一歳 ●今年添削の外新作なきは病氣の爲に執筆せざりしならん。	●七十二歳 正月十五日 ◎八州藤馬（將軍太郎頼門・出羽冠者頼平） ●十一月二十三日近松門左衛門歿す。

年月未詳の作

●備考　社會及び文藝に關する事項は近松の作に多少關聯するものゝみを擧げて其他に及ぼす演藝に關する事項亦然り。

▲天皷
　井上播磨掾正本
▲弘徽殿嫉妬打
▲葵の上
▲藍染川
　宇治加賀掾正本
◉凱陣八島
　竹本座正本
▲本朝用文章
○けいせい富士見里
○一心二河白道

近松作の取題材料および近松作が後におよぼせし影響

饗庭、篁村

種なくて物生せず、巢林子が戯曲を作る、文體を先輩古作の例にならひしのみならず、其材料は多く、舞の本、謡曲、狂言、御伽草紙、說經節、古淨瑠璃より採れり、取るといへども換骨奪胎、嚴は苦を生じ樹は花をつけ石間の清水は瀧と落ち、風景面目を新にして、原作の跡をだに留めがたきあり、また表面にはわざと原料の趣を見せて智愚いたく異なり情義はるかに高きあり、もとより才人の慧筆、萬有を驅使して到らざる所なく、俚謡巷說も皆藥籠中の物として、集めて大成したるなり、先づ舞の本より材を採りしを云へば、竹本義太夫の爲にはじめて作り與へたる「出世景清」は「景清」のあこやを貞烈の女として生命あるものとしたり、「鎌田兵衛名所盃」は舞の本「鎌田」によりて長田が鎌田正清に酒を强るに肴に知行所を與へんといふところを取りて

名所盃としたるなり、「百合若野守鏡」は「ゆりわか大臣」に「新撰大職冠」は「大職冠」に、此外、舞の本の「那須の與一」も「いるか」も近松作に用ひられたり、謠曲にいたりては最も數多し、竹本座の興行外題順にて云はゞ「藍染川」は能の「花筐」、「佐々木大鑑」（板本には佐々木先陣として近松署名あり）は「藤戸」と「蘆刈」二つを取り、「束帶鑑」は「松風」、「蟬丸」は「蟬丸」の外に「鍔輪」を併せ取り、「最明寺殿百人上臈」には雪の段を取り、「桃狩劔本地」は「紅葉狩」、「嫗山姥」は五百番の内の屑書あり、「殯靜胎内探」は「二人靜」、「平家女護島」は「俊寛」等かぞへ來たりて盡しがたし、狂言よりは「凱陣八島」に「花子」を取り、「凱陣八島」は能の「攝待」を取りしなり）御伽草紙よりは「酒呑童子枕言葉」に「酒顚童子」を取り、說經節よりは「中將姫」を取りたりといへども其版本をいまだ見ざれば斷じ難たけれど、世話物中に其節廻しと其文句を少しづゝ取入れしは多し、古淨瑠璃より取りたるはもとより多きも、こは巢林子が宇治加賀掾の爲に若き時作りしが竹本座に再用されたるも少からず、又外題替もあれば今一々は擧げ難きも、山本土佐掾方の「善光寺開帳」を「善光寺御堂供養」として近松門左衛門添作と記したる本あるより思へば、自作ならぬ古淨るりを增補添作して我物としたるも尙あるべし、右はいづれも時代物につきての

こと、世話物は其の當時の出來事を直ちに仕組しなれば前作古例に據るの用なし、近松作時代物中に其時世に關する歷史的出來事を題とせしは義士仇討を「恭盤太平記」「天草騷動」を「島原蛙合戰」にて是等は淨瑠璃操人形に仕組むともさせる禁忌はあらざるべきが、こゝにもつとも異とすべきは、謹厚にして物議を惹き起すことを避けたる巢林子にして、德川幕府につきこの事を書入たる事なり、事を古しへに取なしたれば申開きは立にもせよ、世間の人は是は其事件と皆頷きしに相違なし、また見物にそれと分からぬ樣にては危きことを犯して作り入るゝ必要あらじ、一は「平家女護島」中に常磐御前が朱雀の御殿にて往來の人を引入れ亂行のうへ、其人を殺して井に埋めるとて、あからさまに吉田御殿の亂行を作し、一は「相摸入道千匹犬」にて高時が犬を愛して人を損なふことは、犬公方の事にあたれり、脇屋義助を助くる犬を白石と名づけしは新井白石にかたどれり、其文句に「神のめぐみと白石は、跡につゞいて尾を振るふる、古き昔も新しき、今もためしは只一人云々、古き昔も新しき、に今を利かせまた新しきに新井もふくみたり、相摸入道と外題せしも武藏に響かせたるならんか、此他犬公方の事とする證まだあるなり、この二件は近松作中の異

例とすべし、偖近松以後、近松作の影響がいかばかり文學の上におよぼせしかといふに、文耕堂千前軒等が淨瑠璃の作を繼ぎし事はあまりに顯然たれば云はず、又都萬太夫座の爲に演劇脚本を書き與へて、演劇の上に功ありしも此には省きて、近松の作風が一般小說の上にいかに吹き廻りたるかを云へば、近松が作意作風を能く傳へたるは江島其磧なり、八文字屋物と稱して元祿享保正德の間に盛を極めしは、西鶴の浮世草紙の作に基し、其磧も其體裁は學びたるが作意作風は西鶴よりは巢林子に私淑したり、近松も當時の流行に押されて八文字屋本を書たれど、これは自家廣告の効ありしのみにて淨るりの作とはいたく劣れる爲か世に行はれず、終に浮世草紙の方面の筆を斷ちたり、自家廣告、など今めく詞は近松の人柄に傷つくる嫌あれど、二種世に殘る繪入讀本が、共に自作の風聽と書直しに止まれば詮方なし元祿十四年己巳年出版「傾城請狀」横本三冊は、たしかに署名の如く近松作にして、宇治加賀掾へ書與へし「團扇曾我」のうち「傾城請狀」の文作世にもてはやされ、竹本座にては「百日曾我」と稱されて百日打續き、江戸にては林和泉太夫これを「關東曾我」と外題替して謠ひはやらせたれば、京、大阪、江戸とまで行はるゝを悅び、傾城請狀の文句を

卷頭に出して京大坂江戸の三卷としたるものなり、今一種は正德版繪入五冊の大本「國性爺御前軍談」とて淨るりの「國性爺合戰」を讀本體に書直したるのみにて淨るり程の興味なし、其磧は近松を骨髓とし西鶴を皮肉として浮世草紙に成功せり、近松大阪に居て其作風を傳へし者、京に其磧、江戸に種彥ありしも奇なりといふべし、以て其影響の廣く且つ偉なりしを知るべきなり

古曲の新釋につき

不倒水谷君巢林子が文を集め、之に評論註釋を加へて世に示さんとするに臨み、予が一言を需む。おもふに巢林子に關する研究は君既に其の精を極め、諸家また其の幽を闡きて、予が容喙の地無きにちかゝらん。予乃ち試に古淨瑠璃の解し難き所以を說きて君が註釋の勞を多とするの意を表せんとす。それ古文の解し難き、必らずしも唯淨瑠璃のみならんや、史傳地誌より雜記瑣聞に至るまで、今の眼を以て古の文を讀む、知の之に及び、意の之を得るにあらざるよりは、殆ど皆解し易からざるのみ、然れども中に就て巢林子の淨瑠璃の如きは實に其の最も解し易からざるものなり。蓋し淨瑠璃の文たる、其の成るの初に於て、もと眼に訴ふるの字を以てせずして、耳に訴ふるの聲を以てして成る。作者の期する所、人をして讀ましめんとするにあらずして、人をして聽かしめんとするに在り。是を以て古雅の語辭も俗耳に近からざるはこれを避け、鄙俚の言詞も一時に流行せるは之を取る。故

に當時に在つては兒女皆耳聞して意會するといへども、後世に在つては耆宿猶盲摸して臆測するに至る。古雅の語辭は載籍の徵す可きあり、百世の後といへども之を知る可きも、鄙俚の言詞は雲去霧散して、杳として尋ぬ可からざる多きを以てなり。俚語の埋沒と、湮滅とこれを古淨瑠璃解し難き所以の一とす。淨瑠璃の文たる既に人の耳に訴ふるを主とす、其の耳に訴ふるに當つてや、聲はおのづからにして男女賓主を分つ可く、音はおのづからにして喜怒哀惡を表す可し、是を以て作者が辭を行るの法甚だ嚴正ならずして、時に或は格を破り矩を踰ゆるの過を犯すあるも、聽く者既に聲音の氣色によりて男女賓主を知り、喜怒哀惡を悟れるを以て、寧ろ其の簡捷喜ぶ可きを覺え、放縱咎む可きを覺えず、作者と聽者と習つて以て常となして異まざるに至る。然るに後人之を讀むに至つては、眼前唯文字有るのみ、耳邊更に聲音有る無し、乃ち作者が辭を行るの法に謹まずして、詞路正しからざる放縱鬆疎、不緊不密の文の弊、瞭然として現れ、時に明解を得せしめざるもの有り。巢林子の文是の如きもの少しと雖も、間、當時の通弊を受くるもの無しとせず。聲音の幇助に狃れて、文辭の法則を輕んじたるある、之を古淨瑠璃解し難き所以の二

とす。淨瑠璃たゞ之を人耳に訴ふるのみならず、木竹布帛を以て男女鬼畜の像を造り、之を絲引綫牽して動止笑哭の態をなさしめ、以て淨瑠璃の舖叙描寫する所以の情態に伴はしめて而して人目に訴へ視せしもの、即ち當時の戲なり。既に聲音の氣色あり、又傀儡の動作あり、淨瑠璃の文辭甚だ疎なるも、當情の情態おのづから明らかなるものあらんとす。是に於て作者の意おのづから慢り、心おのづから弛み、吾が文辭の及ばざるところあるも、他の耳目の既に知るあるを頼ひとし、日習月染、竟に筆墨太だ略し、針線密ならざるの詞章を做して自ら忌まざるに至る。後人卒然として文に臨めば、別に耳目の解通を助くる有る無し、則ち唯字に隨ひて意を汲み、句を逐ひて情を索むるに、其の勢や寒溪水少くして舟通せざるの狀無き能はず。巢林子の如きは高才快手、是の如きのこと少しと雖も、而も亦絶て無き能はず。五人兄弟の篇中、鹿の牝牡と其兒との事を描ける章の如き、事繁く、辭簡にして描寫明らかならず、人をして霧裏花を觀るの感あらしむ。傀儡の現在せるを頼ひとして文辭の周到を缺けるある、これを古淨瑠璃解し難き所以の三とす。淨瑠璃の作はもと兒女衆庶の爲にす、是を以て其の叙するところ、高古正雅以て足れりとする

能はず、多く時俗の風尚、閭里の習慣、猥瑣鄙雜の事を叙す。然るに風尚習慣猥瑣鄙雜の事、當時に在つては盲聾亦之を了知す、後世に至つては河移流變して學者も亦之を知るに苦む。乃ち其の最も平明淺易のところ、難澁艱奥にして解す可らざるのところとなるなり。風俗の變易して文獻の徵す可からざるに至る、これを古淨瑠璃解し易からざる所以の四とす。巢林子決して解す可からざるの文を作るの人にあらず、今にして其の文の解す可からざるあるは多く此に由るのみ。淨瑠璃の文、時に賦に似たるの體を爲すあり、所謂何々盡しといふもの是なり、又時に衆庶熟知するところの他の成文に本づきて、強ひて摸擬して趣を成し興を取るものあり、傾城十番斬の如き、虎の渤進帳の如きもの是なり、又時に古曲の一節に據り、之を換骨脱胎して以て竊に新意を誇らんとするあり、舞曲の幕の紋を看る條を變じて、衣の紋を數ふるの文を爲れるが如き者是なり。凡そ是の如きの文は、其の未だ文を成さゞるに當つて既に先づ作者が心規意矩の私有りて定まるを以て、辭を設け詞を敷くの間に於て、おのづから牽强附會の事無き能はず、乃ち竟に文の險側詭詖たゞ神會す可くして正解す可からざるを致す。これを古淨瑠璃解し易からざる

所以の五とす。文豪また人のみ、何ぞ能く過誤無きを得ん。然るに後世矮人觀場の痴をなす者、大抵名に怖れ、遠きを崇び、古名人の文、一字一點皆精金美玉の纖滓微瑕有る無きが如しとなす。是に於て其の誤を誤とせずして、强ひて之を通せんとし通せんとして能はざれば卷を措いて古文の解し難きを歎ず。そも〳〵亦慮を致すと蠡なりと云ふ可し。試に一二を擧げて巢林子の如き巨匠もまた時に過誤無き能はざるを示さんか。五人兄弟の中、祐成の語に、生國もりとの大明神在柄天神とあり、守殿明神は相模の鎌倉郡森戸村出崎にあり、在柄天神も亦相模の鎌倉より金澤に至る途上にあり、十郎の生國は伊豆なり、相模にあらず、これ作者たま〳〵誤るのみ。又同書第三章に、抑相州矢立の杉といつぱ八幡宮の神木、その昔平の權守、夷狄征伐の出陣に上差の鏑を奉つて合戰の勝負を試みしより以來、思ひ思ひの願によつて、とあるは、其の據る所の書を卒讀してたま〳〵主客を顚倒し誤り記せるにて、正しくは關東の武士等平の權守を征討の出陣にとある可きなり。平權守の事、正史の確徵あるにあらざるも作者の一時の誤、掩ふ可からざる有るなり。又虎が磨中、二女唱ふるところの隨求陀羅尼といふ者の如きは、隨求即得大自在陀羅

尼にもあらず、大隨求陀羅尼にもあらず、小隨求と稱するところの大心陀羅尼にもあらず、種子眞言集擧ぐる所の大隨求一切如來隨心眞言にもあらず、即ち普通に人の隨求陀羅尼と稱する者にあらずして、而して其咒は今の八句陀羅尼と稱する者と同じきに近し。これ蓋し必ずしも作者の誤謬にあらず、然れども今よりして之を見ればまた正しきにあらざるのみ。およそ是の如きの類、甚だ少からず、眼ある者もとより夙に之を知る、然も之を道ふは發冢鞭屍に近きを以て、忌諱して語らず、昧者は即ち敢て妄解を試み、解の終に得べからざるや妄歎を發す、憾む可き也。これを古淨瑠璃解し易からざる所以の六とす。古淨瑠璃の解し易からざる所以、此に止まらずと雖も、既に此の六者有る、解し易からざるも亦極まれりといふ可し。然るに不倒君、今人を以て古書を讀み、評論註釋、拮据數年委に巢林子の爲にし、世人の敢て爲さゞるところを爲して倦まず、終に集めて之を大成す、唯古人に忠なるのみならんや、惠を來者に貽る、抑亦大なりと云ふ可き也。

己酉初冬

露　伴　識

近松の藝術及人生

島村抱月

第一

曾て十年前に近松を讀んだ頃は、彼れの作に向かふと、一ページ翻すか翻さぬに、早く一種の歡びを感じて、讀み行くに從ひ、言ひ知れぬ心嬉しい氣持になるのが常であつた。あの心持は、今思ひ出しても、如何にも甘味の濃やかなものである。あれだけの歡びを我々に傳へ得る近松の力は偉大と言つてよい。

其の後、私みづからの身心にも、又世上の風尙にも幾多の曲折があつて、就中藝術の上では、最近兩三年に、殆ど二十年來初めて見るの轉廻が行はれた。其の今日に於いて、近松は果たして何ういふ關係を我々と保つであらうか。此の問題は私も豫てから興味を以て考へて居た。それで時々讀み古した武藏屋本の、彼れが世話淨瑠璃を取り出しては覗いて見ることもある。其の時は、昔なつかしかつた人に、久々で會見する時のやうな好奇心と恐怖とが伴ふ。そして讀み了つては、ほつとし

欠

MISSING

若し一たび人生を解放して、行く所に行かしめれば斯くの如き運命に陷らざるを得ないといふ、人生觀的意義を、情死その事の中に暗示する氣持が近松には無かつた。我々は此の暗示を却つて西鶴の作中に見出す。近松に取つては、情死といふ事柄は、實はたゞ是れによつて奇なる、艶なる、而して濃密なる情緒を剪裁するの便宜を得る者に過ぎなかつた。情死を語る詩も、其の全篇に漲る近松みづからの情調は、抑へ切れない生の歡舞の聲である。情死といふことが映射し來たる暗い人生觀の影を、彼れは正當に觀取しやうとしなかつた。人物は哀れである、事柄は哀れである。併しながら之れを語る近松の聲は華やかであつた。情死も近松の筆に入つては美しく明るくなつた。此の點から言へば、近松は現在に於ける生の歡びの謳歌者であつて、其の先に横はる暗い矛盾の人生までをば見なかつたと謂つてよい。見ても之れを光明化する人であつた。

第五

情死を美化し光明化する近松の氣持は、當時の彼れが周圍の生活と何ういふ關係になつて居たか。或は彼れは德川期の他の戯作者と同じく文藝を以て全く一の

遊戯に過ぎない狂言綺語と見て居たらうか。若しさうであつたなら、彼れの作中に眞面目な人生問題を求めるのは、求める方が間違つて居る。遊戯娯樂となれば誰れでも浮かれて嬉謔する。彼れの作が人生を浮華歡樂の調で描いたからと言つて、それが彼の眞實の人生觀とは何の交渉もない事になる。

思ふに此の點は二つながら近松に存して居る。彼れとても一面、藝術を以て慰みと心得た時代の埒を、全然破り出ることは出來なかつた。幇間が輕口を言ふのと似た心持で淨瑠璃にも浮華の調子を加へたに違ひない。併し同時に、彼れには、一歩を自覺した藝術觀に進めた所が見える。是れが彼をして他の舊代の諸作家から一頭地を拔んでしめた所以である。彼れは其の作を以て單に觀客の機嫌を取り結ぶもの以上、虛實皮膜の間を縫うて、義理人情の奥秘に分け入らうとした と言ふ。固より今日から見て極めて不徹底な自覺であることは爭はれないが、兎に角人生の或る物を或る方法で描かうといふ藝術觀上の自覺が一面に伴つて居たことは、其の言に徹して明白である。即ち彼れの作には、ふざけて居る一面と共に、眞面目な一面が存する。惡ふざけの一面は固より論外として顧みないでよい。か

の時代淨瑠璃の多くは即ちそれである。老熟した世話淨瑠璃に及んで、始めて眞面目な人生の一面が幷び見はれるに至つた。我々は此の眞面目な藝術として、方面から、彼れの作中に見はれた歡舞喜悅の調子を推究して見たい。

思ふに桎梏から切り放たれた若い人生が、生氣に滿ちて、躍つて居るやうな彼れの調子は、やがて元祿の社會そのものゝ調子であつたらう。德川期の歷史を讀むものは誰でも氣がつくであらうが、元和偃武の後、爭亂が跡を絶つに從ひ、今まで極端に殘害せられ荒廢せられて居た生といふものが、春に遭うた木の芽のやうに、抑へても抑へても抑へ切れない自然の力を以て萠え出て來た。それを尙昔の殘害荒廢の力の權化たる時の爲政者が、其の同じ力即ち武力を以て壓迫し、以て自家の勝利者たる地位を保たうとする。勝利者はすなはち爲政者であるから、それが國家といふ名を冒し、國家と一になつて、萠え來る多衆の生の力を平民といふ名の下に壓迫した。生に對する抑壓力と生みづからの發揚力とが、政府と人民とに別れて相爭つたのが此の期の歷史である。而して生の暢び行く形は、衣食住の富となり、逸樂となり、藝術となつて見はれると共に、之れを禁壓する力は尙武といひ、勤儉と

いふが如き道德兼法規の形式を取つて、苛細を極め、繁縟を極め、無道を極めた干渉を、平民の生活の上に加へた。けれ共自然に氣氣する生の力は到底壓迫し盡せるものでなく、第一期の、暴發時代となつたのが元祿前後である。百花の一時に亂れ咲いたやうな元祿文明は、生の力の勝利に外ならない。其の百花繚亂の間に歡喜の歌を囀つてゐる鳥のやうな當時の人々、殊に農工商の平民社會の情調は、即ち近松が知らず識らずの間に見はしてゐる歡びの情調であらう。解放せられた人生の歡びとは是れを謂つたのである。西洋に於いては、正に十五世紀前後よりの文藝復興(ルネサンス)期と趣を同じくする。其の意味から言へば、シェークスピアの十六世紀に於けるリネーサンスの人生と、固より似た點が多い。共に放たれたる生の歡びの藝術である。シェークスピアの『ロメオとジュリエット』と、近松の心中劇とは好箇の對偶である。

第六

元祿を以て西洋のリネーサンスに比較することから、更に重大な一つの論點に、

する。西洋の文藝復興は一面に於いて知識の解放であつた。其の生といふもの

には情意生活の自由と共に知識生活の自由をも含んで居た。つまり全生活の解放が十五六世紀のリネーサンスである。然るに日本の元祿文明には此の知識といふ一角が缺けて居た。元祿の人生は知識が無くて情意のみある活動と言つてよい。勿論社會の一部には同時に和漢學の復興もあつたに相違ないが、それはたま〳〵以て政府側の爪牙となり裝飾となるか、然らずんば人民生活に間接舊い桎梏を加へるに過ぎないで、此等平民の活きた生活を新たにする上には殆ど無作用であつた。西洋のリネーサンスに於てギリシアの學問精神が復興して來たのとは、逆さまの事情である。斯やうにして、元祿に解放せられた人生には、耽溺蕩逸の趣はあつて、根柢に深い知識の省察が伴はなかつた。淺はかな、知識程度の極めて低い、それで歡樂を追ふ情意の盛んな人生であつた。情意の生を追ふ行止まりには當然の結果として情死のやうなものが殘つも、横はつて居る。情死は實に當時の社會の深意義を標象したものである。然るに其の深い人生の矛盾を何等の省察もなく觀過して了ふ。是れが元祿の平民文明の特色であつた。省察しても、それは極めて因襲的な、輕々しいものであつた。要するに知識の解放の伴はない

解放（エマンシペーション）に歡舞して居たのである。

斯んな風にして醉生夢死する世の中は、少しく深く觀れば、其の底に色々の不安、疑ひ、心細さを藏して居るのに氣がつく筈である。此の深省の影の兎も角も捉らへて居るのは、西鶴の作である。近松は此處まで突つ込まなかつた。近松に博大富麗に趣はあつては、深刻の味が足りないのは此の故である。其深刻の味を却つて西鶴が傾して居る。

近松の作で見ても、當時の人生が如何にも心細く、脆がゆく、淺薄であつた事は、今日の傍觀者たる我々によく見える。知識を拔いて、情意のみの恣まゝなる生活が描かれて居る。而も作者の之れに對する深い人生觀的な省察が加はつて居ない。何も露骨にそれを結論する必要は無いが、其の味ひは必ず香ひとなつて出て來なくてはならぬ。私は前に『曾根崎心中』を以て近松の作中最も現實的なものゝ一つだと言つたが、部分部分に小細工の技巧は弄してあるに拘らず、九平次一味の人物が必ずしも結果の運命にまで引つばつて行かれないで、立ち消えて了つたり、天滿屋の亭主（ていし）が、久しい客の德兵衛が事とて、九平次の雜言に善惡を言はず、吸物でもと

紛らしたりする邊は、如何にも自然である。性格描寫などは言ふに足らぬが、德兵衛が身のつまりなども、素直に無理がなく運んで居る。部分部分の小細工や辭句の技巧を除けば、最も自然な作と言つてよい所以である。而して此の作での德兵衛と九平次との悶着など、善と言はず惡と言はず、今日から見れば、如何にも無知文盲な、淺はかな、脆がゆい事ばかりでないか。斯んな下らない葛藤で亡び行く人生なら、之れを救濟する道は幾らもある、馬鹿馬鹿しいといふ感を起こす。が是れが大部分當時の社會の實狀であつたらうと察する。無知暗愚の民衆が、其の淺はかな知慧の範圍で、放たれたる生の歡樂に醉うて居るに過ぎない。『堀川波の鼓』の前半、また自然な作意の一つであるが、茲に見はれたお種等の上にも同じ趣が見える。

第七

更に近松みづからの工風に立ち戻つて考へると、彼れは上のやうな元祿の人生に種々の理由から知識の一面を醇化して加へた趣がある。作全體の上には、生の無自覺的享樂の歡びが殆ど知らずの間に彼れの主觀の香ひとなつて出て居るが、其の事件を結構し工風する上には、必ずしも生の盲目的歡喜のみでなく、是れ

に知識の一面を配して、葛藤を複雑にした。併し其の配加せられた知識の一面といふものが、惜むらくは深さを缺いで、たゞ在來の表面的、强壓的な義理といひ、分別といひ、來世といふもの以外に出で得なかつた。此の點に於いて彼れは依然たる傳襲の人であつて、革命の兒では無かつた。たゞ從來世俗が無自覺的に盲從して來た道德、知識の聲を、一層顯著に掲げ出したといふに止まる。此の方面に於ける解放が彼れには無かつた。一層多く理想的、空想的な作意のもの、例へば『昔暦』であるとか『波の鼓』の後半であるとかいふものになれば、生の歡びといふもの以外、作者が主觀の香ひと感せられるものが出は出ても、それはたゞ此の解放以前の知識、道德の影に外ならない。

我々は近松のリネーサンスに『オセロ』の深さをすら求め得ない。まして『ハムレット』の深さをやである。畢竟彼れは『無智の時代』といふ檻を破り得なかつた。斯やうにして、近松は元祿の放たれたる生の歡びを音樂で我々に傳へて呉れる。此の點に於いては彼れも亦近代の一樂手である。けれ共其の生には知識の解放が伴はなかつた。從つて歡舞の底に潜む深刻凄慘な意義に徹到する味が足りな

い。是れがやがて近代藝術の重要な一面を逸する所以であつて、近松の爲に遺憾とする點である。（明治四十三年一月十二日稿）

近松とシェークスピヤ

予曾て近松とシェークスピヤとを其位置、時代、境遇、閲歴等の上より比べて十餘條の相似點を得たり。曰く其時代の共に文藝の復興期たりし點相似たり、曰く傳記の不分明なる點相似たり、曰く其世に出でしまでの閲歴相似たり、曰く演劇未成熟時代に出でゝ大成者たる點相似たり、曰く當時行はれつゝありし諸先驅の長所一切を攝取せし點相似たり、曰く翻案又は改作、添作若しくは合作を嫌はざりし點相似たり、曰く劇の原始時代に出でゝ、爲に益し、爲に損したる點相似たり、曰く諸座に關係して諸種の脚本に變化自在の技を揮ひし點相似たり、曰く好協力者を得たりし點相似たり、曰く競爭者の侮るべからざる者ありし點相似たり、曰く當代既に其作を刊行せしのみか種々に版を重ねたりし點相似たり、曰く當代にも無双の作家として歡迎せられ、後世に至りては更に一段の推重を受けたる點相似たり、曰く時勢の推移と共に輓近反動の起らんとしつゝある點も相似たり、曰く虚と實と相半す

るの境に立脚して不易の實世相を髣髴せしむると同時に、理窟若しくは教訓を與ふるといふよりも寧ろ一種の慰藉を供することを以て其藝術の目的となせるらしき點も相似たり、曰く詩人には稀有なる豐富の常識を具へて穩和健全の人生觀、倫理觀に安住せし點も相似たり、曰く其修辭術の縱横無碍にして悲哀と滑稽と兼ね到り、詞藻の富贍なる點も相似たりと。

されどかくの如きは或は偶然の類似たるに外ならざるべし。今改めて之を作者たるの稟賦と才能とに就いて見るに、二家の間には一段と意味深き相似點のあるものゝ如し。

古今内外を問はず、作家の賦性には本來二大區別あるかと思ふ。先づ作するに當りて想と筆と同時に働く作家あり。脚色も人物も對話も詞藻も湧くが如くにして咄嗟の間に成る。自らも其如何にして然るかを知らざるものゝ如し。時としては筆のかた想よりも先に働きしにやと疑はるゝ場合無きにあらず。之を半無意識にして作すと謂ふ。譬へて言へば、作の骨と肉と皮膚と服飾とが一時に立地

に製らるゝなり。シェークスピヤの如きは其最も大いなる代表なり。然るに之とは幾ど反對に、作の骨組の十分に整ひたる後までも肉は尙備はらず、皮膚のいまだ布き及ばざる部分あり、服飾は勿論なり。すなはち其想の悉く具體化せらるゝまでには一年、時としては二三年を要することも稀ならず。十九世紀以來の名家に多し。徹頭徹尾自ら意識したる著作振なり。イブセンの如きを其著しき適例とす。

半無意識の作家は必ずの如くに健筆なり、一氣呵成なり。千篇立地に成るの概あり。隨つて出來不出來あり、杜撰、蕪雜、支離、無稽の失あり、剛筆、改作に過ぎざる作あり、時としては更に一段名譽ならざる評判を蒙る場合も尠しとせず。脚色にも前後辻褄の合はぬことあり、不自然を極めたる性格あり、不條理千萬の事件あり、かたはら痛き惡文あり、鄙陋至極の文句あり、駄洒落あり、無くて聊かも差支へぬ筋や人物や詞句が幾らもあり。其傑作にさへもムダやツツやアテやキズの無きことは無し。脚本は一小宇宙にして有機體に比すべきものなどゝ評することもあれど、此種の作家のは必しも然らず。其最大代表者たるシェークスピヤのすらが大分のムダ、附にて、現に一幕幾場かを切取つてしまひても作の生命が絶ゆるでもなし。「ハムレット」や「オセロ」さへもさうなり。ほしいまゝに枝を繁らせたる老銀杏樹の如く、然らざれば來る者は拒まず去る者は追はざる孟嘗君式の家庭組織などに比すべし。

之に對して全意識に成れる近代の名作は截然たる別天地なり。例へばイブセンの作などには幾ど秋毫もムダといふものなし。目立ぬやうに手を入れたる數寄屋好みの樹木などに比すべし。ふと見れば自然のまゝの如くなれど、よく〳〵見れば、一齣各段は言ふに及ばず、一句一字の末までも作家の周細明確なる自意識の奥書を經たるものにあらざるはなし。手拔け、不用意、脚違へ、見落しなどいふ意味の瑕疵は絶えてあらずといふも可なり。隅から隅までキチリシャンと行屆きて、些のスキなく些のタルミなく些のアソビなきを此類の作の特質とす。

ゆとりに富める前類の作と引締りたる後類の作と其佳なるものに至りては必しも優劣なし。只前者の傑出せるものを讀むときは、其形式や內容に不自然の箇所夥しきに係らず、案外にも心を山野河海の間に遊ばせつゝあるが如くに感じ、後者、

の秀でたるを讀みては、其語も其事も其人物も如何にも實際あるらしく感じながら、不思議にも狹き一室に靜坐せしめられて人生の疑問を沈思せしめらるゝが如くに感ず。後者は人生を觀照して自我を深うするに宜しく、前者は忘我し遊神して天地と同化するに宜し。

此作癖の相違は主として作家が稟賦の然らしむる所たるに外ならずと雖も、年毎に自意識の强烈ならんとする現代に於ては、前者に屬せしむべき大いなる作家を看出だすことは、次第に稀有になりゆくべし。シェークスピヤに比すべき近松は此點より觀て趣味深き研究の對象なり。

次に作家の文致の上にも、是れもまた稟賦の然らしむる所かと思はるゝ根本的の二大別の存するを看るなり。自然にして節奏に巧みなる作家と然らざるのとなり。修辭術は群を拔きながらも、詞調の何となく粗澁にして、佶倔贅牙に失し、そこに一種の面白みの有るにも拘らず、朗潤諧暢の趣致に乏しく、隨つて一字一句を嚙みしめさする特質はあるも、陶然として人を醉はしむる魔力を缺く文あり。智に

愬ふるを主とする作はかくの如くにして非なると更に無し、但しそれと他の音樂的なるものとは全く質を異にせる文才の所產たるとは爭ふべからず。而して此音樂的文才は、何れかと言へば、之を彼の半無意識的の作家中にも此特長を備へたる者は勿論あり。近くは獨のワグチルの專門家的なるは言ふまでも無く、現存の小說家中にも現にダヌンチオの如き有名なるがあり、其他象徵派など名宜れる詩人中にも多く其例を看出だすことを得べし。されど予が知れる限りにていへば、專門詩人音樂家乃至自意識の强烈なる作家の筆に現はるゝ音樂は餘りに規律が有り過ぎて、キチリシャンと整ひ過ぎ片附過ぎたる所何となく窮屈にて、他の半無意識の作家等が無規律に自然に興に乘じて奏で出づる、韵語ならざる韵語、音樂ならざる音樂の趣味には似ず。此自然の音樂趣味は、到底彼の七五、八六と初めより字數を限り、或は種々に字配りを工夫し、行每に餘白を剩し、句讀法其他の助けによりて、言はゞ機械的に一種の節奏を釀し出ださんとする或詞章家等の能はざる所なるが如し。シェークスピヤ又は近松の之をなすは、春林に春鳥の囀るが如し。此點もまた二家の相似たる所なり。蓋しこゝに謂ふ音樂的とは單に朗潤諧暢にし

て流麗なるをのみ指すにあらず、緩急疾徐剛柔清濁のあらゆる變化を曲盡して不即不離に臨機應變に不羈自在の節調を奏で出づるを謂ふ。是れ一はシェークスピヤが韵語の詩人たり、近松が準樂劇の作者たるに原因するものたるや勿論なり、と雖も、一はまた其作家としての先天性にも基けるものたることは他の同境遇の作家等と比し來るに及んで明かなり。

然れどもシェークスピヤと近松との相似の點は畧以上の比較にて盡きたり、一段深く其作の內容に立入るに及びては近松は到底シェークスピヤの對敵にはあらず。彼れは湖海の如くにして此れは河沼の如し。廣さも深さも異なり、只其山にあらずして水なる所靜的にあらずして動的なる所相似たるのみ。しかるも尙猶に近松が比較的最も自然に近く綴り得たる世話物の傑作を取りて之をシェークスピヤが傑作と稱せらるゝものと比べ觀れば、そこに少くとも下の如き類似點の存するを認むべし。

シェークスピヤの作は表は空想仕立にして裏に實相あり、先づ形式の上より見れば、材を時としてはお伽話に取り、小說に取り、野史に取り、荒唐無稽を嫌はずして筋を立て、大體は頗る調子高き韵文にて綴り、時に內容に伴はせて巧に散文を交へ用ひ、變化自在、不即不離の妙をほしいまゝにす。すなはち其形式は概して非寫實的なり、故に脚色や事件や用語や各性癖やの末に就て不自然を求むれば限りなし、而も其內容は必しも然らず。彼れは概して事件によつて性格を活動させ、性格の活動によつて更に事件を發展せしめ、若しくは然あるが如く巧に綴り、其間に性格と性格とが磨れ縺れて、或は意志の衝突となり、或は智慮の杆格となり、協力となり、感情の破裂となり融會となる因緣と有樣とを不言不說裏に髣髴せしむ。是れ彼れ自らの謂へる造化に對して明鏡を捧ぐるの意なるべし。然り、あくまでも鏡裏の影なり、故に模糊たり、朦朧たり、而して捧ぐるに手心あり、鏡にも多少の仕掛無きにあらず。時に甚しく誇張し理想化して寫すこともあり、但し善惡の一方に偏して純然たる空想に仕立上ぐることは稀なり。例へば英雄を寫し賢女を描くにも每に其凡人側を併せ寫すことを忘れず。大惡漢にも幾らかの甘き凡人趣味あり、偉人

にも俗の同感し得べき若干の弱點あり。かくして近づき得べく親しみ得べきが如く寫されたる所實に此作家の特質たり。アイデヤル五分リヤル五分の調理鹽梅なり。加ふるに人物の種類夥しく、愛すべき人物も憎むべき人物も景仰すべきも賤蔑すべきも怖れ戰かるゝほどのもありて、其來往浮沈のおのづからなる、さながらの實世相に對するが如し。故に讀了りて著しく腦裡に殘るものは個々の性格と事件と局面となり。時に疑問の浮ばざるにあらず、特殊の概念を得ざるにあらず、人生觀、倫理觀の上に多少の暗示、刺戟、警告等を齎さゞるにあらず、只其疑問、其概念、其刺戟等は人々の得る所めい〳〵思ひ〳〵にして解釋評論の同一なる能はざる點近代文藝のそれとは異なり。是れシェークスピヤの作を評して客觀的と謂ふ所以なり。

近松もまた、其世話物の傑作に就きて見れば、表は同じく空想仕立にして裏に實相あり。されどシェークスピヤとは若干の逕庭あり。先づ形式の上より言へば、本來が淨瑠璃の臺帳にとて綴られたるなれば、文といふよりも曲章といふべく、シェーク

スピヤのよりも一段と調子づきたるなれば、其體式の點より言へば、彼れに比せんよりもワグネルの臺帳などに比すべきものならん。それにも拘らず巧に寫實式の散文を其對話（ダイヤログ）中に加味してアイデヤルとリヤルと、ドラマとリヤクとの皮膜の間を縫ひて不即不離の妙を現す。此味ひ頗るシェークスピヤに似たり。其內容に至りても事件によつて性格を動かし性格によつて事件を發展せしむる點は、やはりシェークスピヤに似たり。但し其性格は概して類性と名づくべき範圍に止まり、其關係も境遇も大抵同樣にて、義務の念と本能的衝動との軋轢及び其結果を寫すことを眼目とし、且つ暗に「此男女の行動は無分別には相違なけれど、かくの如き行爲りにて、實に如何ともすべからざりしなり、哀れ千萬の次第なり」と、よしや辯護すとはいはぬまでも餘義なさを仄示（ほのめ）かしつゝあるものゝ如し。故に讀了りて勢ひ作者と同感せざるを得ず。少くとも此點だけに關しては他の解釋を容れにくし。シェークスピヤの作には「是非に及ばざりしか」「是非に及びしか」「其人の罪か」「境遇の罪か」「偶然か」「人爲か」分別しがたきもの少からず。近松のはそれとは趣異なれり。概して一解を容るゝのみ、主として哀れを止むるのみ。人物の種類もまた多からず。

憐むべく愛すべきはあり、敬すべく仰ぐべきはなし。又憎むべきもあり、怖しと思ふ程の惡人はなし。且つおしなべて奥行淺し。

之を要するにシェークスピヤの描ける人物は、打見たる所は生ける人間に相違なく、手にて捕へらるゝげにも見ゆれど、近づきて見れば態度風采何れかに何處やら純自然的ならざる箇所も見え、粗なる所も見え、はじめ奥行ありげに見えたる部分も漸くにしておぼろげになりゆく。

近松の寫せるは、最初より偶人らしくはあれど、ふつくらと潤ひありて時々は生きてあるかと疑はるゝ程に目、鼻、口元はつきりと麗しく、衣服の色彩なども目さむるばかり鮮かなれど、それは要するに貌の輪廓乃至道具立の上の事にて、四肢五體の末にわたりて仔細に釣合を點檢するに及べば、種々の缺所を生じ、偶人なりけりといふ最初の感に戻る。

シェークスピヤに伊のルネサンスのミケランジエロとラファエルとを一つにしたる趣ありといふべくば、近松には又兵衛と師宣とをまろめたる味ひありと評すべし。

二家の壽命はミケランジェロとラファエル、又兵衛と師宣とが世に棄てられぬ限りは盡くる期なかるべきを信ず。

四十二年十二月

逍遙

傾城佛の原

解題

『傾城佛の原』は、元祿十二年の春、都万太夫座にて演したる狂言にして、近松門左衛門作の狂言中、最も有名なるものゝ一なり。當時門左衛門は、名優坂田藤十郎の爲に作せしもの多く、藤十郎の當り狂言は又門左衛門の當り作と稱せられたり。例へば、藤十郎の出世狂言として、生涯に十八回演じ、これが爲に彼れは給金八百兩の俳優となり、京坂に比肩するものなく、傾城買の開山と稱せられたる『夕霧名殘の正月』の如き、此の『佛の原』の如き、『壬生大念佛』の如き、實に藤十郎の當り狂言なりしと同時に、門左衛門の當り作なりき。其の中にも『佛の原』殊に有名なり。そは江戸にて和事の名人中村七三郎、元祿十年の冬京に上り、布袋屋座に乘込み、藤十郎に對立せし時、洛中の人氣は平調を失してさながら鼎の沸くが如し。七三郎も初めて上京、素より顔馴染みもなきとなれば、最初の一興行は思はしからざりしも、京の

見物の呼吸を呑込みたる二回目には、思ふ壺洛中の人氣に投じたり。即ち同十一年の春、彼れは『傾城淺間獄』を出して、百二十日間の大入を續け、道の藤十郎をして顏色なからしめ、翌十二年には『名古屋山三』を出し、江戸狂言を京趣味に演じて大喝采を博したり。されば藤十郎は散々の敗北、元祿十年の『七堂伽藍』翌十一年の『傾城江戸櫻』は、いづれも不入にして氣焰揚らず、徒らに藤十郎をして七三郎の名優たるとを歎賞せしめたるが、しかし藤十郎もたゝものならず、金子吉左衛門及び近松門左衛門と謀り、新狂言を仕組みて出したるが『佛の原』にて、此の狂言出るや忽ち人氣を回復し、二年續きの失敗を一時に購ひ得て、こゝに會稽の耻を雪ぎ、多くの收入を得て、藤十郎は懷中溫かになり、ふろ屋町に間口九間半、裏行三十間の邸宅を購ひ、一方には井筒屋宗音といふ金主をして、『佛の原』の大入に祚され、万太夫座の太夫元たらしめたりといふ。（『役者色三味線』）

さて狂言の筋は、梅永文藏といふ若殿ありて、傾城にうつゝを抜かし、家の大事も顧みず遊興に耽る隙に乘じ、弟の帶刀野心を起し、乾介太夫といふ浪人を語らひ、兄文藏を亡きものにして、梅永の家を横領せんとし、一方には文藏が許嫁の竹姫が節操

を守り、又傾城奥州、今川が互ひに意氣地を研ぎ義理を立る等の事を搦ませ、家老望月八郎左衛門等の忠義によりて、遂に惡人亡び善人榮え、目出度く幕に局を結ぶ、即ち所謂お家騒動なり。但し後々の脚本とは、遠ひ、頗る單純なる點より見れば、是等の狂言本は、恐らく筋書なるべし。

さて『佛の原』の外題については、其の頃（元祿十二年の春なるべし）東山に、越前國月窓寺沓はきの彌陀の開帳ありて、老若男女の參詣群集し、洛中洛外の噂高かりしを利用せしものゝ如く、大切に開帳場の一幕を附し、竹姫奥州、今川に扮したる女形三人が、佛事供養の踊を演ずる趣向は、此の開帳場を當込みたるものなるべし。或は此の外題は、謠曲『佛の原』より採りたるかの如く思はしむれど、謠曲の『佛の原』は、佛御前の事を仕組み此の狂言にも多少祇王祇女の事に及べど、全體において殆ど關係なし、蓋し月窓寺の寺號が佛原山にて、其の開帳を當込みたる外題なるべし。

●奥州嫉妬の歌　本文第一の後段さる大名の下屋敷にて竹姫の魂ぬけ出て奥州の歪に入り、文蔵に對して竹姫の怨ないふ、奥州狂亂の所作あり。其の唱歌なるべし。元祿十七年版「松の落葉」卷二に、「傾城佛の原」と題して出したるは、此の歌なり。

●いつのまにかは秋の風　立秋の頃は未だ夏かと思へるに、いつのまにか凄しき風の吹き來りて、秋の至るに驚かざる。「古今集」「秋きぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞおどろかれぬる」。又「昨日こそ早苗とりしかいつのまに、稻葉そよめく秋風の吹く」などより取れる調なるべし。されば男の心の移り易き、さながら此の秋風の如しとなり。

●涙の三國　三國は越前國安居川口にある港なり。今は坂井港に其の繁榮を奪はれ、三國の蒼色は僅に其の傍らに存在を認むるのみ。昔しは三國松下とて北國風指の遊女町にて、西鶴八文字屋等の浮世草子に、しば〳〵紹介せられ有名なる所なりき。涙のは、前に越路の山こえての文句あればこれに對し、三國は船着なれば新くいひしなり。

●わけある里　わけはわけしりなどのわけに同じ。「色道大鑑」「わけしり、粋といふまでの調なり、當道の味をよくわきまへたるといふ心なり、是より出で分を立るとも踏分をだてすともいふ」とあり。此の意義にて、色里のことを分里又分ある里などいふ。

●あくしやう通ひ　惡所の曾便。堅氣の者より遊女町をさして惡所といふ。惡所狂ひといふも同じ。

●提子の水は云々　寛文頃の名優玉川千之丞の當り狂言「高安通ひ」の唱歌「いつのまにかは高安に……胸の烟をさますにぞ、ひさげの水は湯となれどまださめやらぬ我思ひ云々」を取れり。提子は酒を盛る器にて、柄の長きを銚子といひ柄の短きもの又釣掛になりたるをひさげと云ふ。（左圖參照）

●おれとそなたはなん〳〵　以下

傾城奥州嫉妬の歌

傾城佛の原

傾城奥州嫉妬の歌

いつのまにかは秋の風、吹や越路の山こへて涙の三國の分ある里へあくしやう通ひの面憎や、提子の水は湯となれど、まだ醒めやらぬ我思ひ、つらし妬し、あら腹立と縋り付ては泣く計り、「おれとそなたはなん〳〵七つ八つ十で殿御を見染て惚て、人こそしられ振分髪も、そなたならでは誰にか見せん此黑髪を、今は仇なる亂れ心かあゝ、あゝ〳〵あいた見たさに、きたそやれ、つらや〳〵と思ひはすれど、まだ捨られぬ、憎さに餘りていとしさまさり、扨も命はつれないものよ、君つらや、生きて思ひは愛別離苦の、死でまた來て、その〳〵〳〵、其の先の世で思ひしらしよぞ思ひしれ、袖の湊の戀の淵、渡りくらべん涙川」戀の一念盃の、影暗き夜に嗔恚の毒蛇、くる〳〵〳〵、くるり〳〵〳〵曲輪通ひもふつゝりと、思ひきれ〳〵妬しや、あら腹立やと立たるは憫れにもまた恐しや

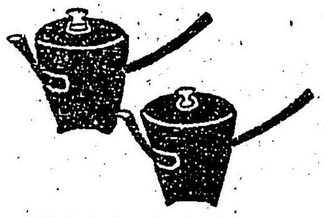
一　傾城買の水上坂田の當り狂言（此の下削書不明）

傾城佛の原　越前國梅永文藏　二重の戀衣

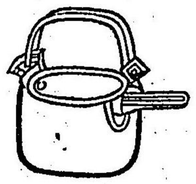
月窓寺沓はきの如來都入

上　月の前の仇し女　二千石の年貢米此よね□もなるよし

「渡りくらべん涙川」まで「みだれ髪」（「松の葉」卷三）の唱歌を少し變へたるのみ。本歌は君と我とは七つ八つ十で殿御をみそめて人こそしられ、振分髪をそめなたらでは誰にか見せん此の黒髪を、今はあだなる亂れ心、あひたる見れば亂れ髪、やあい〳〵、あだなるさきにきたれば、思ひはすれぞかし、つらや〳〵、ど、思ひはすれど又すてられぬ憎さ餘り、いとよ増るさても命は、つれないものよ君つらやいきて思ひつれば愛別離苦の先死んでまた來てその〳〵、其世も思ひしらせん思ひしれ、袖の湊の世も、戀の淵波、りくらべん涙川、色に沈みて死のとも引きは返さじ後や小舟名はながさじ。これも、高安通ひに關係ある歌なり。



提子（女用御家圖葉所紋）



同（和漢三才圖會所紋）

付り三國の奥州は根引の松太夫の名殘

中　窓の前のこも尺八　十年の年季手形　此判墨色よし

付り撞木町の今川は子持梅きのすいな女郎

下　寺の前の迦陵頻　當春の開帳佛　御利生よし

付り東山の麓九重の櫻賑な幕毛氈

●殿御　女子より男子を尊んでいふ詞。おもに花柳界にて用ふ。

●振分髪　幼き時の髪を、中より二つに分けたるをいふ。「伊勢物語」の「くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき」の歌に取れり。前いふ如く、此の歌は「河内通ひ」に據りしものなれば井筒業平に緣ある文句多し。梅永文藏を業平にたとへ、三國の奥州は高安の女、竹姫は井筒にたとへたるなり。●亂れ心　氣の狂へるをいふ。

●我別離苦　佛說にて人間八苦の一なり。親子夫婦等の生別死別の悲みをいふ。●先の世　未來の事。●袖の湊　筑前●淵川　伊勢

●嗔恚の蛇　佛說に、嗔恚は怒り恨み憎しの義にして、面色を變へて人を害ずしむとあり。●嫉妬邪念　嫉妬は邪念に惑ひ狂ひて、我心を苦しむる毒蛇の嚙むに譬ふ。●傾城買の水上　坂田藤十郎を賞美したる詞。藤十郎はやつし濟來の名人にて、傾城買の狂言をよくしたればなり。元祿十一年版「役者一代男」藤十郎の評に「三ケ津傾城買の開山……

……天性至り大癖、諸分の道がしこく、心つたなからず云々」。●傾城佛の原　歌舞伎狂言の外題に傾城の文字を冠するは、島原の遊女が女歌舞伎を興行し、其の狂言に「盤切島原」、「坂田島原」、「八島島原」、「安宅島原」など外題を附したるが、いつの頃にや此の島原といふ文字傾城と變り、外題の下に附したるものを上に冠することゝなれりといふ。即ち「傾城何々」といへば「傾城事の狂言」を表したるなり。此の傾城外題の流行したるは、延寶以後のことにして、恰も浮世草子に好色の外題の流行したるに對せり。佛の原は當時東山に開帳ありし、越前國月照寺の山號に因みたるものなるべし。●梅永文藏　金子吉左衛門の著「耳塵集」佛の原三の後日ゐいふ條に、梅房文藏とあり、後日狂言の時は、梅房と改めたるにや、予未だ其の筋書を見ざれば、こゝに疑ひを存しおく。●月照寺　佛原山と號す。昔は加賀國なりしが、後越前國に屬すと。●沓はきの如く　月照寺の本尊。由來詳ならず。●迦陵頻　佛の原は、佛說に、迦陵頻伽は極樂に棲む不死の鳥にして、面は美女の如く、其の聲甚も麗はしといふ。想像の鳥なり。

●坂田藤十郎　都万太夫の座本にして、やつし濟來の名人なり。元祿十二年の「役者口三味線」に上上吉、同十六年「敎者色三味線」に給金五百兩、所はふるや町家一ケ所、替名伊左衛門、年六十餘（伊原氏の「演劇史」によれば、「佛の原」を演じたるは五十五歳の時なり）とあり。「口三味線」の評に「京も大阪も近年は、二の替り傾城事、盆替我とお定りのやうになりしは、此人の始められしを見習ふて、どの芝居も一あてづゝあてる事、是西十郎を學ぶにあらずや……殊に當二の替り、傾城佛の原、尤しぐみ出來物にて、よく役くば身相應じて、立て者衆中、何れもあたつたでは、ごされ共、一ッは此人近年になき、綿の出しやう、所作の

一梅永刑部　宮崎だん九郎

一惣領梅永文藏　座本　坂田藤十郎

一二男梅永帶刀　敵役　三笠城右衛門

一家老望月八郎左衛門　立役　柴崎林左衛門

一妹松さき　玉村衛門

一若殿藤松　柴崎勘太郎

一小姓櫻谷源之丞　花崎大十郎

一同　勝浦友彌　村上繁之丞

外に、手水鉢に身をへんげ、あるはふるり屋根につたひて天上し又はこたつの姿とあらはれ、身心共にもまるゝゆへ、一ぱいでけたやうに見ゆる事、此人のはたらきにあり」と。

●三笠城右衛門　敵役、上、給金百兩、ふろや町に住み、此年三十六。

●柴崎林左衛門　立役にして武道を得意とす、家老望月八郎左衛門はまり役にて好評なりしと。

●上村吉三郎　若女形、中ノ上、此年大阪より上り、藤十郎座に住込む。

●村上竹之丞　若衆方、上上「色三味線」に「給金百兩、所は宮川町但し自家二ケ所、替名彦七、年二十七」、又同書の評に「聲自慢のお若衆、永々しき口上をいはしては又ない人」とあり。辨者にして長舌調を能くし話しの上手なりと。

●岩井左源太　太夫、上、もとは大阪岩井半四郎座にて、若衆方の立ものなりしが、元祿十五年霜月より京へ抱へられ、はじめて女形を勤めて好評を博しぬ。體格やゝ肥たる方にて音聲好く、小唄浪太夫節の名人なりしと。ふろや町に住み、久兵衛、左太郎等の替名あり。

一立花主計娘竹姫　若女形　上村吉三郎
一藤脇一角　若衆形　村上竹之丞
一身請の傾城奥州　太夫　岩井左源太
一妙小はる　坂田六三郎
一同小なつ　山下龜之助
一つぼね　伊藤庄太夫
一三國の女郎屋玉屋新兵衛　若林四郎右衛門
一傾城今川　太夫　霧波千壽
一かぶろ大吉　山下小才三
一やりてかめ　松本六右衛門
一傾城小さつま　袖島げんじ
一同　若紫　霧波花づま

●若林四郎右衛門　立役の中、給金七十兩、宮川町二丁目、此年三十六。

●霧波千壽　太夫、上々、給金貳百兩、替名は桃助（とうすけ）、又光山といへり、手跡を能くし、俳優中の金持にして家四ケ所を有し、ふろや町に住す。此年二十一。やつしは不評なりしも、傾城事にかけては當時並ぶものなかりしと。

●天井又右衛門　道外の上、給金七十兩、年五十四五。

●金子吉左衛門　道外形の名人、上上吉「色三味線」に所は四條小橋、給金高なし、年六十余とあり、又「日三味線」の評に「當風の一流なし、だし、道外の閑山ほどなし、然れ共此人近年狂言を作らるゝに、自分の役めを第一にたてゝ、よい所をしてとり給ふと世間の評判よろしからず」とあり。文才ありて近松門左衛門と共に、藤十郎の狂主として、作者として功あり。「傾城佛の原」も金子との合作なりといふ。『隨筆』に「耳塵集」二卷あり。

●藤川武左衛門　敵役、上、「色三味線」には上々、給金二百兩、所は延仁寺町、年六十に近しとあり。

●本文の役人替名中一字上げたる者は座中の立者にて原文にも特に文字を大きく書きしものなり、以下の役者は一々註に及ばず

一同　たかはし　玉川主膳
一揚屋柏屋作右衛門　どうけ天井又右衛門
一幇間客の左七　但馬半兵衛
一文藏下人あほう三五郎　どうげ金子吉右衛門
一虚無僧かざ山　村上仙左衛門
一月窓寺法印　坂田藤九郎
一乾　介太夫　立役藤川武左衛門
一狂言作者　近松門左衛門

●奥州　三國の傾城。松の位は太夫職のこと。●根引の松　は身受けのことをいふ。又太夫を松の位といふは、発始皇が松に太夫の官を授けたる故事に據る。●撞木町　山城伏見の遊廓。本名は夷町なれども町の形撞木に似たるより名付くといふ。慶長元年丙申、林五一郎なるもの、豐太閤の許しを得、伏見の西端、田町といふ所に地所を賜ひ、始めて傾城町を取立つ。太閤薨去の後伏見町と共に淋れ、一時殆ど其の跡を絶んとしたるが、慶長九年富田信濃守の屋敷跡の地に賜り、遊廓再興せらる。今の夷町これなり。此の遊廓最初は半夜女郎のみなりしが、万治三年はじめて囲子位を置き、寛文三年又天神を置くと、詳しくは「色道大鑑」巻十二にあり。されば今川は子持梅と、天職にあるをいへり。太夫を松の位といふに對し、天神を梅の位といふ。さて

傾城佛の原

第一

三國の奥州は根引の松、太夫の名取り　岩井左源太
撞木町の今川は子持梅、すいな女郎　霧波千壽

こゝに乾介太夫とてながゝの浪人ありしが、侍あまたつれ我身も由々敷上下の、きなりもさすが大小に、朱鞘もかたき心かな、時に介太夫侍共に向ひ、某此度思ひ立こと餘の儀にあらず、越前の國主を梅永刑部殿と申は、某と同年ぐらいと聞、其惣領を文藏殿といふ、弟に帶刀殿とて有、然に帶刀殿より某へひそかに使が

（傾城佛の原挿絵一）

●絆　酸にかけて、かれて姫縁の生梅を好むといふ世話より、事持の事をきかせたり。
●浪人　浪士ともいふ。仕官職禄なくして流浪する士。
●智累　計畧といふに同じ。
●地行　武士の宛行はれたる領地。
●枯木に花　「遊仙窟」に、「白骨再内、枯樹重花」とあり、又親世音の誓ひに枯木に花の咲くとあり。起死回生の意なれども、浪人などの再び世に出るにも譬ふ。
●こなさん　廓詞。こなた様の畧自稱代名詞より、他稱に轉じたるもの。
●しやれた頭　しやれは髏骨又は木などの雨露に曝されたるをいふ。

たつて、何とぞ兄文藏殿を智略をもつてなき者にし、帶刀殿代を治め度と某に御たのみなさるゝ、此事しずましてもあらふならば、地行は望次第とある、身もなが〳〵おはをからしたる事なれば、何とぞ世に出る樣にと朝夕願ふ所に、是幸と取物もあへず、帶刀殿方へいそぐ、汝等も悅べ、あつはれ世に出れば二度枯木に花咲せんと、侍引つれ行所へ、向ふより三國の女郎屋、玉屋新兵衞は傾城今川を駕に乘せ來る、今川介太夫を見て、なふこなさんはとゝさまでないか、介太夫見て左いふは誰じや、はて私はな、おせんでござんす、扨は娘かと縋付泣く、今川云は久しう逢ひませなんだ内に、髮も白ふしやれた頭にならんした、して母樣は

佛骨を舍利、髑髏をしやれかうべ、又貝殼の波濤に晒されたるをしやれ貝などいふに同じ。頭の禿げて黐の失せたるをいふ。
●どうよく　貪慾の音便なるべしと。但しこゝのどう慾者といふはひとい奴といふの意。

御息才でゐさんすか、介太夫聞、母は去年の秋相果た、何と母樣は死しやんしたかと、涙を流す、やいおせん已はどう慾者かな、母が相果る時も、三國へ飛脚をたて文をやりしに、なぜに一度の返事はせぬ、今川聞、三國へは文はこぬと不審がる、新兵衞いふは、最前より承るに、お前には介太夫樣でござりますか、私は玉屋新兵衞でござる、扨は新右衞門の子息かと云、左樣でござります、只今文をつかはしたと、今川を御うらみでござるが、之れは此人のしりやつたことではござりませぬ、そうじて傾城と成からは、廓より外へ出ることは、ならぬ法でござる故、たとひ文を見せましたとあつても、お會なさるゝことはかなはぬことと存じ、

●傾城　又傾國ともいふ。遊女のこと。「色道大鑑」に曰く、「佛經に淫婦淫女とあるも、是傾城の事也、其の出所は李延年が歌に、北方有二佳人一絶世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一、是傾城傾國といふ名目の起りなり。我朝にては鳥羽

院の御時、島の千歳若の前といひし者、日本遊女の根元なり云々。

●廓　又曲輪とも書く。島原、吉原いづれも一構をなし、出入を警戒するとき、さながら城廓の如し。故に傾城町を凡てくるわといふ。

●遊性　男女に限らず浮氣をすることを遊性といふ。

●間夫　遊女の表向の客にあらずして、密に通ずる男をいふ。情夫のこと。

●念頃　密會なり。

文は參つたれども、わざと此人には見せませなんだ、介太夫聞、其廓より外に出ぬ法に、なぜに此所へはつれてござつた、されば今日こゝへ參つたは樣子がございます、ちと今川に意見なされて下されませ、まづ惡性にござります、お前より買取まして勤に出しますと其儘、やれ玉屋こそ今川と云□を□つたなどゝいふて、大分にはやりました、それから間もないに、間夫の男と念比をして、外の客にはあはぬといやるによつて、いやとかく三國では□□□るまいと、一年先に伏見の撞木町へ預け置ました所に、こゝにても彼間夫の男付添、邪魔をするゆへ、撞木町からもつれて歸るやうにと人を越ました、それゆへ私迎ひに參り、只今

●大名　持高一万石以上の國主をさして大名といふ。

●借まぜふ　廓詞。馴染の客が他に聘せられたる女郎を暫時招きて侍せしむるを借るといふ。但しこゝは別座して話すの意。

三國へつれ歸る所でございます、介太夫いふは、やいおせん悅べ、某もなが〳〵浪人した所に、此度さるお大名より、召抱へんとて飛脚來たゆへ罷下る、もはや世には出た、今に金子大分で取返そうぞ、今川聞、扨も嬉うございます、是とゝさま、ちよつとあそこへ借ませふ、親を借とはと不審がる、何をとゝさま初心な、扨私には男がございます、介太夫聞、何と男があるとや、なる程よい男で、かはいがつてくるゝ、私もたんといとして、ついやゝを產ました、扨は子の有中か、某此年になつてひとりの娘に迷ひ、頭に雪をいたゞき武士の道を研くも、汝を取返さん爲なり、扨は其子は我ためには孫、口惜や殘念ながら對面もせぬかと涙を流

●花を見捨る雁金　雁は秋來り春去るより、しかいふ。「古今集」「春霞立つを見すてゝ行雁は、花なき里に住やならへる」。これらの歌より取りし文句なり。親子の別れを花を見捨て帰る雁にたとへなるなり。

●意趣　怨みのある意趣の事。遺恨といふも同じ。

す、新兵衛時刻移ると、今川を駕籠へ乗れば、介太夫も悲み娘さらばと、互ひに別れなく〳〵も、花を見捨る雁金の、親子の心ぞ道理なり、扨も立花主計の娘竹姫は、藤脇一角御供にて、梅永刑部の館の前に、笠傾けて忍び居給ふ所へ、城内より望月八郎左衛門は、乗物に若殿を乗せ、妹を付先に立、御身は跡より御供し、館へ帰る所に、跡より一角申々お前には望月八郎左衛門殿ではござりませぬか、成程八郎左衛門は某でござる、何の御用でござるといふ所を、一角やらぬと切付るを、ひつはづし取て伏る、竹姫槍にて突んとし給ふを、是も同じく取て伏せ、不敵なる奴原かな、某に何の意趣があつて、斯くふるまふ、まづ名を名乗れ、此

●いひなづけ　約すること。

男女幼き時より婚

●去り狀　離縁狀のこと。「嫁娶調査記」に曰く、「女を去らずして叶はざる事あれはいとま狀を書いて遣す也、世に三下り半といへども、其も定めて法なき事なり、とかく女の離を云ふは道にあらず、少もかまひなきやうに書が法なり其方儀不縁につきいとまをつかはし候向後少もかまひこれなく候儘いつ方へなり共勝手次第に縁付可有候後日爲二證狀一札如件

年號月日　誰判

何どの（女の名をまいる）（かくべし）

去狀の書樣大かたかくの如し」。

期になつて無念なれども、語て聞せん、忝も是にござるは、主計殿の御娘竹姫樣、かく云ば家老玄蕃が悴一角なり、汝が胸に覺あらん、八郎左衛門聞、全く覺はない、なんと覺ないとや、其方が心一つで、竹姫樣を捨さしたな、我主君と文藏殿とは、言名付の御夫婦、然ども汝の妹へ御手がかゝつたゆへ、それを幸と悦び、文藏殿へ姫のことをあしさまに申上たゆへ、昨日文藏殿より去狀が來た、とかくに戀の敵は、八郎左衛門とねらひ今此ていじや汝が心に、我妹を御臺となし、此お家をしてやらふと見た、さあいふことは是迄じや、はやうころせといへば、八郎左衛門驚き、是は假初のことでない外にかたうどあらん、屋敷のまはりを穿鑿

●御達　御達盤所の略にて、公卿武臣凡て貴人の宣の尊稱なり。

●假初のこと　假初は其の時限りにてしかと定まらざるも、但しこゝは小事と解すべし。

●かたうど　荷擔をする人、同類なり。

●かひ〳〵しき　勇み勵むの狀。

●油斷　「涅槃經」に、國王一人の臣下に勅して、油の盛りたる鉢を持せて道を行しめ、若し途中一滴たりとも油をこぼすに於ては、其の者の一命を斷つといふ譬あり。これより出たる語なりと。怠慢又は不注意のことをいふ。

●擬勢　喧嘩口論などの場合に、對手に向ひ刀の反りを打ちなどして威力を示すをいふ、又ぎしむとも。

●大殿　武家にて當主の父を尊んでおほとのといふ、當主のことを殿樣、若君を若殿といふに對したる語なり。

せよと、侍共を遣し、さて兩人を起し、姫の塵打拂ひ、さても〳〵かひ〳〵しき御働と畏る、一角聞き何程に騙るとも、油斷はせぬぞと擬勢する、八郎左衛門騷ず、私が一通り申上ることがあるお聞被成て下されませ、まづあの子を妹が子と思召によつて、お腹が立つ、あれは三國にかくれもない、今川とて傾城の子でござる、文藏殿には惡性にござつて、かの今川に深ふ馴染重りて、あのお子が出來ました、然れども今川との子と申ては、大殿の前がすみませぬ、某が妹へ御手がかゝつて、若殿がでけたと披露申も、殿と某が談合でござる、全く妹は產は致ぬ、一角聞、それならば子を產ぬといふ證據を出しや、扨もむつかしや、やいおさき何ぞ證

●やくたいもない　役にも立ぬの詰りならんと。大坂詞にて埒もなきこと。

●逆心　臣として君に反くをいふ謀反を懷く心なり。

●評議　評議して理非を明白にすること。

●走り過ぎ　逃り過ぎたるをいふ行き過ぎともいふ。

●鷹野　鷹を放ちて山野に狩すること。

據を御目にかけや、何をやくたいもない、はて耻しいも時による、乳を姫君樣に、御目にかけいといへば、姫傍へより おさきが懷へ手を入見て、一角是はやゝ產んだ乳ではない、それならば子の所は埒明たが、去狀がすまぬ、是を見やと出す、八郎左衛門見て、いや是は文藏殿の筆でないと、思案して扨は逆心の起すか、忌い〳〵此詮義は重て仕ふ、一角聞かやうの惡事を企む奴を、重てとはのび〳〵な、某屋敷へふんごみ詮義仕んと、かけ入んとするをとゞめ、やい某が思案が有といふに、走り過ぎたと宥め、兩人ながら事のすむ迄は、某が屋敷へ伴はんと、おの〳〵誘ひ歸りけり、梅永の惣領文藏は、鷹野に出馬に乘り歸り給ふ所に、

●仔細らしい　仔細はなほ分別の如しとあれば、分別臭しといふに同じ。

●一ゑん　さらに又は一向と同じさらに合點行かずなど。

●推參　貴人の前へ推して罷り出るをいふ。

門外に七十計の侍、謹んで畏る、やいあの親父は仔細らしい、訴訟ならば家老八郎左衛門にいへ、おれは氣の詰る事はきらひじや、いや八郎左衛門は勿論、御舍弟帶刀殿へ申上ても一ゑんお取上なきゆへ御前をも憚ず推參仕候、何といふ兩人へいふても取上ぬ、合點がゆかぬ、して汝が名は何といふ、某は立花主計が家來、藤脇玄蕃と申者でございます、扨は聞及びし玄蕃かと馬より降り、其主計殿の息女、竹姫とは夫婦の言名付あり、其家老の訴訟とは心得ぬ、さればでございます、申上るも難儀に存ますれ共、御訴訟申上まする、扨も三年以前に、御舍弟帶刀殿より、某が方へひそかに御使があつて、何とも汝にいひかねたれども、米二

●切々　しきつて。

●だんな勘定　主家に對し勘定するもか。詳ならず。

●取込み　今いふ私消なり、遣ひ込みとも。上方にては物品を詐取する者を取込屋といふ。

千石しな〳〵に御用にたつ樣にと、御意あつてござる、成程畏り入ましたと主君にはかくして、某ひそかに帶刀殿へ、二千石早速御用にたちましてござる、然れ共此米其年の暮にも御返しなく、去年も切々申上れども ならぬ〳〵と御意なさるゝ、是難義は某一人でござるは、だんな勘定立ませぬゆへ、某が取込仕候樣に申、何とも迷惑此時でござる、何とぞ帶刀殿に二千石、今日中に御返し被成樣に、仰付られ下されなば有がたく存候んといふ、文藏聞扨々憎い弟めかな、己が入用に米を借り、□が顏を汚した、急度いひ付ませふ、扨も外聞わるい、やい侍共、帶刀をこゝへ呼べとあれば侍内へ入かくと云、帶刀畏り、今日は風も烈ふござる所

に、御機嫌よく、御歸りなされ候段大悦に存まする、文藏聞、口上はさつはりしたがやい物しらずめ、なぜに玄蕃に米は借た、帶刀はつと思ひ玄蕃を見てお手前は又こゝへ來たか、おゝ參上申てこなたへ貸た米の義、文藏殿へ申上た、何といふぞ内々の米の事を、文藏殿へ申たか、南無三寶と赤面する、やい帶刀、汝入用の事あらば此兄にはなぜにいはぬ、米の三百や四百は取せうに、ふがひないと叱る、いや申兄じや人、是はお前の借分のやうな者でござる、何じやおれが借たやうな物とは合點がゆかぬ、まつすぐに申せ、されば某がふがひないは、三年以前にこなたには惡性をなされ、俄に金子入用とて、某に金子を才覺仕るや、仰られた

●南無三寶　南無は那謨の轉、歸命頂禮の義にして、佛に祈る時發語の如くに用ひる語なり。南無阿彌陀佛の如し。三寶は佛法僧をいふ。はじめは佛に向つて救助を願ふる時、唱へし語なるべしといへども、後には失策をしたる時、又は俄に苦痛の襲來に驚きし時などに、無意味に南無三寶又は南無三などゝ絶叫するに至りぬ。されば場合により意義に輕重あり。こゝは唯しまつたぐらひの意。

●ふがひない　いふがいなしの轉、意氣地なきこと。

れ共、私は御存の如く、部屋住のことなれば思ふにかいなく、ふと存付て、玄蕃方へ申付てござれば、早速二千石貸ました、其米を賣拂ひ、金子を拵へ進じましたが何と覺がござりまするか、文藏聞、あるもく〳〵むごう有、むゝして、其くれた金子は、此借し米を賣拂てこした金か、日も忘れぬ一昨年の七月の十四日であつた、其時金が入たは、きついことじやあつたゆへ、帶刀にいふた、それはそふ、玄蕃今迄は弟が借たと思ふたが、弟からおれへ借た、隨分早うすましませう、今少し待てたもれ、玄蕃聞とかくお前には申分はござりませぬ、是帶刀殿、さあ二千石を今日お返しなされよ、さもないと主人の手前が立ませぬゆへ、身はこゝ

●部屋住　親にかゝりの子息の稱。堂上方にては御曹司といふ。

●むごう有　氣の毒にも覺があるといふ意なるべし。

●おんでもない　仰せまでもない の略。

●卯月　卯の花月の略。四月の異稱。

●年貢の未進　年貢は地頭に納むる貢米なり。未進は期限に上納を怠りたる事にして、去年の末滯納したる年貢の殘りが、此四月頃には納まるとの意なり。

●酒盛て尻切らるゝ　施した恩の代りに仇で報ひらるゝ譬へ。酒盛つて尻ふまれともいふ俚諺あり。

●勘當　律に勘へ罪に當るの略なり、君父師など目上の人の意に戾り、臣子弟子等の緣を絶ち、放逐せらるゝをいふ。

で腹を切まする、帶刀聞、すればどうでも今日中に取ねばならぬか、おんでもないこと、何と是ほどに事を分ていふにと氣色する、文藏留めて是玄蕃、こゝで云分するとおれが難義する、卯月の時分には、百姓の年貢の未進がある、それを取たらばすましませふ、玄蕃はいやお前には言分はござらぬ、是帶刀殿、世話に申如く、酒盛つて尻切るゝとは某でござる、ゑい〳〵腹を切ませふ、しかし腹を切からは大殿刑部樣へ申上て、御意を受て腹を切と、行んとするを、文藏どゞめ、さりとて此事を親父に申ど、かゝつた事ではない、おれは勘當せらるゝと、帶刀も共にとどむるを、振り切り奥へ行にけり、跡で兄弟うろ〳〵する所へ小性奥より

●腰の物　刀劔のこと、武士の腰に佩ぶるものなれば腰の物といふ

●菅詣遮斷　云はふやうなきこと。菅にも棒にもかゝらぬなどいふに同じ。佛說に、天台大師の妙法を讀したる詣に起ると。

●阿房拂　武家にて、罪の左まで重大ならざるものに兩刀を碎ひ追放するこれを阿房拂といふ。「俚言集覽」に、「甲陽軍鑑」を引いて、方術拂らひ、戲け者拂といふも同意なるべしと。

●閉門　德川時代武士に科する刑名の一にして、門を閉ち謹慎するをいふ。罪の輕重により五十日百

出、申帶刀樣、大殿樣の御機嫌あしく、急ぎ御出なさるゝやうにと御意がござります、帶刀はさあ〳〵大きな事になつたと、御前へ行、しばらくして帶刀出て、是々兄きへ申まする、大殿より仰渡されの書付がござる、慥に御聞なされ、まづ腰の物を渡さつしやれと、扨帶刀書付を讀む、抑惣領文藏は度々の惡性筆に盡しがたく中にも此度二千石の米を取込み傾城狂のと言語道斷其罪重し、いそぎ町人の見せしめに刀を奪ひ取り、阿房拂に致すべし又望月八郎左衛門は閉門たるべし若し少成とも容赦する者あらば後日に難義致すべし其爲如件と讀み、帶刀は、なふ兄じや人某も何ほどか悲うござる、文藏聞扨は玄蕃がまつすぐに申たゆへ、某を

日と日數に長短あり。閉門中は、外より監視してたとへ奴婢たりとも出入するを許さず。

●容赦　寛大の處置、こゝは罪を看過するの意。

●如件　くだんのごとしは、前を受けて斯くの通りといふに同じ。證文の終りなどに、依而如件と、多くは結語に用ふ。

●身より出たる錆　刀の錆は、其刃を腐蝕する有毒なるものなれどヤハリ刀の身より出るなり。人間の罪も又これと同じく、大にしては身を滅すにも至れど、皆自ら招く禍にして自業自得なり。たれか怨みんとなん。

●燃杭には火がつきよい　男女の情交の一たん斷絶したるも、再びいひよりて舊の溫情を復するに譬ふ。

阿房拂と仰せられたな、よい〳〵身より出たる錆、誰が怨に思はん、是非にかなはぬ次第かな、扨も今思ひ出した、三國の奥州が請出された時にふつと思ひとまらふと存たに、燃杭には火がつきよいと、又今川に馴染重なり、二人の中に子まで出けた、今川もおれをかはいがつて、外の客に逢なんだ、それを親方が聞て、憎い事とて伏見の檀木町へやつておいた、そこへ迄ついて行て馴染重なつた、とかくにおれは阿房拂となつても苦うはない、今川とおれとが中の子を、八郎左衛門に預て置た、せめて此子をもりたて、末々は家を繼せてたもれ、帶刀賴む、心得ました、さあ時刻移ればいかゞじや、侍共杖のあたらぬ樣にそろ〳〵おつ立ま

●割れ竹　拷問又は追放などの時罪人を叩きたつるに用ゆる具。丸竹の先きを割りたるもの。

●玄蕃になつて詰明　玄蕃になりおほせての談判なり。

せい、心得ましたと、割れ竹にて侍共たちならぶ、文藏なく〳〵立給へば侍あとよりたゝきたつる、なふ帶刀せめて笠はゆるしてたもれ、いや笠もなりませぬ、何とならぬか、白晝に面目もない、文藏がなれるはて、と泣々歩み行き給ふは、あはれ成ける次第也、扨帶刀は介太夫を呼び、扨も只今玄蕃となつての詰開き、感じ入たる事なりといへば、介太夫聞、某謀ことをもつて、文藏殿を追ひ失ふ上は、最早こなたの儘になつた、此上は八郎左衛門を殺す謀をといへば、帶刀も大に悅び、いよ〳〵賴み申たまづ奥へ行酒くまんと、帶刀は内へ入る所へ、望月八郎左衛門は□□□□罷り、介太夫がはいるを突退け、通らんとする所を、内より門をはた

●死そこない　人を呪ひたる詞、老惚れたる人などを罵る時に用ふ

●家中　梅水の藩中をいふ。

とさす、八郎左衛門はやい侍ども、家老八郎左衛門が通るに、念はいらぬ早く開けよとわめけば、いや八郎左衛門殿ならばなを通しませぬ、不思議な事をいふ、何と某ならば通さぬとや、異議に及ばゞ踏破つて通るがと、たゝき立る、介太夫は最前にえはいらずして、きのどくがり門内へいふは、某は味方じや、門を開き通せといふ、内より心得たと門を開き、入られんとするを、八郎左衛門さきへいらんとする、介太夫引戻し、我入らんと爭ふ、八郎左衛門いふは、やいこゝな死そこないめ、已は家中ではついに見ぬ奴じやが、何者じや、介太夫聞とも愚や某は、藤脇玄蕃といふ者じや、なんと玄蕃殿とは、文藏殿と言名付の竹姫様の家中そ

●築地　築泥の約、柱を立て板を添へ、泥土にて其間を塡めて築き上に瓦を葺きたる垣。

●城内はかなはぬ　城内の下に「へ入ること」の五字を加へて見るべし。

と、騙る時築地の上より、帶刀見て、こりや八郎左衛門、門外で喧う何をいふ、八郎左衛門見て、あゝ嬉しや是帶刀様、只今□□じんをしめば□□ませぬ、ざつと仰付られて下されませ、帶刀いふは、其方は様子をしつたであらう、兄文藏は大殿の御意で阿房拂にした、又其方も閉門とあるゆゑ、城内はかなはぬ早々かへれ、扨は大殿の左様な御意でござるか、さあらば某が若殿様をつれ參り、今一度御訴訟申上る間、急ぎ門を開き給へ、帶刀聞き大殿はかたい御人なれば、なか〳〵かなはぬ、何と若殿のお通りでも門は開ぬか、ぜひもないといふ所に介太夫帶刀へ向ひ、扨某はどう致しませうといへば、おゝ汝が義も文藏阿房拂となる上は、竹

●我　自稱の代名詞なれども、他稱に用ふ。

●言分　いふべき分。抗議なり。

●曲者　又曲事など、正しからざるかいふ。胡散な奴、又怪しむべき奴といふに同じ。

姫にも暇をやる、早々皈れといへば、介太夫足早に皈るを、八郎左衛門見てならぬ動くな、まづ我は玄蕃でないか、物をとくと合點せよ、竹姫様と文藏殿とは言名付の中でないか、それに何ぞや帶刀殿の暇をやつたとの給ふとて、一言の言分なくぜひもないと足早に通るは曲者と、胸ぐらとらへ引ずり戻すを、無理に行んとするを、一角竹姫をつれ來りどこへといへば、憎い奴めとせり合ふ、八郎左衛門見て是玄蕃こなたは一角といふ子があると聞たが、其子の顔を見知てか、玄蕃聞人として我子の顔を知らぬといふとがあるかと笑ふ、これは最じやが、して主君竹姫の顔を見しつてか、まだたわけを盡す、主の顔を知らぬ家老があるかといふ

●さる大名　しかと名を指さず、さる大名といふ。下屋敷は別莊のこと。

●座敷も心有明の　明の月を待つ人あるかいふ。心ありげに有

●影法師　人の影の障子などに映るかいふ。

●嬉し耻かし寢屋の中　は其の頃の流行歌。

●女房　女の房より出たる名かといへり。禁中に宮仕へする女、貴族の家に召使ふ女をいふ。侍女のこと。

八郎左衛門おかしがり、やい、玄蕃の誠の子一角はこゝにゐる、主君竹姫はこれじやといへば、扨はたばかられしと腹を立、某は玄蕃ではない、乾介太夫といふもの、帶刀殿に賴れたと、切てかゝるを帶刀下知をなし入亂れて戰しが、八郎左衛門に切立られ、皆城内へ逃げ入たり、一角おつかけんと逸るを八郎左衛門とゞめて、竹姫の御供し屋敷へこそは皈りけり、かくてさる大名の下屋敷と見えて座敷も心有明の、月待とてか賑に、三味引く手元しなもよく、障子にうつる影法師、嬉しはづかし寢屋の中と、歌をうたふて女房衆、月やおそしと待給ふ、かゝる所へ文藏は、紙子の單衣身に纏ひ、古編笠小脇差さも見苦き姿にて、月窓寺へと心

●紙子　紙にて製したる衣、かみこ紙として一種の白き紙を縒ぎ、柿渋を弱き、手にて揉み、柔かにして用ゆ。原來は貧者の爲に製したるものなるべけれど、歌舞伎淨瑠璃にて、勘當帳に載りたる息子の零落甚しき狀態を寫さんとして、紙子を着せたるが原となり、紙子といへば意氣なものゝ如く、助六伊左衛門、時次郎など色男を想像せしむるもおかし。元祿頃は可なり需用ありしものと覺しく、「薩州府志」に、京都白山道四條邊に、これを製して販ぐ家あるを記せり「雜波雀」には紙子屋々寶寺町とあり。

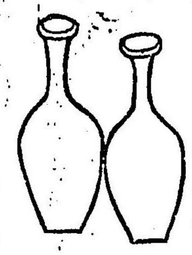
●節を付けた歌　節を付けるとは、謠物の文の傍らに、樂符を記し、其曲節の高低長短を示すをいふ。

●三方にお鏡の餅　三方は檜の白木にて作れる、方形の折敷に脚を付けたるものにして、神供又は貴人の膳部或は儀式の時に用ゆ。食物を載する器なり。

●鏡の餅　餅を鏡の如く、圓く扁き形に作りたるをいふ。神に供へ又は吉禮の用とす。

さし、暗さはくらし道もさだかならねば、彼下屋敷の軒に佇み、歌三味線に氣を浮し、さまゞ〳〵ひとり仕方をしていふは、さても〳〵あの歌は、三國の奥州が節を付た歌じやが、こゝまでもはやる、扨々どうやら面白うなつた。まづ暫く樣子を聞ませふといふ時、内より侍女三方にお鏡の餅をのせ、庭へ供へ奥へ入る、文藏さゝらばちとお月樣と談合しませふと、そつと内へ入かの餅を掴み、懷へ入帆らんとする時、又侍女御酒を持ち出、三方に乘るとて鏡なければふしんがり、いやとかく手水鉢の上に、置んとあたりをさがし、文藏の頭をそつとなで、手水鉢と思ひ、御酒の乘ある三方をすつぼりと頭へきせ内へ入、文藏幸と三方を被り

●すゞ　錫の御酒壺のこと。



すゞ（女用御家圖案所載）

●局　宮中にある部屋の稱より、其の局を有する女官をさして局といふ。但しこゝは侍女の中の重立たるものをさす。

●しやく　柄杓のこと。

●うさん　怪しむべきこと。

ながら、すゞを口へよせづゝとのみ、よい氣味といふ所へ、局出て侍女をよび、手水つかひたしといふ、心得ました、まづ三方を取ませふと、そつと取り手水鉢かと思ひ、文藏の頭をこち〳〵たゝき、はあ水がない局聞ていやゝ寒ずるゆへ、氷がはつたであらふ杓では破れまい、それ臺所へ行、鐵槌を取ておじや、氷をたゝきみしやいでくれふといへば、是はならぬと文藏は垣の外へ逃給ふを、侍女見付け驚き、何事じやと咎められ、やう〳〵かしこへ忍びけり、局奥より火を持出、これ〳〵さきのやつが、こゝに風呂敷包を落しておいたと、開て見れば文なり、さても〳〵胡散な事かなと、文ども披げたて見る所へ、座敷より奥州は出、

●大黒舞　大黒天の姿に扮し、人の門に立ちて歌ひ舞ふ。古くより行はれたりと。「梅津長者物語」に出たれど、今「淋き座の慰」に載する所の昔大黒舞の歌は「ござつたゝ福の神を先に立て大黒殿のござつた大黒殿の能には一に倭ふまへて、二ににつこりわらつて、三に酒をつくつて、四つ世の中よふして、五ついつものごとくに、六つ無病息災に、七つ何事なうして、八つ屋敷をひろめて、九つ小藏をぶつ立て、十でとうどおさまつた、此歌は年々新しきものに作りかへ、舞ひ歩きしといふ。

●そこな人　そこに居る所の人の畧、誰とも氏名の知れざる故、斯く呼かけたるなり。

●なぶらに　なぶらずとなり。なぶるは弄ぶと。

●一の寶物　中で一番貴いものといふ意。

やい何をやかましういふぞ、されば奥様かはつた事がござんす、さきに大黒舞の様なものがこゝへ來てゐましたゆへ、垣の外へ追やりましたが、其男が此文どもを風呂敷に包み、こゝに落して行ましてござんす、奥州は其文をこちへ見せよと取り、中で二つ懐へ入、これ侍女ども此文を落したものは、外にゐるか、内へ呼で話をさして顔をおれに見せよと、我身は座敷の闇に、巨燵にこしかけゐ給ふ、侍女どもは是々そこな人、何ぞ落しはしやらぬか、さあなぶらぬと風呂敷包を早う下されといふ、心得たと風呂敷に、文ども引ちらしほり出せば、是はならぬと文ども皺のばし勘定して見て、是々大事の文が二つ見へぬ、出さしやれ、中で一の寶

●せがむ　強請の意。「續狂言記」「猿聟勾當」女どもが花見に參りたいといふて毎年せがめども身どもは目が見えず云々。

●いにしへの馴染　昔しの馴染なり。奥州が昔て三國遊女たりし時のこと。

●傾城づかを握つた　「色道大鑑」に、「柄を握るは、當道を好みて遊を嗜む心也」とあり。又「昔操つた柄」といふ俚諺もあり。即ち昔しは傾城買に名を博したものといふ意。

●こぞり寄る　集つて寄る、皆集り來ること。

●火桶　火鉢のこと。木にて作りしものなるべし。桐火桶など。

物がない、さあ早う〳〵とせがむ、闇より奥州是かと出す、それ〳〵出たと頂き、風呂敷に包み、扨も意地の悪い女ご衆やと、いろ〳〵話するを、闇より奥州見ればいにしへの、馴染の文藏なれば、是はと涙流す、かくとは知らず文藏は侍女どもにいふは、こなた衆の□□みぐるしいなりでゐるゆへおかしいそふなが此男も傾城づかを握つたなれのはてじや、昔を思へばいつそ此紙子もましか、ちと昔の話をして眠を覺そふといへば、さあ聞たしと侍女ども一所へこぞりよる、奥州は侍女にいひ付火桶をやりければ、文藏見て是は忝いと前へよせ紙子で包みさて話ませう、まづ此様な形になつたは三國で隠れもない女郎に奥州とてありしが、

●めつたに　みだりになり。上方詞。
●家老　大名小名の家人の長。
●我を立て　意地を張ると。
●こけて　轉んでなり。

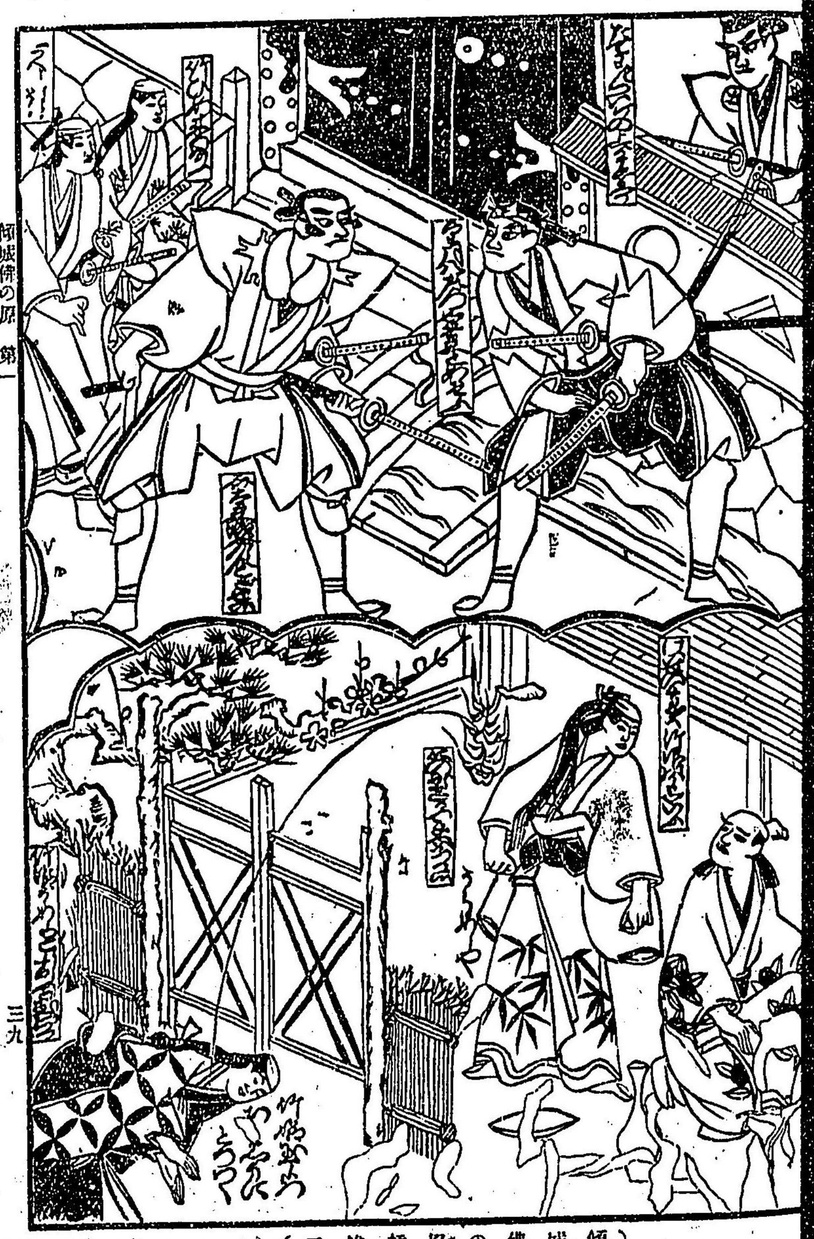
其女郎にふと馴染重り、めつたに通ふ程に〳〵家老の意見面白い、親の勘當心得たと三國通ひにかゝつてゐた、或時□□□をして四五日も互ひに、我を立て詫ともせなんだ内に何國の者やらつい奥州を請出した、それを聞とはつと思ひ、とんとこけて泣たが、三日が間泣暮したと語れば、奥州我身のとなれば涙は瀧の如くなり、さて奥州にはなれ、ふつゝりと思ひ切ふと思ふ所に又今川といふ女郎に逢ひそめ、二人の中に子まで有、此樣な姿もふたりの傾城ゆへと語る、奥州は□□□□□□、殿樣のきる物を□あれ□あいといふてきる物を文藏に着せ、内へ入、文藏は忝いといへば奥州闇より出て、互ひに縋り泣げき、文藏樣私は□□□□□

●しつぽり　しんみりと身のはいつた形、春雨などの靜かに能く潤ひたるをしつぽりしめるなどいふ
●玉火焔　玉は魂の宛字なり。
●角の生ゆべき勢　女人嫉妬怨恨より鬼形をあらはすと。六條の御息所。宇治の橋姫等其の例少なからず。

□こなさんの事を明暮思ひ、今の男に逐にしつぽりとしたをはござんせぬ、又今川殿のとも子迄ある中なれば、いとしがつてやらんせと話する所へ竹姫來り文藏を見付、おれを捨て外に女房を持せ給ふと、文藏をつれ行んとし給ふ、奥州は竹姫をとゞめ、こゝはおれが所じや、文藏樣もやるとはならぬと、外へ突出し戸を締ければ、竹姫□と其儘倒れ伏し給ふ、奥州は文藏と盃をしてゐる所に、不思議や竹姫の胸より、玉火焔となりまひ上り、奥州が盃に入と其儘、奥州目の色變つて、竹姫の怨をいふ、文藏難義し逃んとするを、とゞむる怨の數々、角の生ゆべき勢も、又ひれふして倒れける、かゝる所へ帶刀は來り、竹姫そとに伏しゐ給ふ

を見て、やがてしばり様子をとへば、□□の事をいひ給へば、さては文藏此所にゐるには極つた、侍共さがせといへば、皆々槍を拔き亂れ入、奥州文藏を屋根越に落し、侍一人槍引たくり、あたりの井戸へ突きはめ、上より槍にてさし殺し、さあ文藏井戸へ穿はめ、殺したといへば、帶刀悅びでかしたとて、扨介太夫に向ひ、首尾はよいといへば、侍共大殿を乘物に乘せ來る、刑部は帶刀、□□づかへつれて來るとの給ふを、介太夫むたいに大殿の肌を脫がせ、侍共にひつばらせ大刀を介太夫拔き、大殿の腹一文字に切ければ、あつとばかりが最期なり、さあ望月八郎左衛門をこゝへ呼と□かくといへば、八郎左衛門は白き小袖に袴を着、息を限

●最期　ないふ。一命の果る期、臨終の時



（傾城佛の原挿繪二）

つて來りつゝ、大殿の切腹を見て涙を流し、扨帶刀に向ひ、竹姫樣と夫婦に成給へといへば、最とたばかられ、竹姫を八郎左衞門に渡す所へ、一角かけ來れば、やがて竹姫を渡し、さて帶刀にいふは、只今は姫を取ん爲の謀といふ、帶刀聞き、やい文藏は此所で、最前井戸へはめ殺したといへば、皆々肝を潰す所へ、奥州かけ出、最前屋根より落したといへば、八郎左衞門悅び出來ました奥州殿、此上はいざ我方へともなはんと、扨帶刀介太夫に討てかゝる、兩人かなはじと逃て行く、よし〳〵今一たん討洩すとも、重て本望遂んとて一先こゝを立去りけり

●出來ました　成功を讃めたる語でかいたなどゝもいふ。

●情の問屋　遊女は情を窺ぐものなれば、色茶屋を斯くは呼びしなり。遊女町を戀の港などいふに同じ。

●揚屋　女郎を抱へ置くを置屋といふ。揚屋は其の置屋より女郎を招聘する宿なり。

●禿　遊女の召使ふ女童にして、昔しは髪を結はず、中切りにして打亂したるより、禿の名稱ありと此の禿成人の後才色に歷じ、太夫ともなり亦天神ともなるなり。斯の如く禿より昇進したる女郎を禿だちといふ。

●太鼓　太鼓持の下略、太鼓もちといふは、傾城買の客に附從ふ者をいふ、此名目の起りは、紀州雜賀踊よりはじまる、鐘を持ちたる者は首にかけてをどる、其中にかれをもたぬものに、太鼓をもたすなり、是によつて此名目とす。（「色道大鑑」）

●大盃　また大臣とも書く。「色道大鑑」にいふ、「大臣傾城買の上客なさしていふ。それ大臣は天下の

第二

こゝぞ情の問屋なる、三國の揚屋柏屋作左衞門が方には、禿共踊の稽古をする所へ、太鼓京の佐七は柏屋へ來りければ、作左衞門出で何と久しや、此方へは見えぬとじや、されば此中はかぎやへ計ゆく、扨ちと見事なものを持て來た、馳走をなされ、さる田舍の大盡じやが金はいかいとあるそふなが、氣の毒なは吝いといふ所へ、三五郎は大盡と成來り、亭主に逢ひさま〳〵阿房を盡す、亭主盃頂き、一つ受け何と左七、こゝらをと目はじきする、左七は何と旦那、くわつと亭主におはづみといへば、心得たと腰より貫差なる錢を取出

三公にして、尤も職重ければ尊敬しい、又欺きていふ異名なりと。又身代の多きもの、高祿なる者を大身といふより、轉じて廓の上客を大盡といふかとの一說あり。

●亭主　揚屋の亭主なり。

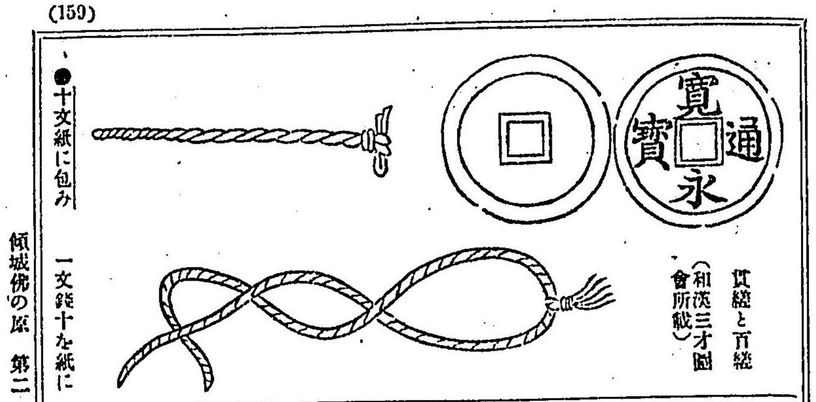
●阿房を盡す　戲けた事をするをいふ。あはうは阿房にも阿頼にもあちす阿防羅殺の阿防なりと一個言集覽」に見えたり。然れば牛頭人首にして兩脚牛蹄なる滑稽なる形より起りし詞にや。

●目はちき　目をはちく手眞似なるべし、客に纏頭を促す信號とおぼし。

●くわつとおはづみ　思ひ切つて金をやれとなり。

●貫緡　昔の錢には皆孔あり、これに緡を通し、携帶及び計算の便に供す、貫遊は、一貫緡をいふ。緡に貫きたる錢といふこと。

し、十文紙に包みはづめば、皆々笑ふ、いやならばおきやと取りかへす、亭主いふは、何ぞしやれた料理を致しませふといへば、三五郎聞、いや〳〵しやりかうべは□□□も、はかりくじらがよいと二階へ上るうきふしの身も竹の葉の、流も清き今川は、くり出し歩みしつとりと、柏がもとへ來れば、作左衞門出なんと太夫樣、今日はどういふ事でお入でございます、成程今日は、ちとあいたい人があるゆへ、こゝへ來たはいなといふ所へ、編笠深く被たる男、つか〳〵と二階へ上ると、作左衞門とゞめて、誰じやといへども答ず、無理に奥へ行んとする、今川見て作左衞門殿、あれが今日の客じやといへば、いやどうでも合點が行きませ



貫緡と百緡（和漢三才圖會所載）

●十文紙に包み　一文錢十を紙に

ぬと、笠引取、やあこなたは、玉屋新兵衞ではないか、扨は今川殿と□□やりにござつた、どこの國に女郎屋の身として、內の女郎と、此樣なことがあるか、きつとくつわ仲間の作法に致さんと、かけ出るを、新兵衞とゞめ、成程其方のが尤じや、此始末すぐにいはふ、はづかしながら今川に心を懸け、度々いへども戀をかなへてくれぬ、それゆへ此中もとかく此戀がかなはぬと、おれは焦れ死に死ると、せめていふたれば、今川のいやるには、それほどに思ふなれば、年季手形を渡せ、手形さへ取れば他人じや、主でも內の者でもない樣にして、心よう逢ふてやらふといふが嬉さに、親の目を忍び、手形を盜み出し□□に今日渡す、是程に思ふ戀

包みて亭主にはづむ。賽渡初穂にも足らぬ小錢を、揚屋の亭主に遣すとなれば、其のおかしさ知るべきなり。

●しやれた料理　有ふれた物でなく、何かおつな物となり。

●しやりかうべ　髑髏のことなるべし。下文脱字ありて意明瞭ならざれども、しやれた料理といひしに對する、鸚鵡返しなるべし。

●はかりくじら　詳ならず、干魚屋の店頭にある切り鯨の肉などのことなるへし。

●金子吉左衛門の評　「口三味線」金子の評に「佛の原の狂言に、文藏下人三五郎となつて、主人の使を承り、身をうつじんのかい手となり、たいこの左七、揚屋作左衛門などへの挨拶、就にやぼのかい手はかふもあらふと、感じ入ておかしく、其後今川にあふて、口上の一通りをあどなふいはるゝやうす初心なあほうに打ついてどうもいへす云々。

●うきふしの身　うきふしは世の憂き事多きを、竹の節しけきに譬へたる詞。

●流れ　は遊女の身の上をいふ、昔し遊女は、宝、三嶋江、江口、神崎、三國など或は海邊或は川岸の都會に住ひ、舟に乘て旅人を慰めたるより、浮き川竹とか又は流れの身など、古くよりいへり。謡曲「班女」に「うきふししげき川竹の、流れの身こそ悲しけれ」とあり。

●柏がもと　柏屋が許なり。柏屋は三國の揚屋。

●合點　和歌に點を合す事より轉じて、承知承諾の意に用ひらる。即ち合點ゆかずといへば、腑に落ちぬ、呑込まれぬなどいふに同じ。

●女郎屋の身　女郎屋の分際としてなり。

●くつわ　女郎屋又女郎屋の亭主をくつわといふ。意義詳ならず、或は京の六條三筋町を開きし原三左衛門は、豐太閤の馬の口取にして、太閤三左衛門が長年の勤勞により、遊女町創始を許されたれば三左衛門が女郎屋の主人となりてからも、以前のお馬の轡取りを思ひ出し、くつわ〳〵といひしより一般に女郎屋の事をくつわといひ習はせりと。或は金轡（贈賄の意）より起るともいひ、其の他種々の說あれど、確說なし。

●作法に致さん　女郎屋の亭主が

じやと涙を流し語れば作左衛門も涙を流し、それほどの事を辨へぬ男ではない、宿をせふと新兵衛を二階へ上げ我身も奥へ入、扨今川しすましたと二階へ上る所を、三五郎やらぬと取付、今川見て汝は三五郎ではないか、三五郎とはきよくもない、お前ゆへに旦那殿は、勘當をうけてと涙ながす、今川驚き、何といふ文藏樣は勘當とや、是太夫樣、勘當もあるに、侍共が大勢よつて、やれ悪性物といふて破竹で追立ますれど、大殿の御意なれば、何ともの給ず、無念ながら阿房拂にならしやつた、それから又弟の帶刀が、悪心をおこし、大殿樣を殺し國を取りゐます、扨それから文藏樣は、あさましい形にならしやつて、宿とても人が貸ませず、

門のかげに寢給ふとも有り、雨が降れば橋の下に夜を明し給ふと語れば、今川は前後もしらず泣悲む、三五郎云は、今日私が參りしは、お子の事で參りました、文藏樣の仰には、藤松を育てたき事なれども、國へ忍び入、親の敵を討ねばならぬ、すれば足手纏ひなればこなたへ渡す、もしいやと思召ならばふびんながら、手にかけ殺すとの給ふと、語れば今川は是は難義な事かなと、一入涙流す、三五郎は私に兎角御返事はなりますまい、追付旦那殿が、こもぞうと成て、こゝへこさらふとある間、ちきにちよつとお話なされませといふ所へ、小ざつまといふ女郎、柏屋へ來り、今川樣はこゝにかと、奥へ行、然る所へ文藏は、こもぞう風山

抱への女郎に關係すとは、廓の掟に背くものなれば法をたゞさんといふ。

●年季手形　年季證文のこと。手形といふは、昔し公私の文書に、其の人の掌に墨を塗り、これを押して後證をしたるより起れる名なり。

●曲もない　興味のないこと。

●足手纏ひ　妻や子の係累に用ふる語。纏絆の纏はりて自由を得ざることを、糸などの手足に搦み附き働きの出來ぬに譬へたるなり。

●ふびん　かはいそうといふに同じ。

●こもぞう　虚無僧の訛り、虚無僧は普化宗に屬し、常に尺八を吹きて四方を遊行す、開祖は風化道者則庵なり。

●米を盆に載せ　勤化物貰ひに米を與ふることは昔の風習なり。今も田舍にて行はる。初穂の心なるべし。

を頼み、其身も同じ尺八の、戀暮や涙なりぬらんと、柏屋が門に立ゐ給ふ、今川それと見るよりも、米を盆にのせ、是やりませふと、指出す手も涙で振ひ聲出す、文藏も涙ながら樣子をいはんとする時、座敷より今川を呼ば、ぜひなく後にと涙ながら座敷へこそは行にける、扨三五郎は文藏に向ひ、かやう〳〵と語る、扨おれはこゝに後までゐるであらふ、汝は内へ皈つて悴をつれて來い、又奥州に首尾はよい案じてたもるなといへと、三五郎を宿へ皈し、扨て虚毛僧風山に□□をいふて皈しけり、さあ嬉しや、是からは人に見付られぬ樣に、しませふと蒲團をきて、巨燵のやうにしてゐる所へ、若紫奥より出て、さてもいつもない巨燵がある、

●情しり　分け知りといふに同じ人情を能く辨へたること。

●身をやつす　戀故に虚無僧などに身をやつすをいふ。

●くさしやつたか　下さりましたかの訛なり。

●くしたか　くれたかなり。

●心中　心中とは男女の中、懇切入魂の睦び二なき事をあらはす語をいふ。此語を用ひるは傾城に限り、他女は用ひざる所なり。其謂れは傾城は萬人の客に對するものなれば、たゞ口のみにて眞實あることを述るも、客は之を皆はざれば、眞實の證據をさし出すなり。其しるしには誓紙、放爪、斷髪斷指、黥等種々あり、粋士といはるゝ者の家には又心中箱といふありて、これら傾城より心中立の證

さらばとあたれば、文藏足を若紫が前へやる、紫肝を潰し、誰もないかと人を呼を、文藏やがて取付、こなたは隱れもない、情しりと聞、か樣に身をやつすに、きよくもないと騙せば、扨そふかと傍へ寄り、顔を見て、こなたは私に文をくさしやつたか、くしたかとは情ないといふ、いや合點がゆかぬ、それならばおれに惚たといふ心中を見しや、心得たと指を切んといへば、扨は心中はしれた、後に逢ませうとおくへ行、さあしすゑした、いくたりでも此手がよい、しかし今川もいつ迄、こゝに置事よと待ゐる所へ、小ざつま出れば、南無三又邪魔と文藏はかくれる、小ざつま見て、誰じやと疑ふ、いや苦しうない、我は君ゆへと涙こぼして

騙す、小さつま聞、何と私に惚れて身をやつし、こゝへ來た、嬉しや〳〵、其やうな心中な人をまつてゐた、しかし何ぞ證據を見しや、文藏いふ證據には、此尺八で五ツの指を、たゝきみしやいでのけんといへば、まて暫しと、小さつまとゞめ、最早心はしれた、幸是に蒲團がある、こゝでちよつと寢よと文藏を捕へ、寢てかゝる、文藏迷惑し是女郎、志は嬉しけれども、餘り急なと、上より抱付ゐる所へ、今川奥より出で、此體を見ると知らず、文藏は小さつまにいふは、君の情は死でも忘れぬ、恭いと後を見れば、今川立てゐる、文藏はつと思ひ、是をひよつとわるう合點すると、さん〳〵の事じや、是女郎、何と重ての事になされて、今

●たゝきみしやいで　たゝき碎いての訛り。

據を取集めて置くとなり。詳しくは「色道大鑑」に見えたり。又相對死の如きは、指や爪の程度を越え一命を互ひに捧げ合ふものなれば此の上の眞實を表する證なし、故にこれを普通心中といふ。されど情死は心中の極致なれども、心中は必ずしも情死するに限らざると前の解にて知るべし。

日は許して下され、小さつま聞、いやどうでもと顏を上げ今川を見て、合點〳〵、是々、そこな男、扨は今川樣の見てじやによつて、羞しいと思ふて寢やらぬの、是今川さまあの男のかはゆいといふは、すいりやうしてくだんせ、命でもやりませふ、あの男も私に指切も古い、尺八で五ツの指をたゝきみしやいで見せふといはれ、か樣な心中じや、今川樣ちと取持て下さんせといふ、文藏迷惑し是々女郎、こなたは餘り念頃過ぎて氣の毒なといへば、其いやがり顏がない、好いたとしなだれかゝる、今川は是小さつま殿私が取持ませふと蒲團を着せ寢さし、文藏に取付さま〳〵怨をいふとて、小さつまをとん〳〵と踏めば、小さつま誰じやと起き、

●指切も古い　指切り髮切りの心中は誰もする事なれば、陳腐なり新しく尺八にて指をたゝき碎かんといふ。

●念比過ぎて氣の毒　惡女の深なさけは有難迷惑なり。

●いやがり顏がない　文藏の嫌がる顏が又となう好ましとなり。

●きついと　上方詞、人の奢りたる時褒める時などに、きついこつちやなどいふ。

腹を立るを、文藏詫をすれば、□□らは堪忍する、扨是今川樣、今日は定めてしつぽりでござんしよ、今川ははてやくたいもないとといふ、小さつま聞、いや〳〵隱して逢が面白いげなといへば、文藏聞、申女郎樣、あの女郎も戀があるかと尋る、あるも〳〵きついとと、新兵衞と今日こゝで逢とを語り、よい心中でないかといふ、文藏驚き、扨々其樣な事はする物はない、しかし又□□□□るとじや、まづ主と念頃すれば、朝夕の菜に違ひがある、はや明日からでも、其儘鰤の樣な物ならば一切に、五分づゝ太きに切ば、十切のまへで五寸の違ひが有、又精進なれば新兵衞が手づからふなどを、油揚にして太夫にすへる、何がふの大きなな

●むさいしおるな　きたないとをむさいといふ。穢らはしいとしおるな。

●よい加減につくすな　加減にの下へ「阿房」もしくは「馬鹿」の字を入れて見るべし。

●くされ　上方詞、しくされ、おきくされなど、關東のきゝやアが

れば、油で上れば、太皷程にふくれる、しかしふくれても中はからでござる、今川の惡性殿といへば、今川聞、是にはたんと云譯がござる、ぬかすまい、己ゆへに、此如くあさましうなつた、殊子までであるでないか、今迄心を盡し□□□□犬も馴染ば尾を振るは、いやいやとかく新兵衞と念頃なされと、振切を取付ば、むさいしおるなとつきたふし、傍へ退く、今川いふは、最早云分はないか、まちつといや、口があるいはいでは、是文藏殿、私は今日新兵衞に逢ふはの、何ぼういやなれども、こなたと添たさにといへば、文藏腹を立て、よい加減につくすな、已新兵衞と物しをつて、其上り膳が何の嬉からふ、是まあ聞くされ、おとこ、新兵衞